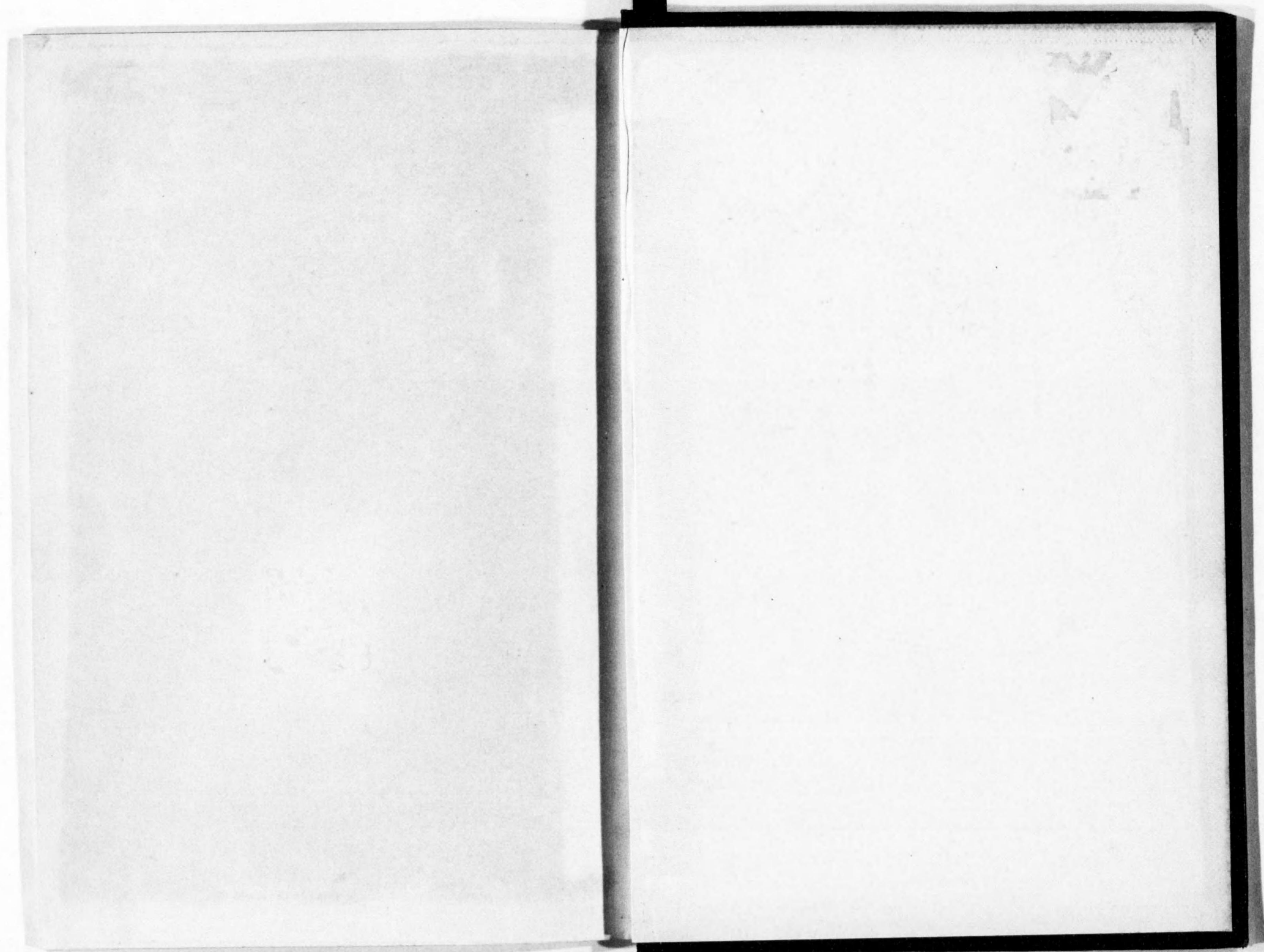


121  
2  
41

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始





山田松蔭全集

吉田松蔭全集

東京 明治堂

山口縣教育會編纂

吉田松陰全集

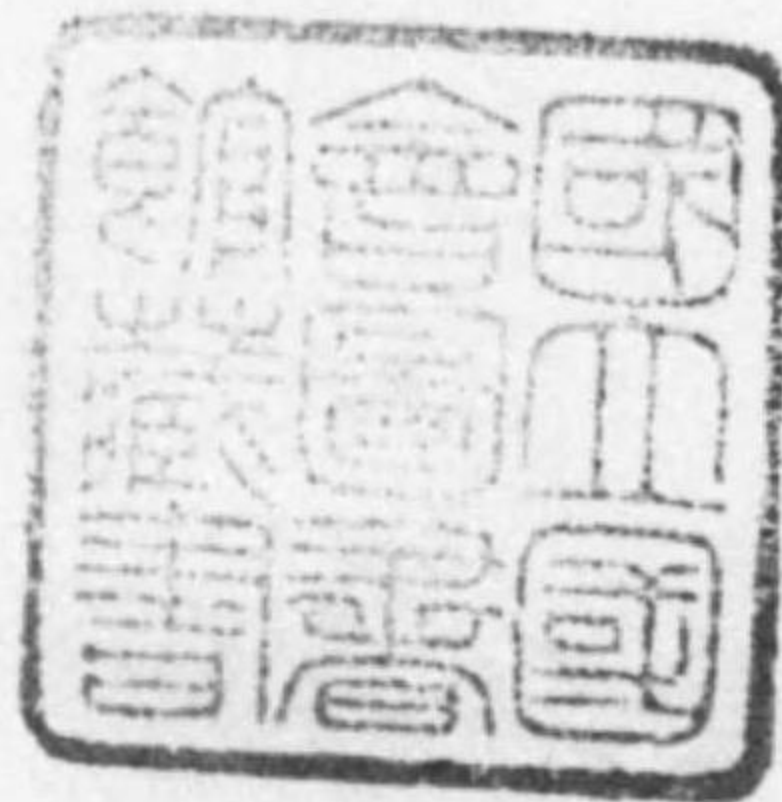
第六卷



岩波書店刊行

書簡篇の二

a/21  
41



29029

至誠而不動者云々（萩市松陰神社蔵）

松陰の生涯は、至誠の工夫に於て、一貫せられた。而もその究極するところ、願はくは身を以て之を驗せむと言ふに至り、森嚴襟を正さしめるものがある。この小片は、安政六年五月十八日、即ち江戸に檻送せられる數日前に、松下村塾の後繼者小田村伊之助（名は哲、字は士毅、號は彝、堂後の男爵榊取素彦）に贈つたものである。此語他日驗あらば云々の附片も、同時に書かれたものであらうが、この兩片が今日殘存するところに、至誠の行は松陰に於て完成せられたことを證明するものと言はねばならぬ。



諸友に與ふ

(東京市榊取三郎氏藏)

安政六年二月萩野山獄中から、松下村塾生を戒め

た書簡である。「氣魄の源を慎言謹行に置き、血氣

暴怒を氣魄と區別するところ、青年教育者の態度

曠として犯し難いものがある。

(本巻第六六二號参照)



善名板云、故、情、示、一、等、  
 平暗味、暗、年、時、等、心、減、  
 善、法、所、氣、眼、名、身、漸、元、身、下、  
 八十、年、日、後、友、者、板、刺、者、之、圖、亦、在、  
 治、名、敷、大、三、光、等、三、三、法、安、氣、魂、  
 兼、若、一、也、身、知、心、集、氣、心、氣、身、  
 體、又、氣、物、如、雲、之、無、也、給、身、者、下、  
 言、外、之、年、時、大、以、用、身、一、言、七、不、  
 一、言、心、下、世、世、如、氣、婦、人、身、女、如、也、  
 七、が、氣、魂、一、身、之、味、余、誰、り、身、氣、候、等、  
 ナリ、テ、大、身、魂、出、之、三、別、大、法、候、  
 鉄、櫃、守、の、面、月、者、凡、之、一、佛、去、月、  
 大、身、者、一、滴、同、一、滴、佛、身、信、不、先、  
 六、が、氣、魂、一、身、之、大、身、之、佛、已、絶、法、  
 一、言、り、衆、不、見、佛、體、性、法、財、  
 實、踐、一、志、又、覺、候、分、一、教、十、所、  
 祝、之、心、ナ、カ、レ、  
此、又、實、平、也、  
 佛、身、無、氣、集、終、  
 佛、身、無、氣、集、終、

(本番第六六二號巻別)

鄭子丁張丁兼ひまのひもる。

曇慈寺屋敷と國原主ふところの古手焼首者(惣裏)

六番頭ひもる。屋敷の萬寺附言頼首二番も血縁

安樂六平二且蘇裡山屋中心の寺子村屋主寺無也

(東京市掛東三頭丸巻)

福文二興ふ

堀江克之助に興ふ

(京都帝國大學尊經堂藏)

これは安政六年十月十一日、江戸傳馬町獄中に於

て、同囚堀江に贈つた書簡の本文である。原本に

はなほ數行の追白がある。松陰の國家に對する

信念を端的に表明したもので、この種の文獻の最

高峰である。而もこれが平素松下村塾生と相勵

み候一論であつたことを思はねばならぬ。

(本巻第八〇七號參照)



永 訣 書 (森市松陰神社蔵)

安政六年十月二十日、死刑の宣告近きを知つて、

實父杉百合之助、叔父玉木文之進、家兄杉梅太郎

(原文、宛名の第三行「家大人は家大人」の誤記であら

う)に宛てた永訣書である。「親思ふあゝろよ

ほさる親あゝろ」云々の絶唱も亦この中にある。

一讀まことに哀切至痛であるが、また永遠の人

の心構、泰然自若たるものあるを感じしめられ、

る。なほ森市松陰神社の神主はこの書の末尾

に書かれてある通りになつて居る。

(本巻第八一二號参照)



吉田松陰全集 第六卷目次

口 繪

書簡篇の二

安政五年

安政六年

萬延以後

第五卷補遺

一

一七三

四三九

四三三

### 解題并凡例

一、本篇には、(イ)松陰より某宛の書簡、(ロ)松陰と某と往復の書簡を主とし、(ハ)某より松陰宛の書簡並に、(ニ)某より某宛の書簡中、特に松陰に關する記事あるものを、参考として收めた、但漢文書簡中已に述作篇(主として詩文稿)及其他の文書類に收めたものは除いてある、又(イ)ロは大型活字を用ゐる、(ハ)ニは表題の上に×印を施し、本文には小型活字を用ゐる主副を明にした、尤(ロ)の場合に、松陰が同一紙を利用し、行間又は餘白に加筆して返信したる場合には、活字の大小を顛倒した場合もある、

一、配列は、すべて年代月日順である、但日附が不確のものは、某年月日頃(初)(末)、又は某年春(夏)(秋)(冬)、或は某月上旬(中旬)(下旬)、某々以前(以後)等の字句を使用し、概ね確定年月日の後に置いてある、兩年又は兩月に互りて確定し難きものは、前年又は前月の終りに置いた、

本卷は安政五年より以後全部である、但し本卷末には第五卷發行後發見されたる新資料若干を補遺として收めた、従つて今後發見の資料はすべて、第十卷補遺に收むる豫定である、

一、表題は、(イ)の場合には、「松陰より」を省き、單に「某に與ふ」又は「贈る」とし、(ハ)の場合には「某より」として「松陰宛」を省いた、

表題に用ゐた姓名は、成るべく世によく知れ渡りたるものとし、原文中にある姓名略稱等には處々傍註を施してあ

- る、
- 一、原本に、署名年月日の記載がないものは、筆蹟及文の内容、所藏者等の關係を考究して推定したものである、尤も活版本を引用した場合等には、其編者の意見に従つた場合もあるが、今回新に表題年月を改正したものもある、
  - 一、本篇使用の原本は、主として真蹟によるも、真蹟のない場合には寫本、寫本のない場合には活字本によつた、又原本を見る能はざる場合には、寫真によつたものもある、
  - 一、原本に( )形の括弧を使用してある場合には、委員使用の括弧と混雜するから「」形に改めた、又「も」は「と」に讀ませ、「ろ」「く」は常用活字にないから皆「そ」「にて」と變へた、尙ほ漢文書簡以外は讀點は原本にあるもの以外は、原則として附けざることにし、特に難讀及び誤讀の恐れある場合のみに施すこととした、
  - 一、誤字・脱字・宛字・假名遣等の誤りは、概ね傍註したが、松陰以外の書簡中、その煩に堪へないものは略した場合もある、

(委員 廣瀬豊)

吉田松陰全集 第六卷細目次 (番號数字の下にX印を附したものは松陰以外の書簡である)

安政五年	
三九四 月性に與ふ	安政五年正月四日……………一
三九五 秋良敦之助に贈る	正月六日……………二
三九六 月性に與ふ	正月十日……………二
三九七 月性に與ふ	正月十一日……………三
三九八 佐世八十郎 <small>前原一誠</small> に與ふ	正月十二日……………三
三九九 月性に與ふ	正月十九日……………四
四〇〇 肥後藩士某に贈る <small>(草稿)</small>	正月廿二日……………五
四〇一 X小國剛藏より竹石某に贈る	正月廿六日……………六
四〇二 佐世八十郎に與ふ	正月廿九日……………八
四〇三 X小國剛藏より	二月九日……………八
四〇四 森田節齋に贈る	二月十九日……………一〇



四〇五	月性に與ふ	安政五年二月十九日	二
四〇六	桂小五郎に與ふ	二月十九日	二
四〇七	長原武に與ふ	二月廿八日	三
四〇八	久坂玄瑞に與ふ	二月廿八日	三
四〇九	月性に與ふ	二月	三
四一〇	月性に與ふ(草稿)	三月一日(カ)	三
四一一	叔父竹院に贈る	三月三日頃	三
四一二	高杉晋作より(カ)	三月四日(カ)	三
四一三	小國剛藏に與ふ(カ)	三月十日	三
四一四	久坂玄瑞に與ふ	三月十一日	三
四一五	久坂玄瑞より	三月十八日	三
四一六	横井・宮部・丸山・佐々・今村に贈る	三月廿四日	三
四一七	小國剛藏に與ふ	三月廿八日	三
四一八	高津平藏より	三月廿八日	三
四一九	久坂玄瑞に與ふ(カ)	春	三

安政五年春頃(カ)

四二〇	佐世八十郎より	四月初日	六
四二一	小國剛藏に與ふ	四月八日	六
四二二	松浦松洞より	四月十日以前	七
四二三	高杉晋作より	四月十日	六
四二四	高杉晋作より	四月十二日	六
四二五	品川彌二郎に與ふ	四月十二日	六
四二六	月性に與ふ	四月十三日	六
四二七	高杉晋作より	四月十四日	六
四二八	土屋蕭海に與ふ	四月十七日	六
四二九	某に贈る	四月十八日	六
四三〇	森田節齋に贈る	四月廿六日(カ)	六
四三一	高杉晋作より	四月廿九日	六
四三二	小國剛藏に與ふ	四月	六
四三三	須佐兩忠士に贈る	五月十日以前	六
四三四	月性より		六

四三五	×土屋蕭海より	安政五年五月十四日	三六
四三六	萩野時行 <sup>本</sup> に與ふ	五月十七日	三九
四三七	中谷正亮に與ふ	五月頃	四〇
四三八	久坂玄瑞に與ふ	六月一日	四一
四三九	某に與ふ	六月十九日	四二
四四〇	久坂玄瑞に與ふ	六月十九日	四三
四四一	久坂玄瑞に與ふ	六月十九日	四四
四四二	某に與ふ	六月廿八日	四五
四四三	×高杉晋作より	夏	四六
四四四	久坂玄瑞に與ふ	七月以前	四七
四四五	桂小五郎・赤川淡水・久坂玄瑞に與ふ	七月六日	四八
四四六	×中谷正亮より	七月十日	四九
四四七	桂小五郎に與ふ	七月十日	五〇
四四八	前田孫右衛門と往復	七月十一日	五一
四四九	前田孫右衛門と往復	七月十二日	五二
		七月十三日	五三

四五〇	×萩野時行より	安政五年七月十六日	五四
四五一	某に與ふ	七月十六日	五五
四五二	×中谷正亮より	七月中旬	五六
四五三	益田彈正に贈る	七月中旬頃	五七
四五四	×土屋蕭海より	七月廿二日	五七
四五五	中谷茂十郎より中谷正亮に贈る(松陰筆)	七月廿三日	五八
四五六	×土屋蕭海より	七月廿三日	五八
四五七	×中谷正亮より	七月廿四日以前	六〇
四五八	某に與ふ	七月廿四日	六一
四五九	×久坂玄瑞より	七月廿四日	六二
四六〇	×久坂玄瑞より	七月廿五日	六三
四六一	福原清介・中村道太郎・中谷正亮に與ふ	七月廿六日	六四
四六二	×前田孫右衛門より(カ)	七月廿六日	六四
四六三	×中谷正亮より	七月廿七日	六五
四六四	久坂玄瑞に與ふ	七月廿七日	六六



四九五	×高杉晋作より	安政五年十月六日頃	一二
四九六	肥後藩士某に與ふ	十月八日	九
四九七	×飯田正伯より	十月八日	一〇〇
四九八	×中谷正亮より	十月十一日	一〇一
四九九	益田彈正に贈る	十月十二日	一〇三
五〇〇	益田彈正に贈る	十月十三日	一〇三
五〇一	益田彈正に贈る	十月十四日	一〇四
五〇二	×松浦松洞より	十月十四日	一〇四
五〇三	×高杉晋作より	十月十五日以前	一〇五
五〇四	×久坂玄瑞より	十月十五日	一〇六
五〇五	益田彈正に贈る	十月十五日	一〇七
五〇六	益田彈正に贈る	十月十八日	一〇七
五〇七	來嶋又兵衛に贈る	十月十九日	一〇八
五〇八	大原三位に贈る	十月廿一日	一〇〇
五〇九	小野爲八に與ふ	十月廿二日	一一三

五一〇	×入江杉藏より吉田榮太郎に贈る	安政五年十月廿三日	一一三
五一一	益田彈正に贈る	十月廿九日	一一三
五一一	某に贈る	十月廿九日頃(カ)	一一四
五一一	某に贈る	十月末	一一四
五一三	小國剛藏に與ふ	十一月二日	一一六
五一四	生田良佐に與ふ	十一月三日	一一六
五一五	佐世八十郎と往復	十一月四日	一一七
五一六	増野徳民に與ふ	十一月四日	一一七
五一七	周布政之助に贈る	十一月六日	一一八
五一八	前田孫右衛門に贈る	十一月六日	一一九
五一九	佐世八十郎に與ふ	十一月六日	一二〇
五二〇	土屋蕭海に與ふ	十一月七日	一二〇
五二一	中村道太郎に與ふ	十一月八日(カ)	一二一
五二二	某に與ふ	十一月十日	一二一
五二三	某に與ふ	十一月上旬	一二三
五二四	×久坂玄瑞より	十一月十四日	一二五

五二五 來原良藏に與ふ  
 五二六 × 來原良藏より  
 五二七 生田良佐に與ふ  
 五二八 大谷茂樹に與ふ  
 五二九 山田亦介に贈る  
 五三〇 高杉晋作に與ふ  
 五三一 某に贈る  
 五三二 小田村伊之助と往復  
 五三三 某に與ふ  
 五三四 × 玉木文之進より藩吏某に贈る  
 五三五 某に與ふ  
 五三六 村塾諸君に與ふ  
 五三七 × 生田良佐より  
 五三八 小田村伊之助に與ふ  
 五三九 × 佐世八十郎より

安政五年十一月十五日

十一月十五日……………一六  
 十一月十五日……………一七  
 十一月十七日……………一八  
 十一月十七日……………一九  
 十一月十七日……………二〇  
 十一月十八日……………二〇  
 十一月中旬頃……………二一  
 十一月廿日……………二二  
 十一月廿四日……………二三  
 十一月下旬……………二三  
 十一月下旬……………二四  
 十一月廿九日……………二五  
 十一月末(カ)……………二五  
 十二月初日……………二六  
 十二月六日頃……………二七

五四〇 小田村伊之助・久保清太郎に與ふ  
 五四一 高杉晋作に與ふ  
 五四二 品川彌二郎に與ふ  
 五四三 × 野村和作より入江杉藏に贈る  
 五四四 × 入江杉藏より品川彌二郎に贈る(カ)  
 五四五 × 高杉・久坂・飯田・尾寺・中谷より  
 五四六 佐世八十郎に與ふ  
 五四七 × 尾寺新之丞より  
 五四八 前田孫右衛門宛内願書の要旨覺  
 五四九 佐世八十郎に與ふ  
 五五〇 × 杉梅太郎より前田孫右衛門に贈る(松陰代筆)  
 五五一 佐世八十郎に與ふ  
 五五二 佐世彦七に贈る  
 五五三 吉田榮太郎と往復  
 五五四 × 佐世八十郎より

安政五年十二月八日

十二月八日……………二七  
 十二月九日……………二八  
 十二月十日……………二九  
 十二月十一日……………二九  
 十二月十一日……………三〇  
 十二月十三日……………三〇  
 十二月十三日……………三一  
 十二月十三日……………三二  
 十二月十四日……………三二  
 十二月十五日……………三三  
 十二月十六日……………三三  
 十二月十六日……………三四  
 十二月十六日頃……………三四

五五五	來島又兵衛・桂小五郎に贈る	安政五年十二月十九日	一四
五五六	×佐世八十郎より	十二月中旬	一四
五五七	×入江杉藏より	十二月廿日頃	一五〇
五五八	×田原莊四郎より	十二月廿日	一五一
五五九	大原三位に贈る	十二月廿一日	一五四
五六〇	×入江杉藏より	十二月廿二日	一五六
五六一	×佐世八十郎より岡部富太郎に贈る	十二月廿四日	一五六
五六二	×岡部富太郎より	十二月廿四日	一五七
五六三	桂小五郎よりの書を佐世八十郎に轉示	十二月廿五日	一五八
五六四	桂小五郎に與ふ	十二月廿五日	一五六
五六五	×佐世八十郎より	十二月廿六日	一五九
五六六	某に與ふ	十二月廿六日以前	一六〇
五六七	×作間時忠三郎より	十二月廿六日以前	一六〇
五六八	父杉百合之助に贈る	十二月廿七日	一六一
五六九	×入江杉藏より	十二月廿八日	一六三

五七〇	入江杉藏・小田村伊之助に與ふ	安政五年十二月廿九日	一六四
五七一	入江杉藏に與ふ	十二月廿九日	一六五
五七二	×生田良佐より	十二月	一六五
五七三	某に贈る	冬	一六六
五七四	益田彈正に贈る	安政五年(カ)	一六七
五七五	×土屋蕭海より	安政五年某月廿一日	一六八
五七六	×小田村伊之助より	安政五年以前	一六八
五七七	土屋蕭海に與ふ	安政五年以前	一六九
五七八	×土屋蕭海より	安政五年以前	一六九
五七九	×土屋蕭海より	安政五年以前	一七〇
五八〇	×土屋蕭海より	安政五年以前	一七〇
五八一	松岡良哉に贈る	安政五年以前	一七一

安政六年

五八二 岡部富太郎に與ふ

安政六年正月三日……………一七三

五八三	父杉百合之助に贈る	安政六年正月三日	一七三
五八四	×入江杉藏より	正月四日	一七四
五八五	小田村伊之助と往復	正月四日	一七四
五八六	小田村伊之助に與ふ	正月六日	一七六
五八七	小田村伊之助と往復	正月六日	一七六
五八八	中谷正亮に與ふ	正月六日	一七七
五八九	飯田正伯に與ふ	正月六日以後	一七八
五九〇	×吉田榮太郎より	正月七日	一七九
五九一	岡部富太郎等に與ふ	正月七日	一八〇
五九二	小田村伊之助と往復	正月九日	一八〇
五九三	×入江杉藏より	正月九日	一八一
五九四	×飯田正伯より來島又兵衛・桂小五郎に贈る	正月十日	一八二
五九五	佐世八十郎・岡部富太郎・入江杉藏に與ふ	正月十日	一八三
五九六	兄杉梅太郎に贈る	正月十一日	一八四
五九七	某に與ふ	正月十一日	一八五

五九八	兄杉梅太郎に贈る	安政六年正月十二日	一八六
五九九	兄杉梅太郎に贈る	正月十三日	一八七
六〇〇	小田村伊之助に與ふ	正月十三日	一八九
六〇一	叔父玉木文之進に贈る	正月十三日	一八九
六〇二	某に與ふ	正月十八日(カ)	一九〇
六〇三	入江杉藏に與ふ	正月十八日	一九一
六〇四	岡部富太郎に與ふ	正月十九日	一九二
六〇五	岡部富太郎・入江杉藏・増野徳民に與ふ	正月十九日	一九四
六〇六	岡部富太郎・入江杉藏・増野徳民に與ふ	正月十九日	一九四
六〇七	入江杉藏に與ふ	正月十九日	一九五
六〇八	久保清太郎に與ふ	正月廿一日	一九六
六〇九	同志諸友に與ふ	正月廿一日	一九六
六一〇	小田村伊之助に與ふ	正月廿二日	一九八
六一一	入江杉藏に與ふ	正月廿三日	一九九
六一二	入江杉藏に與ふ	正月廿三日	一九九

六二八	入江杉藏に與ふ	安政六年正月廿三日以後	三〇二
六二九	入江杉藏より	正月廿四日	三〇三
六三〇	船越清藏に贈る	正月廿五日以前	三〇三
六三一	兄杉梅太郎に贈る	正月廿五日	三〇四
六三二	兄杉梅太郎に贈る	正月廿五日	三〇四
六三三	小田村伊之助に與ふ	正月廿五日	三〇五
六三四	入江杉藏に與ふ	正月廿五日	三〇六
六三五	飯田正伯より來島又兵衛に贈る	正月廿六日	三〇六
六三六	高橋藤之進に與ふ	正月廿七日以後	三〇七
六三七	高橋藤之進より	正月廿八日	三〇八
六三八	入江杉藏に與ふ	正月廿九日	三〇九
六三九	佐世八十郎に與ふ	正月卅日	三〇九
六四〇	入江杉藏に與ふ	正月卅日	三〇九
六四一	入江杉藏に與ふ	正月卅日	三〇九
六四二	入江杉藏に與ふ	正月卅日	三〇九

安政六年二月二日

六二八	入江杉藏に與ふ	安政六年二月二日	三一一
六二九	入江杉藏より	二月二・三日頃	三一二
六三〇	船越清藏に贈る	二月二・三日(カ)	三一二
六三一	兄杉梅太郎に贈る	二月三日	三一二
六三二	兄杉梅太郎に贈る	二月四日	三一二
六三三	小田村伊之助に與ふ	二月四日	三一二
六三四	入江杉藏に與ふ	二月四日	三一二
六三五	飯田正伯より來島又兵衛に贈る	二月五日	三一二
六三六	高橋藤之進に與ふ	二月八日	三一二
六三七	高橋藤之進より	二月八日	三一二
六三八	入江杉藏に與ふ	二月上旬	三一二
六三九	佐世八十郎に與ふ	二月九日頃	三一二
六四〇	入江杉藏に與ふ	二月九日以後	三一二
六四一	入江杉藏に與ふ	二月十二日(カ)	三一二
六四二	入江杉藏に與ふ	二月十三日	三一二



六四三	×入江杉藏より	二月十三日頃	三三
六四四	岡部富太郎に與ふ	二月十三日以後	三三
六四五	入江杉藏に與ふ	二月十四日(カ)	三三
六四六	久保清太郎に與ふ(カ)	二月十五日以前	三三
六四七	某に與ふ	二月十五日以前	三三
六四八	高杉晋作に與ふ	二月十五日以前	三四
六四九	入江杉藏に與ふ	二月十五日	三七
六五〇	岡部富太郎に與ふ	二月十九日	三九
六五一	小田村伊之助に與ふ	二月中旬頃	三九
六五二	×作間忠三郎より三井新吉に贈る	二月廿日	三〇
六五三	兄杉梅太郎と往復	二月廿三日	三一
六五四	入江杉藏に與ふ	二月廿三日	三一
六五五	某に贈る	二月廿三日頃	三一
六五六	佐世八十郎に與ふ	二月廿四日	三四
六五七	兄杉梅太郎に贈る	二月廿八日	三四

六五八 ×入江杉藏より藩吏某に贈る

安政六年二月廿八日

三五

六五九	入江杉藏に與ふ	二月廿九日	三七
六六〇	松浦松洞と往復	二月某日	三七
六六一	岡部富太郎に與ふ	二月某日	三六
六六二	諸友に與ふ	二月某日	三九
六六三	野村和作に與ふ	二月(カ)	三九
六六四	父杉百合之助と往復	三月二日	四〇
六六五	品川彌二郎と往復	三月六日(カ)	四〇
六六六	作間忠三郎・増野徳民・品川彌二郎に與ふ	三月七日	四一
六六七	某に與ふ	三月八日	四一
六六八	叔父玉木文之進に贈る	三月九日	四二
六六九	入江杉藏の母滿智子に贈る	三月十一日	四三
六七〇	入江杉藏に與ふ	三月十二日	四四
六七一	入江杉藏に與ふ	三月十二日	四四
六七二	品川彌二郎に與ふ	三月十三日	四五

六七三	増野徳民に與ふ	三月十三日頃	二四
六七四	品川彌二郎に與ふ	三月十四日	二四
六七五	作間忠三郎・増野徳民・品川彌二郎に與ふ	三月十四日	二四
六七六	入江杉藏より	三月十四日	二四
六七七	久保清太郎に與ふ	三月十五日	二四
六七八	入江杉藏より守永某に贈る	三月十六日	二四
六七九	入江杉藏に與ふ	三月十六日	二五〇
六八〇	入江杉藏に與ふ	三月十六日以後	二五〇
六八一	増野徳民に與ふ	三月十七日	二五三
六八二	久保清太郎に與ふ	三月十七日	二五三
六八三	入江杉藏より	三月十七日	二五三
六八四	入江杉藏に與ふ	三月十七日以前	二五三
六八五	久保清太郎に與ふ	三月廿日	二五六
六八六	入江杉藏より	三月廿四日	二五六
六八七	入江杉藏より小田村伊之助に贈る	三月廿四日	二五九

六八八×高杉晋作より久坂玄瑞等に贈る

安政六年三月廿五日

二六〇

六八九 小田村伊之助・岡部富太郎に與ふ

三月廿六日

二六二

六九〇 野村和作・入江杉藏に與ふ

三月廿六日

二六三

六九一 來島又兵衛・小田村伊之助・桂小五郎・久保清太に贈る

三月廿六・七日頃

二六五

六九二 小田村伊之助・久保清太郎・久坂玄瑞に與ふ

三月廿九日

二六六

六九三 同志某に與ふ

三月廿九日

二七〇

六九四 小田村伊之助・久保清太郎に與ふ

三月末頃

二七一

六九五 久保清太郎・兄杉梅太郎に贈る

三月頃

二七四

六九六 某に與ふ

春

二七六

六九七 品川彌二郎に與ふ

春

二七六

六九八 某に與ふ

春頃

二七七

六九九 増野徳民に與ふ(カ)

春頃

二七八

七〇〇 同志某に與ふ

三月下旬  
或四月下旬

二七八

七〇一 増野徳民に與ふ

四月朔日(カ)

二七九

七〇二×高杉晋作より久坂玄瑞に贈る

四月朔日

二七九

七〇三	野村和作に與ふ	安政六年四月二日	二八一
七〇四	野村和作に與ふ	四月四日	二八四
七〇五	北山安世に與ふ	四月六日	二八六
七〇六	野村和作に與ふ	四月七日	二八六
七〇七	北山安世に與ふ	四月七日	二八七
七〇八	岡部富太郎に與ふ(カ)	四月九日	二八八
七〇九	岡部富太郎に與ふ	四月九日(カ)	二九〇
七一〇	兄杉梅太郎に贈る	四月十日	二九一
七一一	野村和作・増野徳民に與ふ	四月十日(カ)	二九三
七一二	久坂玄瑞に與ふ	四月十一日	二九三
七一三	野村和作に與ふ	四月十一日(カ)	二九四
七一四	北山安世に與ふ	四月十二日	二九四
七一五	品川彌二郎に與ふ	四月十二日	二九四
七一六	某に與ふ	四月十二日頃	二九五
七一七	妹千代に與ふ	四月十三日	二九五

七二八	野村和作に與ふ	安政六年四月十四日	二九八
七二九	品川彌二郎に與ふ	四月十七日	二九五
七三〇	×飯田正伯より久坂玄瑞に贈る	四月廿一日	二九八
七三一	×久坂玄瑞より杉梅太郎に贈る	四月廿二日以前	二九八
七三二	野村和作に與ふ	四月廿二日	二九八
七三三	小田村伊之助に與ふ	四月廿二日	二九八
七三四	品川彌二郎に與ふ(カ)	四月廿二日以後	二九八
七三五	品川彌二郎に與ふ	四月廿二日頃	二九八
七三六	入江杉藏に與ふ	四月十二日	二九八
七三七	×佐世八十郎より	四月十二日	二九八
	附 入江杉藏・野村和作に與ふ	四月廿三日	二九八
	×入江杉藏より	四月廿七日	二九八
	品川彌二郎に與ふ	五月四日	二九八
七二八	某に贈る	四月廿八日以後	二九八
七二九	×毛利定廣より益田彈正に與ふ	四月某日	二九五

- 七三〇 野村和作に與ふ
- 七三一 野村和作に與ふ
- 七三二 品川彌二郎に與ふ
- 七三三 高杉晋作に與ふ
- 七三四 某(高杉)に與ふ
- 七三五 入江杉藏と往復
- 七三六 入江杉藏に與ふ
- 七三七 野村和作と往復
- 七三八 某に與ふ
- 七三九 入江杉藏に與ふ
- 七四〇 久保清太郎に與ふ
- 七四一 高杉晋作に與ふ
- 七四二 入江杉藏より
- 七四三 土屋蕭海に與ふ
- 七四四 土屋蕭海に與ふ

安政六年四月頃

四月頃	三三三
四月頃	三三六
四月頃	三三八
四月頃	三三八
四月頃	三三〇
五月二日	三三一
五月四日	三三三
五月四日	三三四
五月上旬或四 月下旬(カ)	三三四
五月上旬	三三五
五月十二日	三三六
五月十三日	三三七
五月十三日	三三〇
五月十三日	三三二
五月十三日	三三三

- 七四五 土屋蕭海に與ふ
- 七四六 諸妹に與ふ
- 七四七 父杉百合之助に贈る
- 七四八 小田村伊之助等に與ふ
- 七四九 増野徳民に與ふ
- 七五〇 入江杉藏より(松陰加筆して  
品川に與ふ)
- 七五一 野村和作より
- 七五二 入江杉藏より(松陰加筆して  
品川に與ふ)
- 七五三 入江杉藏より(松陰加筆して  
作問三郎に與ふ)
- 七五四 入江杉藏兄弟に與ふ
- 七五五 入江杉藏に與ふ
- 七五六 土屋蕭海より秋良敦之助に贈る
- 七五七 松下村塾受業生と往復
- 七五八 松下村塾受業生に與ふ
- 七五九 叔父玉木文之進に贈る

安政六年五月十三日

五月十四日	三三四
五月十五日	三三六
五月十五日	三三七
五月十五日	三三七
五月十五日	三三八
五月十四・五日頃	三三八
五月十五日	三三九
五月十五日	三三九
五月十五日	三四〇
五月十七日	三四一
五月十七日	三四三
五月十八日	三四四
五月十八日	三四四
五月十八日(カ)	三四五
五月十九日	三四五

七六〇	小田村伊之助等に與ふ	安政六年五月十九日(カ)	三〇六
七六一	赤川淡水より	五月廿二日以前	三〇七
七六二	赤川淡水に與ふ	五月廿二日	三〇七
七六三	某に與ふ	五月廿二日	三〇八
七六四	久坂玄瑞より高杉晋作に贈る	五月廿四日	三〇八
七六五	尾寺新之丞より小田村伊之助に贈る(カ)	五月廿五日	三〇九
七六六	入江杉藏と往復	五月中下旬	三〇〇
七六七	入江杉藏に與ふ	五月東行前	三〇一
七六八	妹千代に與ふ	五月東行前	三〇二
七六九	入江杉藏より久坂玄瑞に贈る	六月一日	三〇三
七七〇	入江杉藏より久保清太郎に贈る	六月四日	三〇三
七七一	野村和作より久坂玄瑞に贈る	七月八日	三〇四
七七二	高杉晋作に與ふ	七月九日	三〇五
七七三	高杉晋作に與ふ	七月九日頃	三〇五
七七四	高杉晋作・飯田正伯に與ふ	七月十九日頃	三〇七

七七五	高杉晋作に與ふ	安政六年七月十九日	三〇八
七七六	高杉晋作に與ふ	七月中旬	三〇九
七七七	高杉晋作に與ふ	七月中旬	三六一
七七八	高杉晋作に與ふ	七月中旬	三六一
七七九	高杉晋作等に與ふ	七月廿五日	三六三
七八〇	入江杉藏より久坂玄瑞に贈る	七月廿五日	三六四
七八一	高杉晋作に與ふ	八月十三日	三六四
七八二	久保清太郎・久坂玄瑞に與ふ	八月十三日	三六五
七八三	久保清太郎・久坂玄瑞に與ふ	八月十三日	三六九
七八四	高杉晋作より久坂玄瑞に贈る	八月廿三日	三七〇
七八五	堀江克之助に與ふ	八月廿五日	三七一
七八六	堀江克之助に與ふ	八月廿五日	三七三
七八七	鮎澤伊太夫に與ふ	八月下旬(カ)	三七三
七八八	堀江克之助に與ふ	九月六日	三七四
七八九	堀江克之助に與ふ	九月九日	三七六

七九〇	堀江克之助に與ふ	安政六年九月十一日	三七七
七九一	高杉晋作に與ふ	九月十二日	三七九
七九二	高杉晋作に與ふ	九月十五日	三八〇
七九三	久坂玄瑞より入江杉藏に贈る	九月廿一日	三八三
七九四	堀江克之助に與ふ(カ)	九月廿二日	三八三
七九五	入江杉藏より久坂玄瑞に贈る	九月廿三日	三八三
七九六	廣井少吉より久坂玄瑞に贈る	九月廿五日	三八五
七九七	宥長に贈る	九月廿九日	三八六
七九八	久坂玄瑞より入江杉藏に贈る	九月晦日	三八七
七九九	尾寺新之丞に與ふ	十月六日	三九〇
八〇〇	飯田正伯に與ふ	十月六日	三九〇
八〇一	高杉晋作に與ふ	十月六日	三九二
八〇二	高杉晋作に與ふ	十月七日	三九三
八〇三	父兄に贈る	十月七日	三九五
八〇四	堀江克之助に與ふ	十月八日	三九五

八〇五	高杉晋作に與ふ	安政六年十月八日	三九六
八〇六	高杉晋作・飯田正伯・尾寺新之丞に與ふ	十月八日	三九八
八〇七	堀江克之助に與ふ	十月十一日	四〇〇
八〇八	小林民部 <small>良</small> に與ふ	十月十二日	四〇〇
八〇九	入江杉藏より久坂玄瑞に贈る	十月十五日	四〇三
八一〇	尾寺新之丞に與ふ	十月十七日	四〇三
八一一	堀達之助に贈る	十月十七日	四〇五
八一二	父叔兄に贈る	十月廿日	四〇七
八一三	諸友に與ふ	十月廿日頃	四〇八
八一四	飯田正伯・尾寺新之丞に與ふ	十月廿日	四〇九
八一五	入江杉藏に與ふ	十月廿日	四一〇
八一六	入江杉藏に與ふ	十月廿日	四一一
八一七	鮎澤伊太夫より	十月廿二日	四一四
八一八	鮎澤伊太夫に與ふ	十月廿三日	四一五
八一九	小林民部に與ふ	十月廿三日	四一七

八二〇	×内藤萬里助より益田彈正に贈る	安政六年十月廿七日	四八
八二一	×堀江克之助より入江杉藏に贈る	十一月四日	四八
八二二	×久坂玄瑞より入江杉藏に贈る	十一月七日	四八
八二三	×飯田・尾寺より高杉・久保・久坂に贈る	十一月十五日	四三
八二四	×堀江克之助より卜大君に贈る	十一月廿三日	四三
八二五	×高杉晋作より周布政之助に贈る	十一月廿六日	四三
八二六	×來島又兵衛より桂小五郎に贈る	十一月廿七日	四四
八二七	×久坂玄瑞より入江杉藏に贈る	十一月廿八日	四五
八二八	×伊藤靜齋より佐世八十郎に贈る	十一月廿八日	四六
八二九	×入江杉藏より久坂玄瑞に贈る	十二月十二日	四六
八三〇	×堀江克之助より卜・彌兩氏に贈る	十二月十三日	四七

萬延以後

八三一	×小田村伊之助より尾寺新之丞に贈る	萬延元年三月廿九日	四九
八三二	×土井有恪より長原武に贈る	閏三月十七日	四九

八三三	×久坂玄瑞より佐世八十郎・入江杉藏に贈る	萬延元年五月十九日	四二
八三四	×久坂玄瑞より杉百合之助に贈る	六月廿六日	四三
八三五	×久坂玄瑞より入江杉藏に贈る	七月五日	四三
八三六	×杉山松介より山縣小輔に贈る	七月七日	四三
八三七	×久坂玄瑞より杉梅太郎に贈る	七月以後	四三
八三八	×久坂玄瑞より杉梅太郎に贈る	八月十八日	四四
八三九	×久坂玄瑞より入江杉藏に贈る	九月廿四日	四六
八四〇	×久坂玄瑞より妻文に贈る	十一月廿五日	四六
八四一	×久坂玄瑞より入江杉藏に贈る	文久元年四月八日	四六
八四二	×久坂玄瑞より入江杉藏に贈る	六月廿二日	四七
八四三	×久坂玄瑞より入江杉藏に贈る	八月十六日	四八
八四四	×小田村伊之助より桂小五郎に贈る	文久三年五月十六日	四九
八四五	×吉田榮太郎より母幾に贈る	七月六日	四九
八四六	×某より山縣小輔に贈る	元治元年頃	四〇
八四七	×楫取素彦 <small>小田村伊之助より</small> 中尾根政太郎に贈る	明治十三年正月廿七日	四一

八四八×野村靖より吉田庫三に贈る	明治二十四年頃	四二
八四九×杉民治 <small>梅太</small> より吉田庫三に與ふ	明治三十五年三月十四日(カ)	四三
八五〇×杉民治より吉田庫三に與ふ	明治三十八年九月七日(カ)	四三
八五一×杉民治より吉田庫三に與ふ	明治三十八年九月廿四日(カ)	四三
八五二×杉民治より吉田庫三に與ふ	十月廿三日(カ)	四四
八五三×杉民治より吉田庫三に與ふ	十二月廿四日	四四
八五四×杉民治より吉田庫三に與ふ	明治三十八年頃	四四
八五五×杉民治より吉田庫三に與ふ	明治四十一年十月廿五日	四五

第五卷補遺

八五六×葉山高銓より	嘉永四年五月廿七日頃	四五
八五七×香川甫田より土屋蕭海に贈る	嘉永五年春	四五
八五八×宮部鼎藏より杉梅太郎に贈る	四月九日	四五
八五九×山田字右衛門より	夏	四五
八六〇 長井芳之助に與ふ	嘉永六年七月廿三日(カ)	四五

八六一×佐久間 <small>山象</small> より山寺 <small>山常</small> ・三村 <small>山崎</small> に贈る	安政元年四月廿七日	四六
八六二 宮部鼎藏に與ふ	五月廿一日	四六
八六三×黙霖より	安政二年九月	四六
八六四×久坂玄瑞より	安政三年七月廿三日頃	四六





月性に與ふ

安政五年正月四日

松陰在萩松本  
月性在周防國遠崎

松洞生爲三木原翁自寫之罷越候故呈一書候此内ハ度々御手教被ニ成下ニ未レ暇ニ悉奉ニ復失禮奉ニ恐入ニ候歲寒窓ニ入手仕候写録仕度ニ付暫留申候○榮太郎(吉田)字無逸名秀実と申もの先頃写贈り候蘭夷密報其後贈り候東武ニ義士ノ事別一片差出候中々安坐ニるハ澄ヌ時勢到來歟と奉レ存候柱生與(小五郎)周布一書も同断○幽囚錄松洞へ託し候處松洞豐筑ニて只様手間取大延引ニ相成申候謹爰呈上仕候 此回校合カテラ一読仕候処何如ニモ蕪陋致方無ニ御座ニ候へ共今更改竄之心もあぐ其儘仕置候○亡友(新三郎)鳥山墓碑入ニ高覽ニ候是ハ例ノ江幡(五郎)ヲ作ニる貴望ニハ合申間布候へ共僕輩交旧、交不レ欲レ變、又知ニ鳥山事ニ者此外無レ之ニ付如レ右候是等ハ他日拜面可ニ尽陳ニ也○清水氏登庸之事ハ定る御承知奉レ存候東武ニ義士吾藩ノ一侍御と実為ニ國家ニ一愉快と存候故不レ憚ニ御苦塊中ニ一賀申上候萬々御海涵奉レ祈候也

正月四日

寅白

尚以僕知己馬関伊藤靜齋も被レ免ニ嚴譴ニ當月内出府之積ニ付松洞も夫ニ合ヒ候様歸府之積ニる大ニ急キ申候也

(徳山町梅原成美氏藏 校合濟◎)

安政五年

一

三九五 秋良敦之助に贈る 安政五年正月六日

松陰在萩松本  
秋良在周防國阿月

此度尊貌を写之た免松洞生貴地へ罷り出候間可然御頼仕候所へ囑短刀記僅致結草二候得共鍛工ノ名及ヒ刀ノ長致忘却候付此段草稿へ御書入御返可被下候委細ハ生ノ口述ニ附候也

正月六日

寅二拜

秋良君 座右

(戊午繪室文箱短刀記参照)

(兵庫縣渡邊得次郎氏藏 校合濟堂)

三九六 月性に與ふ 安政五年正月十日

松陰在萩松本  
月性在周防國遠島

御苦塊中御森寂奉察候此内松洞生御地罷越御厄害之程奉察候松洞へ附し候書中近狀略申上候外可報事も無之候尤も幕府ハ彌墨夷へ降参屬國ヲ甘セラレ候様相見候ニ付各 毛利ノ称号ノ墨ニ汗レヌ工夫ノミ夜白於塾中工夫仕候六十四国ハ墨ニかり候共二国にて守返し候様仕らるる日頃之慷慨も水ノ泡と存候御議論之所委敷洞生へ御示奉待候來月ハ拜眉一議論ト御待仕候

甚輕微之至ニ御座候へ共海苔少シ去ル人ハ貴ヒ候間分贈仕候御啖納可被下候急キ候故家兄無書候

正月十日夜

清狂上人獅坐下

寅二

(神戸市小曾根貞松氏藏 寫眞校合濟堂)

三九七 月性に與ふ

安政五年正月十一日

松陰在萩松本  
月性在周防國遠島

今早清水出足也

十一日追啓

寅

昨夜中谷正亮夏清水氏へ罷越幕府彌墨夷ニ臣さらは二國丈ケ不同意可然と申事并蛙ノ見ヲ捨テ飛耳長目ヲ務ムヘシ(中村)と申事論候所清水氏も大ニ喜決心之色眉睫ニ見レ候由今早正亮來話仕候只彈正大夫已下之議論氣遣敷候故昨夜道太(土屋)松如へ簡候よ松如來り徹宵談申候二人にて政府へ説シ一定之議論ヲ早速清水迄申遣候答ニ御座候何分此間不可無上人不可無秋良一只御出錫ヲ相待候のミ其内四人之新聞被為レ在候ハ、御報知奉待候 傑も清水へ與ニ一書ニ候蘭書墨使ヲ以テ張儀・新衍垣ニ比し清水ニ攻ムルニ屈平・魯連ヲ以テシ候餘り妄論候御序ニ御教示可被下候

(清水圖書は前年十二月九日直日付に在り、今茲出設江戸に向ふ、  
月性は二月廿五日萩に來り松陰に面會す、戊午繪室文箱参照)

(神戸市福本義亮氏藏 校合濟堂)

三九八 佐世八十郎前原一誠に與ふ

安政五年正月十二日

松陰在萩松本  
佐世在長門國船木

此度三子貴地へ被レ参候間可然御頼仕候幕府も已ニ墨夷ノコンシニルニ天下ヲ任セラレ屬國ヲ甘セラル、ヨシ世間ハ鬼もアレ吾二国ノ君子ハ萬々不同意申迄も無レ之事夫ニ付此節志士仁人ノ苦心不ニ大方候何卒宜敷御工夫ハ不レ被レ為レ在候哉安坐シテ居候へ墨臣ニナルナリ委細三子御聞取可被下候事

正月十二日

幽囚録・爰書懸御目一候重輔追悼御頼仕候

佐世八十郎様

二十一回生

(萩市前原彦八氏藏 校合濟堂)

三九九 月性に與ふ

安政五年正月十九日

松隆在萩松本  
月性在周防國遠崎(カ)

爰ニ大ニ困迫仕候事体出來申候先便ニも畧申上候通六十四國ハ悉ク墨夷ニ相成候共二國計ハ確乎トシテ特立シテ天下  
 恢復萬國捷伐ノ基本相成候様ニ同志ト商議仕候處時勢々々と申論起リ道太・松如大ニ不同意尤も松如一夕來宿、道太  
 も一日來話其節ハ同心ノ申分ニ候處尔後大變ニ其說ニ僕等ヲ徒党ヲ結ヒ候様申觸レ又ヲ僕ヲ胸中閑日月ナシト詈リ種々  
 ノ悪言家兄ニ集リ申候而ノ政府ノ諸公ハ陳叔寶ノ遺風ヲ慕レれ候賦詩酒ノ會陸續有レ之候拙者ハ近來ハ丸ニ慷慨ハ打  
 止メ時務も論セズ上人ノ不興ヲ蒙リ候程ニ有レ之候處此節ノ夷情ニるハ中々黙々難レ仕今ハ死生も毀譽も不レ拘一向ニ  
 皇國君家へ一身差上申候而ノ道太・松如不同心ニてハ僕ハ孤立狗死ニ相違無レ之夫も不レ恨候へ共吾死セハ本藩ハ悉ク  
 淪胥ト覺候仍<sup>(良藏)</sup>是來原生至極慕<sup>(良藏)</sup>レシク存候処來原ノ書中ニハ委曲無レ之候へ共墨夷ニ吾國ヲ開イテ貫フヲ愉快トスルニ  
 似<sup>(イソツブ)</sup>リ此所吾師象山甚活眼アリ大意吾國ハ人ヲ開クハ妙左候へハ通信通市も心ノ儘ナリ人ニ開カレ涙出妻<sup>(イソツブ)</sup>吳分ニ  
 迎も國ハ持コタヘ得さるとあり僕服<sup>(イソツブ)</sup>其說<sup>(イソツブ)</sup>又此内ノ伊娑善<sup>(イソツブ)</sup>諭言<sup>(イソツブ)</sup>得と見候へハ一々今日ノ夷情尽セリイカセン左候へ  
 ハ僕ハ一身ハ不<sup>(イソツブ)</sup>足<sup>(イソツブ)</sup>申候へ共神國も吾藩も今日限りニ相成申候上人何卒金革之事ハ去喪ノ義も有レ之事ニ候間早速御

決策御出府ハ出來申間布哉左候ハ、天下之大計一タノ話ニ決度奉<sup>(イソツブ)</sup>レ存候若上人御憐愍無<sup>(イソツブ)</sup>レ之候得<sup>(イソツブ)</sup>レ僕誠ニ可<sup>(イソツブ)</sup>レ恥之至ニ  
 候得共徒然之死ヲ遂ケ天下之士ニ慙笑セラル、ナリ悲夫、慷慨極リ語無<sup>(イソツブ)</sup>倫次ニ候御推讀御垂察奉<sup>(イソツブ)</sup>レ頼候

應接書二卷差出申候ミニストルヲ江都ニオキ萬國ノ通商政府ニ不<sup>(イソツブ)</sup>レ拘勝手ニ出來候へ<sup>(イソツブ)</sup>神州も實ニ是きリニ御座候何  
 とも一措置ナクテ相濟可<sup>(イソツブ)</sup>レ申哉幾重ニ思カヘ候も此時大和魂ヲ発セテハ最早時ハ無<sup>(イソツブ)</sup>レ之様覺申候秋良へ別ニ無<sup>(イソツブ)</sup>書候  
 間近日之措置ハ如何ニ候哉覺束ナク候何卒上人ノ御出府ヲ希候御出府手間取候ハ、御高論之大意相同度奉<sup>(イソツブ)</sup>レ存候二十  
 一回猛士ハ大体膝ヲ屈セヌ男子事ニ沮喪ハセヌ男子ナルガ此度道太・良藏等ニ論<sup>(來原)</sup>ヲキ、志気大ニ沮喪上人ノ前ニ膝ノ  
 屈スルヲ不<sup>(イソツブ)</sup>覺候併<sup>(イソツブ)</sup>是も一腔ノ忠ノ字カと御慙笑可<sup>(イソツブ)</sup>レ被<sup>(イソツブ)</sup>レ下候

正月十九日

二十一回生

清狂老上人座下

(原本所藏者不明 寫眞校合濟堂)

四〇〇 肥後藩士某に贈る(草稿)

安政五年正月廿二日

松隆在萩松本

爾來諸君彌御精鍊奉<sup>(イソツブ)</sup>レ羨候小生磔全在囚仕候御安念可<sup>(イソツブ)</sup>レ被<sup>(イソツブ)</sup>レ下候此度同藩兒玉吉次郎貴地邊擊劍為<sup>(イソツブ)</sup>ニ修行ニ罷出候何卒横  
 井・宮部兩先生へ得<sup>(イソツブ)</sup>ニ面調<sup>(イソツブ)</sup>一度申事ニ候へ共貴地之御近狀不<sup>(イソツブ)</sup>レ存兩先生も在方へ御引入被<sup>(イソツブ)</sup>レ成候よし風聞承り不安心ニ奉  
 信<sup>(イソツブ)</sup>存候故<sup>(イソツブ)</sup>三君<sup>(丸山、佐々、今村)</sup>迄呈書仕候故可<sup>(イソツブ)</sup>レ然様奉<sup>(イソツブ)</sup>レ頼候兩先生之事僕頻ニ案シ居候間相成候ハ、御復書ニ被<sup>(イソツブ)</sup>レ仰知<sup>(イソツブ)</sup>一度奉<sup>(イソツブ)</sup>レ存候去秋櫻  
 濃上田士  
 井純藏弊地参り候節少々貴地之様子承り候へ共傳聞故不<sup>(イソツブ)</sup>レ確候此節承り候得<sup>(イソツブ)</sup>レ國友半右衛門君も在江戸之由宮部・永鳥

君之様子等傳承も仕候へ共是以所傳非其人候故不分明候  
櫻井之話ニ横井君兵制論出來至極之確議之由弊藩政府之もの類ニ懇望仕居候間御寫贈被ニ成下候様ニ相成申間敷哉  
此一事去年已來甚願ふ所ニ御座候間萬々御頼仕候

去年墨夷コンシユル十月廿六日十一月六日其後十二月何日頃度々之應接書幕府ノ諸藩へ御渡方相成候よしにて追々傳  
覽仕候最早頓ニ御覽可被成候所實警膽之至右ニ付御高論尙諸先生方之議等相同度鄙見も陳述仕度奉存候得共何分  
書中ニも難盡事柄如何セン唯々他日之為ニ御自愛專要奉存候以上

正月廿二日

尙々時勢ハ丑寅已來相見候事トハ奉存候へ共かく早ク日本國中墨夷ノモノトナラントハ思ハザリシ何分筆懶不  
レ能ニ多及一也

柳川藩立花・池邊之諸君近狀是も櫻井之話にてハ大ニ長進之由傳承仕候此度之議論定る長岡君之所へハ被ニ申越  
るナラント遙想仕候

兒玉氏柳藩へも罷出候積ニ付相成候ハ、いつまへる御差圖奉願候

(此書は丸山運介・佐々淳二郎・今村乙五郎に宛てたるものであらう)

(萩市松陰神社藏 校合濟)

四〇一 ×小國剛藏より竹石某に贈る

安政五年正月廿六日

小國在須佐  
竹石在萩

密書拜啓先日被<sub>(松陰)</sub>仰下候吉田<sub>(女孺)</sub>書簡久坂某上書等之儀先達る不<sub>(九卷關係詩文參照)</sub>取敢申上置候様國家之安危ニ關係仕候へハ臨<sub>(松陰)</sub>事<sub>(女孺)</sub>懼之聖言此事  
ニ覺候依<sub>(松陰)</sub>之千思百慮管見之處無<sub>(女孺)</sub>腹藏<sub>(九卷關係詩文參照)</sub>申陳候間當否御參考可被<sub>(松陰)</sub>下候然ハ昨年二月蘭人之申立同四月下田長崎兩奉行<sub>(女孺)</sub>之幕命並今  
度墨夷使節一件<sub>(松陰)</sub>なるハ既ニ三千年來之皇國醜類之所屬と相成危き勢ニ相見候ニ付本藩<sub>(女孺)</sub>幕府へ御匡正有<sub>(松陰)</sub>之候る愈御手引無<sub>(女孺)</sub>之時ハ  
馬首再<sub>(松陰)</sub>ひ函嶺を諭<sub>(松陰)</sub>して警下<sub>(松陰)</sub>ニ朝<sub>(松陰)</sub>し神州之正氣を鼓動<sub>(松陰)</sub>せるとの儀於<sub>(松陰)</sub>節義<sub>(松陰)</sub>ハ左<sub>(松陰)</sub>可<sub>(松陰)</sub>有<sub>(松陰)</sub>之候得共情形之上<sub>(松陰)</sub>ニ目算<sub>(松陰)</sub>を立候處全功甚  
無<sub>(松陰)</sub>魯東<sub>(松陰)</sub>候元來幕府交通之御處置ハ内患之私より出<sub>(松陰)</sub>る事<sub>(松陰)</sub>ニて當時<sub>(松陰)</sub>齟齬<sub>(松陰)</sub>之防<sub>(松陰)</sub>きハ別<sub>(松陰)</sub>る心を配<sub>(松陰)</sub>らる<sub>(松陰)</sub>事<sub>(松陰)</sub>ニ候吉田氏之申<sub>(松陰)</sub>さる<sub>(松陰)</sub>如<sub>(松陰)</sub>く今<sub>(松陰)</sub>  
も事起<sub>(松陰)</sub>り候ハ<sub>(松陰)</sub>援<sub>(松陰)</sub>を外夷<sub>(松陰)</sub>ニ乞<sub>(松陰)</sub>ひ邦内之諸侯<sub>(松陰)</sub>を攝<sub>(松陰)</sub>伏<sub>(松陰)</sub>させ<sub>(松陰)</sub>る<sub>(松陰)</sub>杯<sub>(松陰)</sub>と申<sub>(松陰)</sub>様<sub>(松陰)</sub>ふる<sub>(松陰)</sub>將軍<sub>(松陰)</sub>ふれ<sub>(松陰)</sub>ハ與<sub>(松陰)</sub>みし<sub>(松陰)</sub>易<sub>(松陰)</sub>き事<sub>(松陰)</sub>ふり<sub>(松陰)</sub>幕府<sub>(松陰)</sub>も人<sub>(松陰)</sub>たり<sub>(松陰)</sub>か<sub>(松陰)</sub>る<sub>(松陰)</sub>淺露<sub>(松陰)</sub>之策  
ハ有<sub>(松陰)</sub>レ之間敷候假令<sub>(松陰)</sub>心<sub>(松陰)</sub>ハ石敬唐<sub>(松陰)</sub>なるも形丈<sub>(松陰)</sub>ハ日本將軍<sub>(松陰)</sub>之名分<sub>(松陰)</sub>を失<sub>(松陰)</sub>さる<sub>(松陰)</sub>様<sub>(松陰)</sub>ニせ<sub>(松陰)</sub>して<sub>(松陰)</sub>自滅<sub>(松陰)</sub>之基<sub>(松陰)</sub>其上<sub>(松陰)</sub>ニ 王室<sub>(松陰)</sub>を向<sub>(松陰)</sub>楯<sub>(松陰)</sub>ニ取<sub>(松陰)</sub>りて<sub>(松陰)</sub>ハ人心  
之<sub>(松陰)</sub>掃<sub>(松陰)</sub>せ<sub>(松陰)</sub>さる<sub>(松陰)</sub>等<sub>(松陰)</sub>之儀<sub>(松陰)</sub>ハ固<sub>(松陰)</sub>より熟慮<sub>(松陰)</sub>之前<sub>(松陰)</sub>ニ可<sub>(松陰)</sub>レ有<sub>(松陰)</sub>レ之候へ<sub>(松陰)</sub>ハ若<sub>(松陰)</sub>卒爾<sub>(松陰)</sub>之舉<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>ふ<sub>(松陰)</sub>時<sub>(松陰)</sub>ハ直<sub>(松陰)</sub>ニ 天子<sub>(松陰)</sub>ニ奏<sub>(松陰)</sub>して<sub>(松陰)</sub>叛名<sub>(松陰)</sub>を假<sub>(松陰)</sub>さる<sub>(松陰)</sub>ハ眼<sub>(松陰)</sub>前<sub>(松陰)</sub>之事<sub>(松陰)</sub>ニ候  
此時<sub>(松陰)</sub>ニ至<sub>(松陰)</sub>て天<sub>(松陰)</sub>旗<sub>(松陰)</sub>之向<sub>(松陰)</sub>背<sub>(松陰)</sub>列<sub>(松陰)</sub>藩<sub>(松陰)</sub>之去<sub>(松陰)</sub>就<sub>(松陰)</sub>隨<sub>(松陰)</sub>ニ見<sub>(松陰)</sub>居<sub>(松陰)</sub>たる<sub>(松陰)</sub>定<sub>(松陰)</sub>畫<sub>(松陰)</sub>無<sub>(松陰)</sub>レ之<sub>(松陰)</sub>ハ却<sub>(松陰)</sub>る<sub>(松陰)</sub>恥辱<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>殘<sub>(松陰)</sub>す<sub>(松陰)</sub>事<sub>(松陰)</sub>ニ相<sub>(松陰)</sub>成<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>勿<sub>(松陰)</sub>論 今上<sub>(松陰)</sub>皇帝<sub>(松陰)</sub>御<sub>(松陰)</sub>睿<sub>(松陰)</sub>明<sub>(松陰)</sub>之趣<sub>(松陰)</sub>弘<sub>(松陰)</sub>化<sub>(松陰)</sub>之御<sub>(松陰)</sub>書<sub>(松陰)</sub>付  
安政<sub>(松陰)</sub>之詔<sub>(松陰)</sub>朝<sub>(松陰)</sub>ふ<sub>(松陰)</sub>夕<sub>(松陰)</sub>な<sub>(松陰)</sub>の御<sub>(松陰)</sub>製<sub>(松陰)</sub>等<sub>(松陰)</sub>も<sub>(松陰)</sub>知<sub>(松陰)</sub>へ<sub>(松陰)</sub>し<sub>(松陰)</sub>され<sub>(松陰)</sub>ハ公<sub>(松陰)</sub>卿<sub>(松陰)</sub>之内<sub>(松陰)</sub>御<sub>(松陰)</sub>輔<sub>(松陰)</sub>佐<sub>(松陰)</sub>之歷<sub>(松陰)</sub>々<sub>(松陰)</sub>迄<sub>(松陰)</sub>王室<sub>(松陰)</sub>ニ於<sub>(松陰)</sub>ても<sub>(松陰)</sub>近<sub>(松陰)</sub>來<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>外<sub>(松陰)</sub>侮<sub>(松陰)</sub>御<sub>(松陰)</sub>憤<sub>(松陰)</sub>懣<sub>(松陰)</sub>ハ當<sub>(松陰)</sub>然<sub>(松陰)</sub>ニ候<sub>(松陰)</sub>併<sub>(松陰)</sub>征<sub>(松陰)</sub>夷<sub>(松陰)</sub>職<sub>(松陰)</sub>掌<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>乏  
敷<sub>(松陰)</sub>ハ格<sub>(松陰)</sub>別<sub>(松陰)</sub>之御<sub>(松陰)</sub>督<sub>(松陰)</sub>責<sub>(松陰)</sub>も<sub>(松陰)</sub>無<sub>(松陰)</sub>レ之<sub>(松陰)</sub>又<sub>(松陰)</sub>諸<sub>(松陰)</sub>藩<sub>(松陰)</sub>なるも<sub>(松陰)</sub>癸<sub>(松陰)</sub>丑<sub>(松陰)</sub>甲<sub>(松陰)</sub>寅<sub>(松陰)</sub>以來<sub>(松陰)</sub>外<sub>(松陰)</sub>虜<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>情<sub>(松陰)</sub>狀<sub>(松陰)</sub>至<sub>(松陰)</sub>公<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>被<sub>(松陰)</sub>仰<sub>(松陰)</sub>出<sub>(松陰)</sub>無<sub>(松陰)</sub>レ之<sub>(松陰)</sub>段<sub>(松陰)</sub>ハ一<sub>(松陰)</sub>統<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>不<sub>(松陰)</sub>平<sub>(松陰)</sub>ニ候<sub>(松陰)</sub>然<sub>(松陰)</sub>る<sub>(松陰)</sub>に<sub>(松陰)</sub>互<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>屏<sub>(松陰)</sub>息<sub>(松陰)</sub>して<sub>(松陰)</sub>幕<sub>(松陰)</sub>命  
を<sub>(松陰)</sub>奉<sub>(松陰)</sub>る<sub>(松陰)</sub>事<sub>(松陰)</sub>皆<sub>(松陰)</sub>德<sub>(松陰)</sub>川<sub>(松陰)</sub>氏<sub>(松陰)</sub>祖<sub>(松陰)</sub>宗<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>威<sub>(松陰)</sub>德<sub>(松陰)</sub>存<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>れ<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>ふ<sub>(松陰)</sub>り<sub>(松陰)</sub>故<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>有<sub>(松陰)</sub>志<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>諸<sub>(松陰)</sub>侯<sub>(松陰)</sub>も<sub>(松陰)</sub>只<sub>(松陰)</sub>天<sub>(松陰)</sub>下<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>動<sub>(松陰)</sub>靜<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>窺<sub>(松陰)</sub>居<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>る<sub>(松陰)</sub>應<sub>(松陰)</sub>變<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>策<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>回<sub>(松陰)</sub>す<sub>(松陰)</sub>時<sub>(松陰)</sub>節<sub>(松陰)</sub>ふ<sub>(松陰)</sub>れ<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>必<sub>(松陰)</sub>外<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>頼<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>ハ  
相<sub>(松陰)</sub>成<sub>(松陰)</sub>間<sub>(松陰)</sub>敷<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>左<sub>(松陰)</sub>レハ<sub>(松陰)</sub>此<sub>(松陰)</sub>一<sub>(松陰)</sub>舉<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>防<sub>(松陰)</sub>長<sub>(松陰)</sub>二<sub>(松陰)</sub>州<sub>(松陰)</sub>なる 皇<sub>(松陰)</sub>國<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>大<sub>(松陰)</sub>義<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>碎<sub>(松陰)</sub>る<sub>(松陰)</sub>見<sub>(松陰)</sub>詰<sub>(松陰)</sub>無<sub>(松陰)</sub>レ之<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>難<sub>(松陰)</sub>レ<sub>(松陰)</sub>被<sub>(松陰)</sub>レ<sub>(松陰)</sub>及<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>果<sub>(松陰)</sub>斷<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>乍<sub>(松陰)</sub>レ<sub>(松陰)</sub>恐<sub>(松陰)</sub>只<sub>(松陰)</sub>今<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>防<sub>(松陰)</sub>長<sub>(松陰)</sub>なる<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>萬<sub>(松陰)</sub>卒<sub>(松陰)</sub>一<sub>(松陰)</sub>心<sub>(松陰)</sub>畏  
危<sub>(松陰)</sub>せ<sub>(松陰)</sub>さ<sub>(松陰)</sub>る<sub>(松陰)</sub>處<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>何<sub>(松陰)</sub>共<sub>(松陰)</sub>自<sub>(松陰)</sub>信<sub>(松陰)</sub>難<sub>(松陰)</sub>相<sub>(松陰)</sub>成<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>假<sub>(松陰)</sub>令<sub>(松陰)</sub>二<sub>(松陰)</sub>州<sub>(松陰)</sub>丈<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>節<sub>(松陰)</sub>義<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>全<sub>(松陰)</sub>して<sub>(松陰)</sub>も<sub>(松陰)</sub>皇<sub>(松陰)</sub>道<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>傾<sub>(松陰)</sub>覆<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>授<sub>(松陰)</sub>る<sub>(松陰)</sub>效<sub>(松陰)</sub>ふ<sub>(松陰)</sub>く<sub>(松陰)</sub>し<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>徒<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>一<sub>(松陰)</sub>身<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>潔<sub>(松陰)</sub>して<sub>(松陰)</sub>天<sub>(松陰)</sub>下<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>上<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>益<sub>(松陰)</sub>ふ<sub>(松陰)</sub>き  
道<sub>(松陰)</sub>理<sub>(松陰)</sub>なる<sub>(松陰)</sub>名<sub>(松陰)</sub>あり<sub>(松陰)</sub>て<sub>(松陰)</sub>実<sub>(松陰)</sub>ふ<sub>(松陰)</sub>き<sub>(松陰)</sub>事<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>且<sub>(松陰)</sub>今<sub>(松陰)</sub>日<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>時<sub>(松陰)</sub>勢<sub>(松陰)</sub>いつ<sub>(松陰)</sub>れ<sub>(松陰)</sub>不<sub>(松陰)</sub>レ<sub>(松陰)</sub>違<sub>(松陰)</sub>之内<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>豐<sub>(松陰)</sub>隙<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>生<sub>(松陰)</sub>し<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>様<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>思<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>レ<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>何<sub>(松陰)</sub>分<sub>(松陰)</sub>御<sub>(松陰)</sub>當<sub>(松陰)</sub>家<sub>(松陰)</sub>なる<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>王<sub>(松陰)</sub>室<sub>(松陰)</sub>と<sub>(松陰)</sub>存<sub>(松陰)</sub>亡<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>共<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>せ<sub>(松陰)</sub>る  
思<sub>(松陰)</sub>召<sub>(松陰)</sub>なる<sub>(松陰)</sub>虛<sub>(松陰)</sub>動<sub>(松陰)</sub>を<sub>(松陰)</sub>戒<sub>(松陰)</sub>免<sub>(松陰)</sub>全<sub>(松陰)</sub>功<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>處<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>御<sub>(松陰)</sub>着<sub>(松陰)</sub>眼<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>事<sub>(松陰)</sub>肝<sub>(松陰)</sub>要<sub>(松陰)</sub>と<sub>(松陰)</sub>思<sub>(松陰)</sub>按<sub>(松陰)</sub>仕<sub>(松陰)</sub>申<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>此<sub>(松陰)</sub>上<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>君<sub>(松陰)</sub>上<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>申<sub>(松陰)</sub>迄<sub>(松陰)</sub>も<sub>(松陰)</sub>無<sub>(松陰)</sub>レ<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>當<sub>(松陰)</sub>路<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>御<sub>(松陰)</sub>家<sub>(松陰)</sub>中<sub>(松陰)</sub>今<sub>(松陰)</sub>日<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>非<sub>(松陰)</sub>常<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>御<sub>(松陰)</sub>覺<sub>(松陰)</sub>悟<sub>(松陰)</sub>にて<sub>(松陰)</sub>固<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>民  
心<sub>(松陰)</sub>練<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>士<sub>(松陰)</sub>氣<sub>(松陰)</sub>一<sub>(松陰)</sub>實<sub>(松陰)</sub>地<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>御<sub>(松陰)</sub>手<sub>(松陰)</sub>段<sub>(松陰)</sub>專<sub>(松陰)</sub>一<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>奉<sub>(松陰)</sub>レ<sub>(松陰)</sub>存<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>いつ<sub>(松陰)</sub>れ<sub>(松陰)</sub>隱<sub>(松陰)</sub>士<sub>(松陰)</sub>ハ<sub>(松陰)</sub>別<sub>(松陰)</sub>段<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>可<sub>(松陰)</sub>レ<sub>(松陰)</sub>及<sub>(松陰)</sub>ニ<sub>(松陰)</sub>議<sub>(松陰)</sub>論<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>得<sub>(松陰)</sub>共<sub>(松陰)</sub>其<sub>(松陰)</sub>内<sub>(松陰)</sub>前<sub>(松陰)</sub>件<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>愚<sub>(松陰)</sub>考<sub>(松陰)</sub>御<sub>(松陰)</sub>序<sub>(松陰)</sub>之<sub>(松陰)</sub>節<sub>(松陰)</sub>被<sub>(松陰)</sub>仰<sub>(松陰)</sub>傳<sub>(松陰)</sub>可<sub>(松陰)</sub>レ<sub>(松陰)</sub>被<sub>(松陰)</sub>下<sub>(松陰)</sub>候<sub>(松陰)</sub>以上

正月廿六日

武彝白

竹石賢契机下

(寫本長府町小國武宏氏藏 校合濟)

四〇二 佐世八十郎に與ふ 安政五年正月廿九日

松陰在萩松本 佐世在長門國船木

佐世君 正月廿九日

寅一白

賓卿被<sup>(中谷)</sup>參候事ニ付何事も書ニ不<sup>(伊藤)</sup>及候靜齋之事賓卿有<sup>(伊藤)</sup>レ説御談合可<sup>(伊藤)</sup>被<sup>(伊藤)</sup>下候墨夷之情藩府之議是亦賓卿と御談可<sup>(伊藤)</sup>被<sup>(伊藤)</sup>成候政府も上書位ハ曳受可<sup>(伊藤)</sup>申趣ニ相見候是吾黨盡力之秋也御工夫可<sup>(伊藤)</sup>被<sup>(伊藤)</sup>成候詰り候所ハ英雄心事、渾在<sup>(伊藤)</sup>不<sup>(伊藤)</sup>説、賓卿と御對笑可<sup>(伊藤)</sup>被<sup>(伊藤)</sup>成候先書ハ粟屋英へ託候此度中谷君<sup>(伊藤)</sup>達可<sup>(伊藤)</sup>申候事 (寫本萩市安藤紀一氏藏 校合濟)

四〇三 ×小國剛藏より

安政五年二月九日

小國在須佐 松陰在萩松本

拜啓仕候先達蒙<sup>(伊藤)</sup>御下問一候一件竹石主人迄壹通り之鄙見及<sup>(伊藤)</sup>陳説一置候定る御承知被<sup>(伊藤)</sup>下候事と奉<sup>(伊藤)</sup>存候アルグンド藩府御免許之様子幕議を探り同志<sup>(伊藤)</sup>報來り候且萬國通商御免之御觸被<sup>(伊藤)</sup>差出一候由官府を經<sup>(伊藤)</sup>して交易之事等も望通りに相成候儀と察<sup>(伊藤)</sup>され昨年下田長崎兩奉行<sup>(伊藤)</sup>之幕命被<sup>(伊藤)</sup>是考合候<sup>(伊藤)</sup>ハ已ニ合衆國之麾下ニ屬<sup>(伊藤)</sup>せる勢ニ立至り矣ニ 神州未曾有之大恥辱此事ニ御座候就<sup>(伊藤)</sup>るハ本藩<sup>(伊藤)</sup>カ天下ニ先<sup>(伊藤)</sup>て正義を唱<sup>(伊藤)</sup>へ幕府を匡正<sup>(伊藤)</sup>せる之御議論大節至忠方今之急務素<sup>(伊藤)</sup>カ御同意之事ニ御座候乍<sup>(伊藤)</sup>去幕府御受用ハ多分六ヶ敷思<sup>(伊藤)</sup>ハれ候然<sup>(伊藤)</sup>ハ馬首函嶺を踰<sup>(伊藤)</sup>して更<sup>(伊藤)</sup>ニ聲下<sup>(伊藤)</sup>ニ朝<sup>(伊藤)</sup>し神州之正氣を鼓動<sup>(伊藤)</sup>せる之條一舉之落着<sup>(伊藤)</sup>ニ相成候依<sup>(伊藤)</sup>レ之篤と 王室幕府列藩之情形を通考<sup>(伊藤)</sup>せるニ成算甚<sup>(伊藤)</sup>乏敷候我藩大義を唱<sup>(伊藤)</sup>る時<sup>(伊藤)</sup>ハ王室ハ関東を捨て我<sup>(伊藤)</sup>ニ天旗を賜<sup>(伊藤)</sup>り列藩も徳川氏を背<sup>(伊藤)</sup>て我<sup>(伊藤)</sup>ニ與<sup>(伊藤)</sup>せる體<sup>(伊藤)</sup>ふる御見居<sup>(伊藤)</sup>有<sup>(伊藤)</sup>レ之哉柳

川・越前・薩摩等 公臺之御因<sup>(伊藤)</sup>ミ振りハ兼<sup>(伊藤)</sup>る承知不<sup>(伊藤)</sup>レ仕候得共肥後藩杯<sup>(伊藤)</sup>ハ案外ニ幕府を戴<sup>(伊藤)</sup>き候様子ニ御座候惣<sup>(伊藤)</sup>る有志之諸侯互<sup>(伊藤)</sup>ニ天下之動靜を窺<sup>(伊藤)</sup>ひ應變之策を回<sup>(伊藤)</sup>し忍<sup>(伊藤)</sup>て幕命を奉<sup>(伊藤)</sup>る事強<sup>(伊藤)</sup>ニ関東を恐<sup>(伊藤)</sup>る<sup>(伊藤)</sup>ノミニ<sup>(伊藤)</sup>ならず徳川氏祖宗之恩義尙維持<sup>(伊藤)</sup>せる所<sup>(伊藤)</sup>あり故<sup>(伊藤)</sup>ニ万<sup>(伊藤)</sup>一事成らざる時<sup>(伊藤)</sup>ハ反<sup>(伊藤)</sup>て惡名を加<sup>(伊藤)</sup>られ覆<sup>(伊藤)</sup>義・徐<sup>(伊藤)</sup>敬業之覆轍<sup>(伊藤)</sup>を踏<sup>(伊藤)</sup>候<sup>(伊藤)</sup>難<sup>(伊藤)</sup>斗<sup>(伊藤)</sup>候尤<sup>(伊藤)</sup>神州を是<sup>(伊藤)</sup>迄<sup>(伊藤)</sup>と見て防<sup>(伊藤)</sup>長<sup>(伊藤)</sup>二州皇道節義<sup>(伊藤)</sup>ニ碎<sup>(伊藤)</sup>る覺悟<sup>(伊藤)</sup>ニさ<sup>(伊藤)</sup>へ<sup>(伊藤)</sup>ふ<sup>(伊藤)</sup>れ<sup>(伊藤)</sup>ハ會<sup>(伊藤)</sup>る成敗之顧慮<sup>(伊藤)</sup>ハ及<sup>(伊藤)</sup>ざる事<sup>(伊藤)</sup>ニ候<sup>(伊藤)</sup>へとも只<sup>(伊藤)</sup>今<sup>(伊藤)</sup>之<sup>(伊藤)</sup>二州決<sup>(伊藤)</sup>る其覺悟<sup>(伊藤)</sup>ハ出來<sup>(伊藤)</sup>間敷<sup>(伊藤)</sup>と奉<sup>(伊藤)</sup>レ存候 此一條大御議論之行ハれざる根本<sup>(伊藤)</sup>なり又僕<sup>(伊藤)</sup>臨<sup>(伊藤)</sup>事而懼<sup>(伊藤)</sup>る所以<sup>(伊藤)</sup>なり更<sup>(伊藤)</sup>又嘆惜<sup>(伊藤)</sup>之事<sup>(伊藤)</sup>なり 如<sup>(伊藤)</sup>レ此進<sup>(伊藤)</sup>る考<sup>(伊藤)</sup>へ退<sup>(伊藤)</sup>る按<sup>(伊藤)</sup>せるに全功何共無<sup>(伊藤)</sup>覺東<sup>(伊藤)</sup>候得<sup>(伊藤)</sup>て先<sup>(伊藤)</sup>於<sup>(伊藤)</sup>レ僕<sup>(伊藤)</sup>ハ小忍<sup>(伊藤)</sup>して輕舉<sup>(伊藤)</sup>ハ戒<sup>(伊藤)</sup>る時<sup>(伊藤)</sup>節<sup>(伊藤)</sup>と奉<sup>(伊藤)</sup>レ存候大節至忠之賢策<sup>(伊藤)</sup>ニ對<sup>(伊藤)</sup>し右<sup>(伊藤)</sup>之通立論<sup>(伊藤)</sup>仕候<sup>(伊藤)</sup>ハ全<sup>(伊藤)</sup>く俗論<sup>(伊藤)</sup>を主張<sup>(伊藤)</sup>仕候様<sup>(伊藤)</sup>ニ思<sup>(伊藤)</sup>召<sup>(伊藤)</sup>之處<sup>(伊藤)</sup>い<sup>(伊藤)</sup>ら<sup>(伊藤)</sup>ム敷<sup>(伊藤)</sup>存候<sup>(伊藤)</sup>へとも畢竟 皇道之倒瀾<sup>(伊藤)</sup>を支<sup>(伊藤)</sup>ゆるた<sup>(伊藤)</sup>兒<sup>(伊藤)</sup>之事<sup>(伊藤)</sup>ふ<sup>(伊藤)</sup>れ<sup>(伊藤)</sup>ハ時宜<sup>(伊藤)</sup>を斗<sup>(伊藤)</sup>をして叶<sup>(伊藤)</sup>さる事<sup>(伊藤)</sup>ニ御座候自重<sup>(伊藤)</sup>せ<sup>(伊藤)</sup>して叶<sup>(伊藤)</sup>さる事<sup>(伊藤)</sup>ニ御座候且<sup>(伊藤)</sup>江家之存亡<sup>(伊藤)</sup>ハ格別<sup>(伊藤)</sup>ニ天朝之興廢<sup>(伊藤)</sup>ニ関<sup>(伊藤)</sup>るをき<sup>(伊藤)</sup>事<sup>(伊藤)</sup>ニ候<sup>(伊藤)</sup>ハ旁<sup>(伊藤)</sup>以<sup>(伊藤)</sup>全功之上<sup>(伊藤)</sup>ニ着<sup>(伊藤)</sup>眼<sup>(伊藤)</sup>仕度<sup>(伊藤)</sup>事<sup>(伊藤)</sup>ニ奉<sup>(伊藤)</sup>レ存候尙<sup>(伊藤)</sup>又御議論有<sup>(伊藤)</sup>レ之候<sup>(伊藤)</sup>ハ<sup>(伊藤)</sup>幾<sup>(伊藤)</sup>應<sup>(伊藤)</sup>被<sup>(伊藤)</sup>三<sup>(伊藤)</sup>仰<sup>(伊藤)</sup>聞<sup>(伊藤)</sup>可<sup>(伊藤)</sup>被<sup>(伊藤)</sup>レ下<sup>(伊藤)</sup>候以上

二月九日

豊所拜具

松陰賢契

侍史下

追啓

細注申述候通り御議論之行ハれさる<sup>(伊藤)</sup>ハ當時正氣全候<sup>(伊藤)</sup>之世<sup>(伊藤)</sup>の中<sup>(伊藤)</sup>なれ<sup>(伊藤)</sup>ハふ<sup>(伊藤)</sup>り故<sup>(伊藤)</sup>ニ成算<sup>(伊藤)</sup>を見<sup>(伊藤)</sup>せ<sup>(伊藤)</sup>て<sup>(伊藤)</sup>ハ別<sup>(伊藤)</sup>る人情阻<sup>(伊藤)</sup>壓<sup>(伊藤)</sup>之氣味<sup>(伊藤)</sup>甚<sup>(伊藤)</sup>敷<sup>(伊藤)</sup>候<sup>(伊藤)</sup>ゆ<sup>(伊藤)</sup>へ孫子之殺<sup>(伊藤)</sup>敵者怒<sup>(伊藤)</sup>也<sup>(伊藤)</sup>之域<sup>(伊藤)</sup>に至<sup>(伊藤)</sup>ら<sup>(伊藤)</sup>を候尤<sup>(伊藤)</sup>馬関<sup>(伊藤)</sup>上<sup>(伊藤)</sup>地<sup>(伊藤)</sup>之風評<sup>(伊藤)</sup>有<sup>(伊藤)</sup>レ之候<sup>(伊藤)</sup>由此<sup>(伊藤)</sup>義<sup>(伊藤)</sup>ハ御家<sup>(伊藤)</sup>之御恥辱<sup>(伊藤)</sup>ゆ<sup>(伊藤)</sup>へ結局御國中憤懣<sup>(伊藤)</sup>強<sup>(伊藤)</sup>かる<sup>(伊藤)</sup>を<sup>(伊藤)</sup>思<sup>(伊藤)</sup>ハれ候<sup>(伊藤)</sup>実<sup>(伊藤)</sup>事<sup>(伊藤)</sup>之處<sup>(伊藤)</sup>此地<sup>(伊藤)</sup>互<sup>(伊藤)</sup>市場<sup>(伊藤)</sup>ニ相成<sup>(伊藤)</sup>候<sup>(伊藤)</sup>ハ愚民<sup>(伊藤)</sup>奸商<sup>(伊藤)</sup>直<sup>(伊藤)</sup>ニ賊<sup>(伊藤)</sup>之術<sup>(伊藤)</sup>中<sup>(伊藤)</sup>ニ陷<sup>(伊藤)</sup>る<sup>(伊藤)</sup>ハ眼前<sup>(伊藤)</sup>之事<sup>(伊藤)</sup>ニ候<sup>(伊藤)</sup>ハ其害<sup>(伊藤)</sup>不<sup>(伊藤)</sup>ニ容易<sup>(伊藤)</sup>一<sup>(伊藤)</sup>儀<sup>(伊藤)</sup>と奉<sup>(伊藤)</sup>レ存候<sup>(伊藤)</sup>尙<sup>(伊藤)</sup>上<sup>(伊藤)</sup>地<sup>(伊藤)</sup>之<sup>(伊藤)</sup>一件幕議<sup>(伊藤)</sup>相發<sup>(伊藤)</sup>し候<sup>(伊藤)</sup>事<sup>(伊藤)</sup>ふ<sup>(伊藤)</sup>れ<sup>(伊藤)</sup>ハ内<sup>(伊藤)</sup>ハ防<sup>(伊藤)</sup>長<sup>(伊藤)</sup>一<sup>(伊藤)</sup>円<sup>(伊藤)</sup>領<sup>(伊藤)</sup>レ<sup>(伊藤)</sup>之<sup>(伊藤)</sup>御<sup>(伊藤)</sup>朱<sup>(伊藤)</sup>印<sup>(伊藤)</sup>反<sup>(伊藤)</sup>古<sup>(伊藤)</sup>ニ相成<sup>(伊藤)</sup>候<sup>(伊藤)</sup>ハ 祖宗<sup>(伊藤)</sup>へ對<sup>(伊藤)</sup>せ<sup>(伊藤)</sup>られ<sup>(伊藤)</sup>御<sup>(伊藤)</sup>申<sup>(伊藤)</sup>譯<sup>(伊藤)</sup>無<sup>(伊藤)</sup>レ<sup>(伊藤)</sup>之<sup>(伊藤)</sup>段<sup>(伊藤)</sup>を<sup>(伊藤)</sup>以<sup>(伊藤)</sup>て<sup>(伊藤)</sup>御<sup>(伊藤)</sup>徇<sup>(伊藤)</sup>ニ相成<sup>(伊藤)</sup>り外<sup>(伊藤)</sup>ハ大義<sup>(伊藤)</sup>を<sup>(伊藤)</sup>以<sup>(伊藤)</sup>て<sup>(伊藤)</sup>有志<sup>(伊藤)</sup>之<sup>(伊藤)</sup>諸侯<sup>(伊藤)</sup>に<sup>(伊藤)</sup>仰<sup>(伊藤)</sup>合<sup>(伊藤)</sup>され<sup>(伊藤)</sup>候<sup>(伊藤)</sup>可<sup>(伊藤)</sup>然<sup>(伊藤)</sup>御<sup>(伊藤)</sup>處<sup>(伊藤)</sup>置<sup>(伊藤)</sup>有<sup>(伊藤)</sup>レ<sup>(伊藤)</sup>之<sup>(伊藤)</sup>度<sup>(伊藤)</sup>事<sup>(伊藤)</sup>ニ御<sup>(伊藤)</sup>座<sup>(伊藤)</sup>候<sup>(伊藤)</sup>い<sup>(伊藤)</sup>つ<sup>(伊藤)</sup>れ<sup>(伊藤)</sup>國<sup>(伊藤)</sup>中<sup>(伊藤)</sup>之<sup>(伊藤)</sup>士<sup>(伊藤)</sup>民<sup>(伊藤)</sup>與<sup>(伊藤)</sup>レ<sup>(伊藤)</sup>上<sup>(伊藤)</sup>同<sup>(伊藤)</sup>レ<sup>(伊藤)</sup>意<sup>(伊藤)</sup>可<sup>(伊藤)</sup>ニ<sup>(伊藤)</sup>與<sup>(伊藤)</sup>レ<sup>(伊藤)</sup>之<sup>(伊藤)</sup>死<sup>(伊藤)</sup>、可<sup>(伊藤)</sup>ニ<sup>(伊藤)</sup>與<sup>(伊藤)</sup>

レ之生、而不レ畏レ危之場ニ居らそしてハ大事成就仕間敷候庄内之轉封御沙汰戻リニ相成候及民心之固き所はれハふリ於ニ御國差掛  
リ固ニ民心練ニ士氣恩信之御手段第一之急務ニ御座候心事面晤なてハ尽きそ何分此ニ御自重之處爲レ國望レ之事ニ御座候 又拜

(寫本長府町小國武宏氏藏 校合濟)

四〇四 森田節齋に贈る

安政五年二月十九日

松陰在萩松本  
森田在備後國江村

癸丑甲寅已來時事一變消息遼闊、扱先生備中御卜居之由藩僧月性昨年帰國初る得ニ其詳ニ申候先々筆研御清適と遙想奉ニ  
拜賀候此度友人久坂玄瑞東遊ニ付附ニ一書ニ吳候様申事ニ付如レ此申上候此生同社中之奇才子僕大知己ニ御座候小生近  
況色々申上度候へ共惣る附ニ此生口頭ニ候近文三篇錄上仕候幽囚中無ニ可レ為者ニ不レ得レ已出ニ此途ニ御座候御啓笑可レ被  
レ下候送ニ玄瑞ニ叙も作り申候處不ニ相替ニ蕪陋半宵間ニ出來候文字可レ愧之至ニ御座候 月性在京中與ニ雨江・江城二子ニ貴  
書寫贈仕吳候其後御文況如何ニ御座候哉江幡生ハ不レ絶消息承候此行玄瑞生も江幡ヲ訪候積ニ御座候萬々不レ竭ニ書中  
候時下御自重為レ道是祈

二月十九日

吉田寅次郎

再拜

森田節齋先生  
案右

墨夷消息日益甚矣、天下時勢乃至于此、浩嘆々々

(節齋は、安政四年より萬延元年迄備後國江村、山路機谷氏の許に在り、文久元年に備中倉敷に移寓したこ前齋年譜に見ゆ)

(維新志士正氣集所載寫眞 校合濟)

四〇五 月性に與ふ

安政五年二月十九日

松陰在萩松本  
月性在萩

上人大開ニ講筵ニカレ候由ニ付松下童子二三十拜聽罷出候也日下ノ御傳言承知先々降心仕候隨分御周旋奉レ希候郭林  
宗反屬ニ方外ニ亦時勢之變カ呵々

二月十九日

寅二

清狂上人案下

(山口縣立教育博物館藏 校合濟)

四〇六 桂小五郎に與ふ

安政五年二月十九日

松陰在萩松本  
桂在江戶

久坂実甫東遊傑同志之士ニ付何事も老兄へ致ニ商議ニ候様申置候扱幕府之事情ハ詳ニハ不レ被レ測候へ共本藩ハ扱々ノ有  
様委細久坂承知ニ付不レ申候閣老而下水野・河路等之有名家ノ持論何如拙案ニモ六十六国逆も手ノ下シ處ナキ次第ニ相  
成候哉と覚候茲ニ一名利奇男子長府人與膳昌藏と申ものアリ竹嶋開懸ノ策アリ此段得ニ幕許ニ蝦夷同様ニ相成候ハ、異  
時明末ノ鄭成功ノ功モ成ルヘクカと被レ思候此深意ハ扱置幕吏変通之議興利之說今日之急ニ候へそ竹嶋開懸位ハ難事  
ニ非ざるをしは一御勘定ノ主張ニ被レ行可レ申と默算仕候委細玄瑞存知之事ニ付御運籌可レ被レ下候天下無事ナラハ幕  
府ノ一利事アラハ遠畧ノ下手ハ吾藩ヨリハ朝鮮滿洲ニ臨ムニ若クハナシ朝鮮滿洲ニ臨ントナラハ竹嶋ハ第一ノ足溜リ

ナリ遠ク思ヒ近ク謀ルニ是今日之一奇策ト覺候高論何如久坂生江戸ノ事体畧相分リ候迄ハ江戸留學固也秋頃ノ様子次  
 第上田藩ノ櫻井・恒川ナトニ便リ信濃ノ髯叟(佐久間集山)ヘ從學セハ誠ニ妙ナルベシト被<sub>レ</sub>存候此事も御商議被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>々候  
 本藩今日ノ大患ハ言路壅塞之一條御座候此大弊打破、下ニ哀痛之令、求<sub>レ</sub>切直之言ト申趣ニ不<sub>レ</sub>相成<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>と迎<sub>レ</sub>も何事も致  
 方無<sub>レ</sub>之候国相府ニ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>と萬々此勢無<sub>レ</sub>之候君公ヲ責ムベシ行相・侍御史ヲ責ムベシナンデモ御歸城已前一令下ラデハ不<sub>レ</sub>  
 相濟<sub>レ</sub>候高論何如

二月十九日

寅二拜白

桂君足下

竹嶋ノ議(別ニ書ナレ)福原清介等も同説ナリ此地ノ様子書中難<sub>レ</sub>尽委細玄瑞口頭ニアリ

(東京市木戸幸一氏藏 校合濟)

四〇七 長原武に與ふ

安政五年二月廿八日

松陰在藏松本  
長原在江戸

近來絶不<sub>レ</sub>伺<sub>レ</sub>貴況ニ候へ共定て御精勵奉<sub>レ</sub>察候墨夷之事も扱々以の外の事ニ相成申へキヲ知ラズ候秀実追々御厚遇奉<sub>レ</sub>  
 感銘、秀実歸期迫り候處又日下玄瑞・松浦松洞二生出府仕候玄瑞ハ最早御尋仕候事と奉<sub>レ</sub>察候松洞ハ画家ニ<sub>レ</sub>抱<sub>レ</sub>志候も  
 のに御座候画ヲ好ムモノ志アルモノへ寄々御引合奉<sub>レ</sub>頼候申上度事如山候得共松洞出足甚迫り不<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>心底ニ候久保生  
 も甚勉勵仕候近日ハ至ク村夫子ノ態ニ御座候來原良藏も蒙<sub>レ</sub>譴歸國仕候正月迄ハ相成ニ在<sub>レ</sub>りし<sub>レ</sub>あり萬々不尽 二月  
 廿八日

長原武様

松陰生

天下之事も実ニ浩嘆ナリ随分為<sub>レ</sub>国御保重可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候奉<sub>レ</sub>存候

(外封)

松浦龜太郎持往

西ヶ窪竹中様御屋敷

長原武様 要事

長門囚奴

(東京市長原坦氏藏 校合濟)

四〇八 久坂玄瑞に與ふ

安政五年二月廿八日

松陰在藏松本  
久坂東行中

阿月貴書達候御壯志妙々  
 京師ノ事何如ヤラント至極案申候桂小五郎與<sub>レ</sub>來原<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>西城決着之事承<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>大愉快右ニ<sub>レ</sub>愚考スルニ 天朝之正  
 論と西城ノ正議ト合体シテ天下ノ俗説ヲ推崩シ神州ヲ維持スル<sub>レ</sub>方今ノ急務ナリ 天朝ノ御中興も 征夷ノ御中興  
 も此辰あり 天朝ノ正論ヲ守リ立候事征夷氏長久之妙計あり此事桂ト談シ玉へ桂も赤川淡水も上京ニ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>若桂ハ  
 奥羽行ノ積トカ申事是ハ急務ト覺不<sub>レ</sub>申京師へ人材ヲ聚メ 公卿ノ弊習ヲ(以下中文缺)  
 竹嶋論公然上書ニ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>如と存候松洞も同説あり御申談可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候〇江幡・桂・櫻任藏・長原武ナトへ別ニ添書不<sub>レ</sub>致候

間秀実御申合御紹介可被下候○江幡文虎若西遊ノ思立も御座候ハ、秀実カ若クハ老兄有隣・清太へ御添書可被  
(吉田宗太郎)  
 成候松如へハ吾樓自書アルベシ併文虎此節何如ノ状態ニ候哉○欲斬墨夷ノ三義士尙在獄候哉尙在ラハ少シク情  
(土屋)  
 ヲ通シ置タシ其術囚獄石出帶刀へ行テ問テモ分ルヘシ又牢屋同心ニ田村金太郎と申アリ此人鍵役ト云テ五六人アリ佐  
(傳馬)  
 々木何某筆頭ナリ其外姓名ヲ忘ル金太郎ニ往テ様子ヲ問フヘシ又傳馬町ニ(是が尤も妙)源左衛門ト申ものアリ囚士獄中ヨリ吏ニ  
 對スル時ノ駕固ヲカタク棒頭ニ奇男子ナリ是ニ往テ問モヨシ左候る金一方ナリト託シ書ヲ送ルベシ復書ハ恐クハ得  
 スマシ是ハ獄中ノ情アリ怒ルコナカレ鍵役牢屋同心ノ内當番ノ内ニ出獄ヲ頼ムニ可然人物アルヘシ源左衛門ニ問ベシ○天下ノ  
 事情世間ノ新聞奇書等松洞と御申合力ヲ極メテ搜索シ長井へ御見せ世子へ差出候策專要と奉存候世ニ奇士アラハ松  
 洞へ像サセ足下傳ヲカキ世子ノ耳目ヲ驚カシ玉へ

二月廿八夜松洞至且談且書

先日ハ月性法話ニ付塾中會ヲ廢シ童子皆赴キキカシム昨日法話終ル今日より詩經會初ル山根生來ル生中々気魄アリ  
 可レ愛村塾増築之議初ル委細ハ瀨能まで申遣置候此節土砂搬運ハ皆塾童ナリ雇人ハ一人もあし大愉快云テモ尽期ハ  
 ナシ先々閣筆○來原大妙○周布も亦妙

松陰囚奴

觀月先生座右

(觀月先生は普通小田村伊之助を指す、小田村は當時松本村觀月河原に居住して居つたからである、然るにこの書簡は久坂宛に相違ない)

(東京市榊取三郎氏藏 校合濟齋)

四〇九 月性に與ふ

安政五年二月

松陰在松本 月性在萩

調停一事被懸御心頭候段実ニ致感銘ニ候右ニ付何卒折角ノ御厚情徒事ニ不相成ニ候様ニと種々案勞仕候より同志  
 へ申談候處孰も同意ニ御座候其段ハ他事ニ無之江南・松下相和睦スルノト申さる計ニるハ眞情ニ終ニ貫徹不仕事  
 ニ付松下生悉ク周布ヲ主盟トシ毎々會集可仕書生ノ妄論も尽し政府諸君実事上ノ様子も承り候ハ、眞情相通シ眞ノ  
 和睦ニ相成可申と被存候ト申候共松下社中も先日御面會ノ中谷・高杉・尾寺・久保等ノ数子且ハ所謂有隣子等ノミニ  
 御座候何卒上人之御紹介ヲ以テ御帰在前ニ一夕周布へ會スル様ノ事出來申聞敷哉此段成就仕候へ誠ニ御調停も眞功  
 相顯レ誠ニ妙々ニ御座候全体僕も一囚室ニ坐シ黙々仕居候内ニ松下議論ナト、人ニ日セラレ候る者人聞も如何敷(以下  
 闕文)

(戊午函室文箱、二月廿六日與清狂一參照)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

四一〇 月性に與ふ(草稿)

安政五年三月一日(カ)

松陰在松本 月性在萩

此行実ニ國家ノ安危ニり、り候事感銘不淺其意ヲ速度短叙認候者りし百忙中誠ニ勿々御一笑可被下候○山口一タ  
 ノ講、中谷至極ノ頼ニ御座候是ハ中々話柄ニ致候ニて者無御座候先夜も論候通山口之事中谷一身負荷仕候苦心ノ餘  
 此策ニ及ふニて御座候何卒御許諾可被下候○愚兄昨夕貴寓へ遣候へ共ニ相逢ニ殘念と申居候

安政五年

一五



(戊午幽室文籍、送清狂御歸郷序の添書ならん)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

四一一 叔父竹院に贈る

安政五年三月三日頃

松陰在萩松本  
竹院在鎌倉

此生ヲ松浦松洞ト申松本村中ノ一奇才子幼より画名ヲ得今ハ隠然タル一家ニ御座候詩亦清雋可レ誦然共詩画ヲ以て称せらる、事ハ好む所ニ無御座候此度東遊仕候ゆへ貴寺へ立寄候ハ、御尊容照写仕度永ク後世ニ傳ふるの存念ニ御座候可レ然御頼仕候委細ハ別翰可ニ申上候奉存候ゆへ勿々閣筆仕候惠純も徳隣寺住職ニ相成繁用之趣ニ御座候歸国已來兩度ホト致ニ相對一候

吉田矩方再拜

\* 錦屏老方丈獅座下

佐々木小次郎歸国御近狀承知仕安心仕候此地イツレモ無事ニ御座候

(此起白浪本文首原白にある)

(神奈川縣瑞泉寺藏 校合濟)

四一二 ×高杉晋作より(カ)

安政五年三月四日(カ)

高杉在萩  
松陰在萩松本

須佐両君被レ來議論紛々喩狀、今度諸君之須佐行甚宜留永行者甚惡シ其所ニ以惡非他須佐爲主松下塾ヲワイタニナル故也誰歳を取リタル物を御差シ被レ成候得て甚妙也詩論落着可レ申候今日議論大クシテ讀書甚少シ御處、佐々木次郎四郎・渡邊與市・時山直八・中

郷方之助・石田太郎、先刻ハ御馳走ニ相成難レ有奉レ存候其節御嘶人数前書之通五人と御定メ可レ被ニ成下ニ奉レ頼候余ハ又々罷出以三拜顔ニ萬々可ニ申上候草々頓首  
三月四日  
(カ)

(東京市榊取三郎氏藏 校合濟)

四一三 小國剛藏に與ふ(カ)

安政五年三月十日

松陰在萩松本  
小國在須佐

御書中之趣逐一承知仕且荻生ノ口述ニ盡ニ其詳ニ申候生明日ハ入塾之都合ニ被レ申候

○言路之事周布政之助政府へ入り唐船方トナル大ニ愉快ニ參り可レ申と存申候右ニ付御献策之御心構共御座候ハ、大小トナシ御贈り被レ下度此節折角同志中共相謀居候處ニ御座候

京邸穴戸ノ代リハ福原某ニ有穴戸ニ比スレハ大ニ不レ及之嘆有レ之候へ共從來善人と相見へ候故少々書生論ヲ容レ候丈ケハ出来可レ申と奉レ存候久坂玄瑞も此節ハ滯京りと被レ察候秋良ナト申合定て無レ愚手ヲ下し候事と奉レ存候

○世子ノ方ハ長井隼人本月三日ハ被レ登候故否強キ様覺申候此節弊塾七八疊計リ増建諸生皆其役ヲ執リ大ニ煩冗ニ御座候取急一應之御答計申述候餘附ニ後便ニ候

江戸西城越前ノ周旋徹底し一橋ニ決シ候よし□愉快ニ御座候  
尊考ノ遺集一、千代ノ往處二、慥ニ借用仕候回顧録完璧仕候

(この書簡の日附は、藩吏移動の日附ミ、次の三月十一日久坂宛の書中、萩野の行動によりて判断したるものである。長井の東上は毛利家所藏長井藩樂傳に四月七日ミあるも疑はしいからなかつた)

(神戸市武岡忠夫氏藏 校合濟)

四一四 久坂玄瑞に與ふ

安政五年三月十一日 松陰在萩松本  
久坂在京郡

(前文略)... 矯メテハナラヌ此事中谷とも談合候處至極同意之申分あり貴意承度候萩野隼太昨日出萩松下塾へ今日も寓居ノ管あり多分中谷と同行ナルヘシ足下藏本一通りあらへ置候抄書等御入用アラハ御申越可被下候

三月十一日

寅二拜白

玄瑞君

拙記寫ニ暇ナシ宜敷御頼仕候來原良藏逼塞被仰付候三十日ナラントノ噂アリ早クスメカシト相待居候

(萩市居田泰輔氏藏 校合濟)

四一五 ×久坂玄瑞より

安政五年三月十八日 久坂在京郡  
松陰在萩松本

大坂着

過ル十三日當安橋ヲ渡ル後ハ履聲起ル走リ來ル僕ヲ呼者アリ顧面見之、乃卿人白井小介也、僕大悅、乃過ニ其逆旅訪ニ秋良氏、秋良氏聲臥羅病、見レ襟蹶起慷慨淋漓、談論尤盛、京師之事實初得レ耳焉、水府老公上書尤不レ堪ニ感激也、秋良少々慷慨有レ之遊ニ之浪華、白井時々上京探ニ索事實、秋良頗變、赤馬関爲ニ開港所、懷乃揮筆爲ニ上書、主意ハ先達て條約書ニニホン 中國分北ノ西海岸ニケ所開港致ベシト有レ之左候得ハ馬関ハ其一ナルヘシ方今之勢夷狄之所レ求幕府羈弱不レ得不レ允之、左候得ハ我藩断然御断被レ來候共決して御開

届有レ之間敷候必御換地ニ相成馬関ハ幕府之惱ニ相成可候縱令御断立候共小倉カ博多カニて交易スル時ハ我馬関之害ニ異ふら候間断然可被レ成ニ御請ニ候 併イ、開港候上ハ夷狄秋狼藉スルモ難斗候其節ノ雲山三百里ヲ踰飛レ激急奏仕候てハ夫迄ニハ機會ハ去リ神州之恥辱ニも相成可申候間若し有レ事節ハ國內の兵ヲ舉勝手ニ誅戮仕候ても不レ苦哉之段御申出被レ成且長防三面之海岸ニて候得ハ相州之引受ハ除可被レ成遣ニ候段御申出相成御届有レ之候て開港ハ御引受可被レ成候夷狄狼藉一舉殲之候 ハ、イ、武家之面目ニて可レ有レ之候併馬関ハ清末長府領も御坐候中々此儀ハ小藩ニて武備も不レ行届ニ候間丸ニ本藩御引受可被レ成候段上書草案仕候赤関の事ハ氣ニ掛候次第ニ付上京御ニ尋穴戸翁其上封ヲ以テ開東へ御送り可被レ成遣ニと頼處 候脱カ、ハ町便杯ニて若シ落候て不ニ相捌ニ候間何分自身東行上ニて可レ宜と被レ申候東行の上差シ出積リニ御坐候先日以來之事ハ秋良ハ松本塾へ申送り候様子一々不ニ申述ニ候九日十日頃白井上京ニて其頃之様子ハ承リ候得共其後の事一向不レ承候ニ付早速上京梅田カ穴戸杯相尋少々風説承リ申候此内禁旅ガ諸侯之赤心被レ聞召ニ度旨被レ下候處堀田杯早々開東へ何候處諸侯之處ハ取扱可申候間何卒被レ遊ニ獻慮ニ間敷段申出候於レ是宸禁ガ不レ得レ已御先祖御代々被レ對被レ遊ニ獻慮ニ候尙又東照宮の制禁も有レ之候得ハ彌以被レ遊ニ獻慮ニ候事已、此上ハ開東ニて能々可有ニ勘考ニ段有レ之 被御出有之イ、日ノ江戶役人も是ニ因テ十三日ニハ引取東下の様子ニ相成候處十二日の未刻赤心之輩八九十人内裡ニ罷參皆々帶劍願文書取諾不レ退事數刻無ニ是非ニ願書御取上ケニ相成夫より夜ニ入戌刻過開自家 九條、亦々罷入敷諫被レ致何分是度之御殿返答ハ不レ宜から候間神州御大事御止メ被レ成可レ然と云々、願書ハ寫ニ暇アラズ三月十二日拾ニ一命ニ願人高杉大膳大夫保實同心之徒 連名別紙、此連奏大ニ振ニ動襟宸ニ論議甚盛ニ相成堀田杯東下も止ミ論議紛々御座候誠以天朝之美盛不レ堪ニ奮激也僕も其論の決スル迄ハ京師ニ滞留仕考ニ御座候遊旅ニ在リテ雜費も入候ニ付御屋敷の中願就院ト申寺ニ寄寓仕候連候菜根ニて尤妙、一体東行共仕考ニ一寸京師へ立寄寄寓致スハ六ヶ敷事ニ候へ共寺僧ト相談ニテ一夜談シ徹宵ニ相成ト申候託シ滞留仕候是ハ少々穴戸翁へ密ニ達シ置候穴戸ノ更代ニ福原與三兵衛參リ居候是モ僕知リ人ニテ甚人物ニテ御座候追々京師之事別シテ可ニ申上ニ候

一 粟田宮様・九條殿・中山大納言・三條・八條・正親中納言・久我大納言・徳大寺・萬里小路此御方々ニ誠以頼(ハカ)シキ御方ニ御座候由鷹司大閤(早イ成イ)ハ最老(早イ成イ)城ニテ智略モアリテ正論家ヲ歴倒セント被レ成テ正論家ハ大抵智略ノ乏キ者ニテ是尤可(ハカ)レ憂也然レ正儀(正イ)ノ人々澤山(澤イ)ニテ其上天子明堂英俊誠以御互ニ草莽ヨリ大悦無(坊カ)ニ此上奉レ存候東防城ハ武家天奏ニテ是ハ鷹司方ニテ御座候處十三日薄暮三位御公家某東坊城ヲ刺ントテ誤テ徳大寺殿ヲ被レ刺候處折善不レ中候由此御方如何被レ爲レ成候哉東坊城ハ此節官爵ヲ貶サラ候由愉快ニ候

二月十九日之事或御方 天子ト御詞申上候君ハ自然之節ハ何ヘ御立退被レ爲レ遊候御積リニ被レ爲レ在哉 御答ニ兼テ覺悟(覺悟)成立泉(必御代々御殿所泉御寺...)涌寺(必御代々御殿所泉御寺...)と心得ニ有レ之との御事奉ニ恐入ニ候下賤ノ我等迄モ感涙ニ袖ヲ濕シ罷リ在哉

○仙臺ヨリ片倉小十郎尾州ヨリ家老カノ中ノ由伏見マテ參リ居候 見テ來タモノガ云フタト、決シテ京師ヘ通スルナルヘシ(十六七日ニ參リ日朝過ル何事モナシ加賀ヨリ大臣來リシ由)加賀分大臣來リ候

○諸國デハ薩摩ヨリ太刀ヲ 天朝被レ獻其外段々内密御上表モ有レ之由尾州越前ナト水府ハ勿論ヤクニ立可レ申候我藩ハ 天朝ニ附テ尤御由緒被レ得候太刀ヲ獻(シカ)ンタリ使者ヲ出タリ不レ被レ成候テモ此度御歸リニ一寸御上京被レ遊堂々正儀有レ之度ト誠以祈様ニ奉ニ待入ニ候依テ何カ此度ハ京師御上リ之御様子モ無キニモ非ラスハ秘事勿(元)レ他言ニ何分地方政府ヨリモ申立ハ不(元)ニ相成ニ候哉何モ方今ハ天朝ヲ孤立サセテハ不(元)ニ相捌ニ候

此内野村淳助ト申役人京師御向ニ罷出候様ナレ此節九日十日頃ニテ御再盛様子ヲ不レ承して早々東下 君公ヘ何ヲ申上候哉事實も能々探索不レ致して歸リシ甚以残念至極御座候何も少々滞留ナクテハ議論モ毎々有候得ハ中々一寸相知不レ申候長井東行も京師ヘ立寄無レ之儀尤残念存候

○月性上人ハ上京今ニ無ニ御座ニ候奉ニ待入ニ候

○中谷實卿今ニ御暇無レ之哉何分京師ヘ一番御出有レ之滞留事實を能々何フヘシ伊勢行ハ不レ宜候伊勢ニテハ京師ガ二十餘里隔絶京師の事情ヲ通スル人モ無ニ御坐ニ候月ニ五六度も京師ヘ上リテハ途中費ニ日月一見ヘタ事ハ無ニ御坐ニ候何卒直掛京師滞留夫ガ江戸ヘ下リ諸侯の赤心何度存候是事傳言被レ遣

○有隣氏ヘ一書送中候何分御叱政御送り被レ遣此論緩着ニテ候得共御閑暇有レ之候得ハ讃岐行も自妙ナリ併し別ニ良策も御坐候ハ、此儀後ニても宜敷御坐候

○肥後ナトの事ハサツハリ噂も無レ之相州御手當の評判ハ宜敷候得共今日無聲無臭有レ始無レ終(ノカ)し謗を免カレス如ニ我藩今迄左程ニ無レ之候得此度振ニ妙(意不明)ニ氣タシ

○関東ガ先達(尼カ)厄崎開港之儀大坂御城代土屋相模守様ヘ相談有レ之處土屋答ニ 天朝ニ對御用捨可レ然と確然候議論被レ致被致候共土屋ハ今迄ハ左程評判不レ宜候得共此論度誠妙是ハ大久保要ナトの力もアルヘシ

○鷹司殿頻ニ賂を被レ受候様子

○中山様此方ハ 天朝の爲ニハ身家ハ粉ニ成リ(モカ)テ不レ辭と御咄有レ之由誠乃祖之風ヲ落サスト謂ヘシ

○青蓮院殿モ此方大塔宮如キ者ニ非ストモ此度之事ニ付テハ身命ハ惜ミハ致サスト被レ仰セニ候由青蓮殿ハ此迄ハ御内々ニテ禁殿ヘ御出被レ成候得共此節ハ公然ト朝議ヘ御願被レ遊候由誠爲ニ天下ニ可レ賀

○水府老公の上書モ幕府ニ洩旁(カカガ)以幕府心中水府ヲ忌ムヘシ左候得ハ世嗣ハ必尾州侯ナルベシ一橋ハ捌兼候様風聞有レ之一橋ナラテハ天下之事尽歸ニ 天朝ニ之論ヲ併シ尾州侯尊王家ナレハ此迄將軍ノ様ニハ有レ之間敷ト風聞有レ之候

○同志之有隣・清太・暢夫・實卿其外諸兄ヘ一々書翰今ニサシ出不レ申候甚背ニ交誼ニ候得共是書贈ニ吾兄ニ而諸友亦幸賜ニ瀏覽ニ別ニ論モ無レ之候得ハ此書ニシテ諸兄ヘ贈ルニ當ル心持、諸友海恕可レ被レ遣候實以 天朝今日ノ勢有志士御同慶併シ其勢ノ挫マヌ様ニ落フ

始列藩共ニ 天朝ノ尻押被<sup>(元カ)</sup>レ在候度奉<sup>(元カ)</sup>レ存候

此度別ニ皆々様へ書翰差上<sup>(カ)</sup>不<sup>(レ)</sup>申候唯天下之事已一寸走筆ソウ々不

三月十八日夜認ム

久坂玄瑞

尙々僕御屋敷中ノ願就院ニ内々無事滞留仕候様子殿誰様エモ御風聲可<sup>(カ)</sup>レ被<sup>(レ)</sup>遣候御座候 ○薩州・尾州ヨリ内々近衛様ニ上書有<sup>(レ)</sup>之候

由  
○白井モ近々京師之様子何ヒニ上京可<sup>(レ)</sup>仕候ト待居候小助ハ見掛ト違ヒ有志士ナリ感服感服清狂師エモ荒マシナリトモ京師ノ近況  
御傳可<sup>(レ)</sup>被<sup>(レ)</sup>遣候 口羽ナトエモ御聞セ、小國モ京師之事聞度噂ニ附是亦御頼申上候道太モ小國ト同セキニテ御頼ニ付是又被<sup>(元カ)</sup>御面到  
御侍セ<sup>(持カ)</sup>可<sup>(レ)</sup>被<sup>(レ)</sup>遣候 ○半井氏京師之勢ニテ奮發同ク願就院ニ滞ル

松陰先生 座右

近來ハ政府之論、江府之説ヒ如何僕日本画圖何日ニテモ宜敷候間江戸同名權之助所迄御送り可<sup>(レ)</sup>被<sup>(レ)</sup>遣候

(寫本東京市益田兼施氏藏 校合濟園)

(右は當時松陰が久坂よりの來書を復寫せしめ必要の向へ分ちたるものであらう、この寫本は參考の爲益田に送りたるものらしく、今益田家にある、其筆蹟により判ずれば門弟三人の筆である、久坂筆の原本は今見當らず、行間書人れに「イ」ミせるは異本廣島縣相原格氏所藏の生田良佐寫本にして、所々斷缺あり、且つ字句に多少異なる處あるも、參考のためこれによりて補つた)

四一六 横井・宮部・丸に贈る

安政五年三月廿四日

松陰在該松本  
横井其他在熊本

此度同志友中谷正亮御地并柳藩を志シ可<sup>(レ)</sup>罷越<sup>(レ)</sup>候故一書奉<sup>(レ)</sup>呈上<sup>(レ)</sup>候墨使應接上國風聞等誠治乱安危之界今日と被<sup>(レ)</sup>察

候西城決着之由先々恐悅至極ニ奉<sup>(レ)</sup>存候 尊藩柳藩御近況一向不<sup>(レ)</sup>變誠ニ御案仕候実説ニ候哉加賀・仙臺・薩摩等ハ追々  
京都へ手ダ附候様ニ相聞候今日之時務愚考ニハ西城相定候上ハ水老・越侯等合体之正論起り可<sup>(レ)</sup>申且 天朝之正論是  
誠ニ珍重之事ニ付兩處之正論幾重も合躰致候様有志之諸藩ニテ周旋可<sup>(レ)</sup>仕事と被<sup>(レ)</sup>存候弊藩ハ不<sup>(レ)</sup>相替<sup>(レ)</sup>因循可<sup>(レ)</sup>耻之至  
ニ御座候併近日ニ至り國相府之諸員共少々振起申候模様ニ相成候然共御熟知通何分ニも氣力薄弱ニ暴風迅雨ニ抵抗  
スルト申様參不<sup>(レ)</sup>申候何分滋養強壯今日之急劑ニ御座候此度正亮色々御談可<sup>(レ)</sup>申上<sup>(レ)</sup>候間詰る處横井・宮部ニ先生間弊藩  
迄御出懸被<sup>(レ)</sup>下候様ニ御願申上度被<sup>(レ)</sup>存候是同志中尙國相府ニも内々御願仕る儀を御座候間何卒御妙計共ハ無<sup>(レ)</sup>御座候  
哉先年モ江戸相詰候周布政之助事尔後追々升沈御座候内此度國相府ニ登庸セラレ至極奮起仕居候同人至極ニ先生之御  
來遊ヲ冀居候米卿ハ不<sup>(家モ米田)</sup>能<sup>(レ)</sup>申有吉老大夫彌御苦心ト奉<sup>(レ)</sup>察候柳川之豊岐氏ハ如何之定論ニ御座候哉嚙々進歩ト相羨申  
候愚案ニ横井先生御出被<sup>(レ)</sup>下候ハ、弊藩大臣少々振興之策ヲ運し度左候上國如何ニも御無人氣遣敷是又御定策相同  
度被<sup>(レ)</sup>存候事ニ御坐候胷中萬般而已何分寸楮ニ難<sup>(レ)</sup>尽委細中谷口述仕候事ト草略仕候 閣筆

三月廿四日

松陰生拜

横井君

宮部君

尙々尊藩之御事体近來一向不<sup>(レ)</sup>承候間若二先生御居合不<sup>(レ)</sup>被<sup>(レ)</sup>成候ハ、三君御披閱萬々中谷御談可<sup>(レ)</sup>被<sup>(レ)</sup>下候奉<sup>(レ)</sup>頼候

丸山君

佐々君

今村君 足下

(熊本市紫藤章氏藏 校合濟)

四一七 小國剛藏に與ふ

安政五年三月廿八日

松陰在該松本 小國在須佐

佐々木三生歸來且尊翰披閱彌御盛之様子承知仕欣然奉<sub>レ</sub>存候併多人數罷出御配慮之御事共奉<sub>ニ</sub>遙想候山田七兵衛子近來毎々參り貴邑之事深く相談致候貴書ヲモ見せ又貴君<sub>ノ</sub>直々も御投書被<sub>レ</sub>成候由にて乃今朝貴邸へ參り栗山へ面會談シ候處栗子ハ至極振興之様子大ニ喜悅仕候尙月性も一昨日出府右ニ付周布へ之相談ハ丸二月性へ託シ置申候又跡<sub>ノ</sub>差出候人數之事ハ塾中にて折角申談候最中ニ御座候久保・富永歸着之上ハいづき決着可<sub>レ</sub>仕候<sub>(萩野時行)</sub>萩生石州行甚妙富永子今少シ在留仕候様申越度候得共明日歸着之趣ニ佐々木其外申候事ニ付今更間ニ合不<sub>レ</sub>申殘念奉<sub>レ</sub>存候草々拜復耳不一

三月廿八日

寅二

小國剛藏君 座右

別紙ハ乍ニ御面倒ニ生へ御示可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候

(戊午幽室文稿、途久保清太富永有隣及村樂諸子同萩野時行遊嵩佐叙參照)

(萩市林安次郎氏藏 校合濟)

四一八 ×高津平藏より

安政五年三月廿八日

高津在會津 松陰在該松本

一翰啓上仕候追日向暑候處彌御清迪可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>御座<sub>ニ</sub>珍重<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>存候次<sub>ニ</sub>老拙當年最早七十五歳ニ罷成候へとも子<sub>レ</sub>今存命罷在候間乍<sub>レ</sub>憚御放念被<sub>ニ</sub>成下<sub>ニ</sub>度奉<sub>レ</sub>希候先年ハ遠方面度迄御枉顧被<sub>レ</sub>下深く忝仕合<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>存候其後御無言仕候處奇禍ニ御逢被<sub>レ</sub>成候由傳承如何と御身上大ニ御案申上候處無事ニ御濟被<sub>レ</sub>成候由目出度奉<sub>レ</sub>存候扱御約束之拙著終北錄漸上木ニ相成申候間壹部懸<sub>ニ</sub>御目<sub>ニ</sub>御笑擲被<sub>ニ</sub>成下<sub>ニ</sub>度奉<sub>レ</sub>存候何卒右書へ御題被<sub>レ</sub>成候御詩作一首頂戴仕度外ニ御同志之御方ニ一兩首御乞被<sub>レ</sub>下度是亦奉<sub>レ</sub>煩候去々年<sub>ノ</sub>去年へ懸ケ友人南摩三郎と申者西國へ遊歴いとし只今ハ江戸へ罷出居候處是へハ御逢も被<sub>レ</sub>下候哉否外國奉行衆アメリカ行之節隨從罷越可<sub>レ</sub>申趣ニ付送別之詩文相求候ニ付一首拙作仕候ニ付紙末錄上懸<sub>ニ</sub>御目<sub>ニ</sub>候右ハ御安否相何度草畧如<sub>レ</sub>此餘ハ奉<sub>レ</sub>期<sub>ニ</sub>後鴻之時<sub>ニ</sub>候恐惶謹言

三月廿八日

高津平藏成(花押)

吉田大次郎様人々御中

(高津は會津藩士で、松陰が東北旅行中の交友である、詳しくは東北遊日記二月二日の條參照)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

四一九 久坂玄瑞に與ふ(カ)

安政五年春

松陰在該松本 久坂在京都

大阪ニる大久保要ヲ訪、水戸ノ京都留守ヲ問ヒ玉へ于<sub>レ</sub>今鶴飼吉左衛門ニ候哉鶴飼ハ沒文漢ナレトモ剛直人ト見受タリ朝廷並ニ紀伊ノ事ハ任シテ穿鑿致居タリ梅田ハ固<sub>ニ</sub>御知己ノ事梁川星巖公卿間裏能存知居候久我卿ノ諸大夫春日讚岐守少シ執拗ノ由ナレ<sub>レ</sub>道學者ニ志アル人あり町奉行ノ淺野又河路ナドハ書生顔ニテ御尋被<sub>レ</sub>成候も妙ナランカ天下ノ役人ハ流石 區々ノ御機嫌ニ及申間布相考申候穴戸ヤ秋良ナト在京ニ候ハ、定テ牒シ合セテノ御周旋と奉<sub>レ</sub>存候大器ナル處アリ

安政五年

二五

へハ此地の豫メ議スルモ無用りと奉レ存候

(寫本東京市廣瀬豐氏藏 校合濟慶)

四二〇 ×佐世八十郎より

安政五年春頃(カ)

佐世在山口(カ)  
松陰在萩松本

交レ臂亦在テ進ニ愉快ニ更爲ニ甚、側聞、一昨遠崎與ニ柳井漁者ニ生レ隙、鐘鉦幕衆放レ火燒レ屋、傷死者五六人、烟塵今已鎮矣、而爭論未レ止、是道路之語而不レ詳ニ委曲、明日過ニ遠崎ニ必得ニ其詳、清狂師尙駐錫、則告レ之以ニ此ニ事ニ焉、僕客說健壯志氣益奮、袂掀而劍鳴、勿レ勞ニ貴念ニ幸候也、不一、

(寫本萩市前原彦八氏藏 校合濟慶)

四二一 小國剛藏に與ふ

安政五年四月朔日

松陰在萩松本  
小國在須佐

久(久保富水)・富(富)二子及其他數名歸着彌御心配之段承知仕候僕ノ初心二子歸着之上栗山被レ參候ハ、可レ及ニ議論ニと覺悟仕居候處栗山子も多用故之由ニ途ニ不レ被レ參鄙意陳スルニ由ナシ併栗山近日又々被レ出候由ナレハ先其節ノ談ニ致急くと奉レ存候全躰事ヲ起し候ニ萬人も億人と皆々打揃ヒ候善人ニ致候心懸候へモ東坡ノ所レ謂黃茅瀾望(瀾カ)と申様相成候ハ必然ニ御座候僕意ハ松下カ如ニ前日ニ參り候ハ、御多人數中ニ一人カ二人カ萩野ナトノ如ク志ヲ起し出府ニるも致し候人可レ有レ之其人五人トナリ八人トナリ候へハ吳子カ申せし如ク一人學レ戰教二十人ニ々々教ニ百人ニ千人萬人三軍と趨候ハ自然之勢ニる其所ハ誠ノ無レ息ニ有レ之事ニる急キテ急カル、ものニ無レ之候春一人夏一人秋冬又各一人と一年四人ツ、出來候ハハ二三年ニハ大分面白相成可レ申候傳聞ニる不確候へ共栗山も老兄と同様一ヶ月二ヶ月之内須佐ヲ大典作シテ

天下ヲ壓スルまでニ致スノ御手段と覺申候能々御納得可レ被レ下候貴邑も數年來不レ振候處其間ニるも志士仁人ノ(方々カ)勞々ハ色々手ヲ盡サレ候御事ニハ有るる候へ共未タ御手が附不レ申と奉レ察候其所ヲ松下ノ少年童兒ノ二三輩ヲ遣置候トテ御益ニも相成申間敷右ニ付原田(太郎・德氏)・増野(益田・宇野)歸着之上ハ當分後隊ハ差扣置可レ申候ゆへ萩野再遊被レ致候カ栗山被レ參候節其議ヲ書可レ申其内出府之志アル邦衛(益田・宇野)・清藏君と申候人々ヲ早ク御遣候段着實之策と奉レ存候尤右ニ付貴説も被レ爲レ在候ハ、栗山・萩野等カ得レ御傳言可レ被レ下候左候ハ、又々再思可レ申上ニ候右陳見略陳仕候頓首

四月朔日

松陰生

拜白

小國剛藏君 足下

先日ハ物見ノ積リニ皆々罷出候處忽及ニ接戰ニ候勢、再籍三載ハ孫武ノ忌ム所大ニ國中困迫ニ御座候御一咲可レ被レ下候併貴邑ノ大勢最早相分り候年ニ三五生ツ、被レ參候ハ、三五年ニハ事成就可レ致候源泉混々ノ意最も御互ニ注眼可レ致事と奉レ存候也

(萩市島屋要次氏藏 校合濟慶)

四二二 ×松浦松洞より

安政五年四月八日

松浦在江戸  
松陰在萩松本

三月十八日於ニ遠州若林村ニ伊藤傳之助ニ逢ヒ幕府之様荒増承リ諸侯一統強トノ至極愉快ニ御坐候。○英太郎日ニ増奮發是も同断○傳之助早速御尋仕候間何卒宜様奉レ頼上ニ候此人至るタシカナル者ニる成功一見して可レ知道中心事動々万端不レ能レ盡書外傳之助ト申候其内御自愛肝要之御儀ニ奉レ存候不備

八日

松陰先生玉机ノ下

尙々塾中諸幼君一日も早く奮發セラレル様奉レ祈候

(東京市榊取三郎氏藏 校合濟園)

無窮

四二三

×高杉晋作より

安政五年四月十日以前

高杉在萩  
松陰在萩松本

此間御悔の御翰被レ下難レ有奉レ存候直様御答可レ致候處大ニ取紛甚以失禮之至御高免奉レ祈候扱て祖父儀七日之夕飯後遂ニ相果申候大ニ驚申候人生一世間如ニ白駒之過隙、豈虚語哉實ニ落涙之至ニ御座候學文を致候者カツガツ死生之ヲキラメハ附候得共涙ヲ落チ申候且又先生御病氣之由大ニ御無沙汰奉レ恐入レ候如何被レ成候哉先達と私村塾罷出候節は少シハ御風邪の儀御座候か此節は決る御全快と奉レ察候誠ニ此頃ハ大込リ仕候親父<sup>(下脱カ)</sup>在江戶<sup>(ト脱カ)</sup>親類<sup>(ト脱カ)</sup>コトゴク俗方正科カ斗リ私と世事ウトク何ヤラカヤラ大込仕候明日葬ヲ致候十二日ニ初度法事を仕候<sup>(レカ)</sup>濟候ハ、大安心至御座候先<sup>(レカ)</sup>御答爲可ニ申上ニ如レ此御座候 以上

再拜

二白、留<sup>(當)</sup>永君ニハ別ニ書狀差上不レ申候間宜舖御轉奉<sup>(編正章カ)</sup>希候追々法事相濟候ハ、何卒塾中<sup>(編正章カ)</sup>ノ章子ニ<sup>(編正章カ)</sup>も宜舖候間讀書之友を被レ遣候様奉レ希候一人居候得て古人を思出涙モ落候間何卒御願仕候私以爲朋友之信を見ルニ<sup>(編正章カ)</sup>死、念、難之三事を以知レ申候私朋友別ニ二三人も有レ之候得共未悔ニ來リ候者無レ之候先生之書狀來リ大歎き々々之至御座候是村塾之盛ニ相成所以也此頃天下勢如何候哉御聞セ奉レ願候猶又我カ一身之計謀も宜舖御願仕候大混雜故文ハ不敬筆ハ大乱御免奉レ祈候

晋作再拜

猶又支瑞<sup>(當)</sup>ノ書狀參リ候哉大ニ氣遣仕候書狀來リ候ハ、何卒御送リ可レ被レ下奉レ希候

松陰先生 呈案下

(福川町福田悌夫氏藏 校合濟園)

四二四

×高杉晋作より

安政五年四月十日

高杉在萩  
松陰在萩松本

貴翰難レ有奉レ拜誦候扱て今日先生書狀差上候後椋梨藤太來リ京都一件詳申候處私儀親類中參不レ申候ハ、直様先生側ニ罷出候と相考候親類中も顔色察シ大ニ何ヤ之噂仕候私之様子相計候故私も又思更ヘ容ヲ改メ只今迄獨坐居候災ニ<sup>(三月十一日八十八御連署)</sup>天朝之御盛大悦々々候此九十人者豈楠公哉四十七人之及フ所ナラ哉誠ニ振臂憤激致候是レ此時日本之欲レ爲<sup>(ト脱カ)</sup>日本一日也先生能運ニ英謀ニ我亦開ニ愚眼ニ出一策一候早々御答而已如レ此御坐候再拜

十日

二白支瑞之書狀參リ候由大悦候支瑞之書明日ナリトモ御送可レ被レ下候様奉レ希候再拜謹言

松陰先生 呈案下

(脱カ)  
親類カクシ書キ候故大雜々々御察奉レ祈候再拜  
(外封)  
松陰先生様 呈案下

晋作拜

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟園)

四二五

品川彌二郎に與ふ

安政五年四月十二日

松陰品川  
在萩松本

聞、貴殿膺ニ賞典例、進ニ班士列、賀賀、已而足下數日不レ來、可レ知下賀客蝟集、酒食狼藉、勢不<sup>(レ)</sup>得<sup>(レ)</sup>去<sup>(レ)</sup>焉耳、日來

安政五年

二九

驛使連至、天朝之盛事、誠可謂舉曠百代矣、而國家危急艱難亦莫甚于此時焉、吾輩草間微蟲、萬不足言、雖  
然分盡己乃臣民之宜已、是豈酒杯大荒之時哉、仙之丞・直八皆有奮然上京之志、足下急々來塾、勿為安坐、策  
問一道附往、他渾附二面陳、回白、十二日、  
(寫本神戸市福本義亮氏藏 校合濟)

村塾策問一道

恭捧讀今茲三月廿日勅諭、天情畏皇神、而重列聖、恨幕府  
交三通墨夷、因更令幕府、使三家諸大名竭心建言、事已行  
下、思幕命不日下吾公、吾公奉答固當有賢籌、何待微臣  
過憂、然事實為國家安危興替之界、凡為臣子者、義不  
宜  
忽然傍觀、若或辱下問、亦將何以爲哉、諸君生平讀書、志  
固在皇室、情常慨夷虜、其管疏所見、勿有不悉、以待  
下問之日、四月十二日、

矩方(印)

(編本氏所藏本に、本文の次に附けてある村塾策問一道は、同じく門弟某の筆であるが、此處に掲げたのは松陰の筆である。附圖は當時門人をして木版活字を以て印刷せしめ、門弟等に與へたもので現存須佐の大谷家、東京の久保家に残つて居るものである。)

(東京市毛利元昭氏藏 校合濟)

四二六 月性に與ふ

安政五年四月十二日

松陰在萩松本  
月性在周防國邊崎

村塾策問一道  
恭捧讀今茲三月廿日 勅諭 天情畏  
皇神而重 列聖恨 莫府交通墨夷因更  
令 幕府使三家諸大名竭心建言事已行下思  
幕命不日下 吾公吾公奉答固當有賢籌何  
待微臣過憂然事實為 國家安危興替之界凡  
為臣子者義不 宜忽然傍觀若或辱下問亦將何  
以爲哉諸君生平讀書志固在 皇室情常慨  
夷虜情常慨所見勿有不悉以待下問之日  
戊午四月十二日

昨夜玄瑞<sup>(久坂)</sup>・秋良よりも書來り廿日堀田参内之事申來り候実ニ 天朝ノ正論不堪<sup>(不)</sup>扑舞<sup>(不)</sup>候廿日勅諭之趣外夷之事箱

館・下田・長崎之外ハ絶る來泊不被<sup>(不)</sup>差許<sup>(不)</sup>との事堀田震慄拜伏退出と申事

右之趣ニ候ヘハ事已ニ迫り申候秋良ハ委細申出候哉 勅諭も参り候由未タ写取不<sup>(不)</sup>申候

玄瑞ハ先書ハ文周ニ写サセ上候様申付候文周も中々憤発藝国へも些ナリ正気発候様致度積と相見候御垂察可<sup>(不)</sup>然御

差圖可<sup>(不)</sup>被<sup>(不)</sup>下候玄瑞・春軒共溜京ノ願之事申來爰許ニて取計仕候

先日申上候蕭海門之仙之允外一人ハ直八上京ノ策昨夜周布へ申入置候

賞典ノ議論政府も面白相聞候

久保外二子一昨日口羽被<sup>(不)</sup>帰候口羽も母病きのよし今朝ハ來原舟木行、佐世・口羽へも参り候答詩觸ハ此便ニ託候

何分私少々氣分相特ニ大紛冗不能<sup>(不)</sup>詳書ニ候萬御推察奉<sup>(不)</sup>頼候以上

十二日

清狂上人 座前

(安政大獄關係志士遺墨集所載寫眞 校合濟)

四二七

×高杉晋作より 安政五年四月十三日 高杉在萩  
松陰在萩松本

玄瑞君も益慷慨、過浪華至<sup>(不)</sup>京師愉快々々、京師之事實可<sup>(不)</sup>悦可<sup>(不)</sup>懼、實ニ天下之安危於是決矣、有志之士臂レ几枕レ書之時ニワラサル  
ナリ能回<sup>(不)</sup>眼見<sup>(不)</sup>諸侯之赤心、能護<sup>(不)</sup>鼎扶<sup>(不)</sup>明天子、然而避<sup>(不)</sup>京師・浪華・江武之地、以謀<sup>(不)</sup>大義、是我カ所<sup>(不)</sup>望也、然則先生者可<sup>(不)</sup>謂<sup>(不)</sup>居<sup>(不)</sup>子ヨ

安政五年



キ地、故先ツ使安父兄之心、密ニ使門人以爲浦公ニ乎、是固先生所當爲、然も我弟子之心カ而發レ之、能免セヨ玄瑞ハ又別世界且夫京師者、最醫人所ニ集會、不レ及ニ避嫌義、其形醫而其心丈夫、以居ニ京師、實得ニ其處、賓卿者京師行惡シ又伊勢行も惡シ九州行最然々々、有隣君之遊學此節、(全くの意)カダテ惡シ久保ヲシテ京師浪華之間伏見邊に居シムル大妙之事、雖レ然不レ可レ爲事、残念々々、僕之遊學議論宜御頼仕候此先達之議論行ル、カ不レ行ルカ之處内々先生之御心得之風ヲシテ小田村君と御相談被ニ成下候ハ、難レ有奉レ存候若シ此議論不ニ行申候ハ、手段亦ワルマシキコトニモナシ乍然成ル事ナレハ相成候様御計奉レ頼候昨日初度之法事大込リ致候何分立タリ坐シタリスルニ目カマイソウナヤウニ御坐候今日も少々者客も有レ之候得共昨日と者大違ニ御坐候明日カラハ讀書少々仕ラレ候間彌次郎カ誰カヲ御遣シ可レ被下候様奉レ希候對讀テナクテハ難儀仕候

○秋良・小助之上京、二州之爲レ害乎、爲レ幸乎、僕未レ知其別、秋良病決而二日醉ナランカ玄瑞之上書愉快々々、半井激發亦可レ悅、晋惟馬関之議不レ足懼、雖レ然玄瑞之上書決而在レ不レ可レ受幕府之言也、所ニ其言、馬関ハ清末・長府領も御坐候中々此儀ハ小藩ニて武備も不ニ行届ニ候間丸ニ本藩御引取被レ成候段ナト之議論妙策也

○野村カ上京も又有レ意矣

○肥後ナト之ウワサ無レ之様子僕甚怪焉、竹嶋論不レ待ニ秋良氏

○土屋氏亦一歌人

○仙臺片倉・尾州成瀬・薩侯之大刀、僕惟焉、僕今度ニ京師之議論者、唯在ニ近耳遠足也、草々如此シ再拜謹白

十三日

晋作

松陰先生御案下へ

二白、幾重之天下之形勢此節之如クナレハダイフン愉快々々先生能自愛セヨ晋再拜

(外封)

サトリトカ云モノヲ開カト思ガ宜鋪佛書有レ之候ハ、御送被レ下候

松陰先生御案下

(この書四一五號久坂より松陰宛の書に關係あり、参照)

(東京市楯取三郎氏藏 校合濟)

晋作拜

四二八 土屋蕭海に與ふ

安政五年四月十四日

松陰在松本 土屋在萩

昨日御歸着被レ成候よし一段之事存候陳 天朝之御事曠代之盛感激之至奉レ存候右に付貴兄之歸着先日大ニ相待居候歸後周布其外へも御出候哉政府も存外ノ振起妙々老兄定る色々御謀策もアルヘシ京城へ一旦御出浮御周旋ハ如何可レ有レ之哉と存候月性も未レ上、秋良・白井ノミ滯京久坂・半井ハ一旦東下無レ間上京ノ積ナレハ一旦東下候ハ、又東曹ノ繩墨も可レ恐候左候ハ、能々皇朝ノ情實ヲ吞込或ハ東下シ或ハ西歸シ或ハ遊説シ或ハ直論スルモノ足下をトるモ無レ之候何卒周布へ御相談御決着被レ成候るモ如何筆不レ盡意萬々御察知可レ被レ下候 以上

四月十四日

寅白

蕭海足下

森田文四道來候何卒匆匆御評被レ下間布哉乃致ニ御示ニ候相馬ノ上書も懸ニ御目ニ候

(山口市三浦顯藏氏藏 校合濟)

四二九 某に贈る 安政五年四月十七日 松陰在萩松本

実甫へ懐ニ御届可被下候

日下玄機詩

僧月性選(題目のみに止め詩は略す、題目の上の○は編者の附記)

○深夜聽秋聲 ○佛朗王 ○紀伊道上有碑、題曰根來寺、路自此、偶有一郵夫跟余來者、視其頭顱而帶長劍、怪問云、公為何人、腰間所帶何等大物、豈莫擊劍先生也、余笑而曰、是乎、活人劍已、子以為根來法師流亞、亦宜也夫、因戲口占得一絕句、○紀川 ○拙訳演砲法律成、錄鄙詩二首以代題言一節一 ○笠置 ○七折坂 ○阿濃津 ○伊勢海 ○津藩諸老才子辱連聯、過訪中無一醫人、○與山鳴子毅別

安政五年戊午夏四月十七日

二十一回生録

(以下久坂筆) 亡兄天鏡先生遺稿 僧月性所撰而先師松陰錄也 壬戌三月 江月齋誠

(神戸市福本義亮氏藏 校合濟)

四三〇 森田節齋に贈る

安政五年四月十八日 松陰在萩松本 森田在備後國藤江村

(富永有鑒) 此仁小生獄中已來之大知己ニ御座候久坂生已ニ申上候哉と奉存候此回日柳長次郎ヲ訪ヒ候爲態々罷出候先生ノ委細御添書被成下候様奉頼候先日久坂書來り先生之高教も符中へ有之候右ニ付文稿も録上仕度奉復之件も御座候得共折節数十日不快ニ此節も未タ臥床中故何も附後便候 右之次第ニ之 令息誕生、史評落成、皆不可不智之事候へ共未能及甚曠礼之至ニ御座候安元生之事驚愕之至先生之書ハ傳覽仕

候得共生志在死トノミニ爲未ニ必ト思ヒ候先便初得ニ其詳実ニ驚怛仕候

四月十八日

門生 寅拜白

節齋森田先生 座下

谷翁ハ無事ニ御座候哉森ハ如何時々御往復も被成候哉谷ノ海外異傳商確ハ未タ出不申候哉

日柳之事此度ノ要件ニ御座候吳々も宜御添書奉待候

(以下原本本文首行間にある) 天朝之盛美ニ曠代之美事と奉存候小生對策此仁被示候様申置候例ノ御戒ニ負キ感激之餘把筆立就申候其後一字も改不申恥入申候久坂生文才長僕数等但シ是も把筆立就申候土屋生も近日録文乞教度申居候是ハ頗ル密思ヲ運申候臥床中不覺長文ニ相成頭已岑々閑筆仕候東軒畧稿も來り候朗誦擊節仕候

(兵庫縣久芳道雄氏藏 校合濟)

四三一 ×高杉晋作より

安政五年四月廿六日(カ) 高杉在萩松本 松陰在萩松本

有輕卒謂至松下、因忽然揮筆奉二十一回先生足下、先生之病至今日如何、于先二生携一書來、活目開之、曰貴體不佳、晋乃知先生輕病之弊矣、于生憤激虛心讀書、于時自江武飛書至、愚父又今月五日發於江武、屈指數之已二十日、因有座事、故休讀書、晋資先生、其殘因如此、乃驚焉、掃戶待又已數日、未得歸焉、昨夜就枕取八家文讀之、則覺矢之介能文矣、非眞覺、半覺也、先生有暇、使一生送矢之介文集乎、晋伏願焉、是非重矢之介也、悅文也、先生之獄舍文集、

晋熟讀反復、覺英傑之真矣、于時早朝泥塵欲舉、晋因如此、請使晋知先生之病至今日、果快否、幸甚々々、夫輕病如輕身、先生能重焉、爲天下是祈、晋多罪々々謹白

廿六日

高杉晋作拜

(外封) 松下村塾ニ而

呈案下

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟園)

四三二 小國剛藏に與ふ

安政五年四月廿九日

松陰在蘇松本 小國在須佐

(益田) 邦衛諸君來遊情意大ニ貫通妙々何卒昇平之虛文打捨眞實之交態ニあくる者當今之危ヲ救ヒ難ク奉レ存候陳貴邑震興好機會到來件々(萩野時行) 萩生其外直々可レ被ニ申述ニ御滿悅之程奉ニ想像ニ候此度塾ガ五名參上御遠慮を御切磋被レ下候様奉レ頼候内、富樫文周と申人ハ廣嶋人ニる月性之門人ニ御座候貴邑少年中内藤生頗有ニ氣力ニ僕甚愛申候何卒御勉勵再遊ヲモ致候様御申傳可レ被レ下候宇野生之儀先日申上候趣定る行され候事と察申候是亦遅延ならぬ様御計ヒ可レ被レ下候銃陣之事僕萩野ニ代り來原其外へ申談候る不レ遠決着之積ニ御座候開港之議も相繼テ謀議仕る存念ニ御座候何も萩生其外と謀置候御聞取可レ被レ下候 以上

四月廿九日

田寅白

小剛藏様

(益田・栗山) 丹下・翁介二君へ無レ書此書なり共御示し可レ被レ下候  
久保行未決之内認ニ此書ニ候久保參り候ハ、夫々可ニ申述ニ候  
此節僕少ニ不快ニる情意ヲ盡サヌノミニ候

(厚狭郡吉田村藤井彰氏藏 校合濟園)

四三三 須佐兩忠士に贈る

安政五年四月

松陰在蘇松本

來原良藏も舟木へ行候所昨夜ハ多分帰宿と存候也

萩野生已下七名過訪被レ下貴邑御奮起之御様子も承り無ニ此上ニ致ニ欣抔ニ候諸君いつきも當月中御滯塾のよし萩野生ハ御願相濟候ハ、早々御上 京妙と被レ存候口羽も母病氣にて出萩仕候管多分昨夜出候と被レ存候口羽及ヒ山田亦介ナトへ諸君追々御面話之都合ニ可レ致候然ル處七名中一名ハ最初より申上候様松下へ暫ク御寄寓之御處置ニ被レ成度奉レ存候左候ハ、上國之様子ハ萩地ガ聞コへ萩之様子ハ塾ガ通し候様可レ致候右一名之處富永・久保と色々申合候所宇野氏ナト可レ然と被レ申事随分自らも其志有レ之様被レ申候事ニ付天下國家ノ爲此節柄之事候へと栗山翁被レ仰合ニ一家中之事差支り無レ之様ニ幾重も御周旋被レ成候様奉レ存候 以上

\* 須佐兩忠士

松下ノ囚奴

\* (この一行實は外封の宛名にて本文はこの行の間にノの記がある)

(兵庫縣渡邊得次郎氏藏 校合濟園)

四三四

×月性より 安政五年五月十日以前 松陰在萩松本

(本文)

吉田猛士先生

月性

御賢兄及御滿堂様に宜しく御致聲可被下候諸同士中方に御賢兄様々吳々御致聲是亦奉祈候 頓首

(阿武郡福川村森田豊吉氏藏 校合濟堂)

四三五

×土屋蕭海より 安政五年五月十四日

土屋在萩 松陰在萩松本

爾後如何狂上人も十日ニ瀝焉之由爲ニ 國家深く歎憫仕候碑誌傳文僕輩之事ふるベシ拜謁可申上候得共墨夷一件大分迫り候様子周布氏東行之由一變動可有之御妙策可有之承度候森田文稿々于今評語不三下得實々多事此等之事ニ暇あらず學詩堂詩抄之序々影寫法を用ひ候者と相見に候得共影餘り重く題ニ著かず如何も流行ニ投シ到底序不成とのミ計りて本題ニ反らず非ニ眞文也嗚呼文也書牘二篇々條理整齊可誦然レ共森田之舊稿ニ與ニ江木管支一論ニ山陽一書と結構面目絶々相似り故ニ不取要レ之綿力薄材にて下手大工が工師の繩墨ニ因り纒ニ經營を成ずが如シ史記序贊評も定メる第坤林雲銘ふとが評演史の丑淨生且之法を以て古文を概そるか如くふるべし蕭海も矢張微歌ふれどもあまり虚無の構案々不致レ之積り也無用之談似々きども序々申上候竹書紀年二冊井田圖考二冊此々此間在遊之節取歸り申候當地ニ乏き様被思候故供ニ電囑候詩經世本古義三十冊此も取歸り申候主意々王者之跡熄而詩亡々々而春秋絶と申語ニ本き編年體ふかし候者にて一部の詩史と謂ふべ々歟且考據該博講詩々々有益之書と思われ申候聞此節詩説御會讀有レ之候由御用ふら々不妨取讀也扱此間ちらと拜見致候答幕府之撰文御手元ニ御座候ハ一寸拜借奉願上候森田文々

近日御返し可申上候多事紛冗不ニ様々

乃兄に宜様御風聲奉希上候 草々

十四日

蕭海三拜

二十一回夫子 几下

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

四三六

萩野時行太に與ふ 安政五年五月十七日

松陰在萩松本 萩野在長門國須佐

十四日之書十七日來ル大繁劇ニ付委細不申上候

瀧高妙○先書之趣横山有吉天野ナトへ見せ候所大ニ立腹早速絶交ヲ贈ナト申候へ共其段ハ差留置申候御出府之上委細御話可仕候○足下遊學允許妙中谷も過ル十日ニ歸着也

來原・久保ノ論シ候處にてハ主公云翁介出候上ニる何分之決斷可致候由之仰ニ議論ハ銃陣開港之二義ニ

○秋良就囚ノ説ハ大虚言惣有有志之士留京六ヶ敷ナト絶テ無レ之事天朝上書ノ道大ニ開ケ吾々下國草莽ノモノモ畏クモ 九重へ上書相成候夫故僕も昨日對策別ニ愚論一篇京師へ出し候此一事ニても御奮勵可然候中々涙ノ流レタ話

テハナキカ志士屏息トハ何事カ○茂樹之來ハ甚妙待入候

○先日之連名書僕一處置アリ御氣遣被成間布候○本月十日月性和尙物故同志中大働○十二日江戸飛脚來ル勅諭ノ寫寫附リ度候へ共未暇相添幕問果ノ吾公ニ下り候地方政府ハ勿論預メ定論有レ之御加判中大會議大愉快論アリシ由ニ候周布政之助十五日ハ

大急キニテ江戸へ被差登候天勅不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>奉也、墨夷不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>絶也ノ二句天下ニ明ラカニナルカ周布ガ切腹カ目ヲ張テ待玉ヘ〇足下ハいつ頃發程カ

五月十七日

松陰

僕病氣大快御氣遣無<sub>レ</sub>之様ニ孰ヘも御傳へ被<sub>レ</sub>下度候小國<sup>(益田)</sup>邦衛已下宜敷御傳へ茂樹<sup>(與十郎)</sup>へ尙以宜敷御頼致候内藤生勉強候哉中々心ニ懸リ候也

荻野時行 足下

富永ハ口羽へ行留守ナリ

品川<sup>(武忠)</sup>生病氣快氣と存候生兄弟へ御便り御座候ハ、宜敷御申傳可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候

(下關市神代正一氏藏 校合濟園)

四三七

中谷正亮に與ふ

安政五年五月頃

松陰在萩松本  
中谷在萩(カ)

寅ハ僕が生年あり

隨分心強ク頼母敷御存可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成訳ハ甲寅ノ歲墨夷ノ條約ノ定處<sub>レ</sub>ハ即神武天皇舉義之御年あり否ナものと案煩ヒ候所不<sub>レ</sub>圖もカ、ル難<sub>レ</sub>有事ニ成行モウ四年待玉ヘ辛酉ノ歲ガ來ル是 神武御成業ノ御年なり

此事僕幽室中ニ感得セシコニテ中々同志中ヘも妄リニ語らざる事ニ御座候へ共先日被<sub>レ</sub>仰下<sub>レ</sub>候八八九九ノ説ノ感カク書付申上候一見火中為<sub>レ</sub>妙 寅白

(東京市松林桂月氏藏 校合濟園)

四三八

久坂玄瑞に與ふ

安政五年六月一日

松陰在萩松本  
久坂在江戸

飛脚差向キ不<sub>レ</sub>詳<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>思大畧申上候〇中谷・荻野今月七日頃より出足ノ筈中谷ハ京・伊勢・越前等ニ遊ヒ荻野ハ遂ニ東下安井忠平ヲ師トスル積ニ〇清狂吟稿二冊上梓シテ天地間ニ留メ度と同志中決<sub>レ</sub>僅候口羽・久保等主ニ其事ニ候叙ハ拙堂ヘ託スル積リ中谷ノ受合あり跋文ハ莫<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>足下ニ一統申事ニ付御考案可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候拙堂序成、刪定も出來候ハ、中谷ハ足下ヘ被<sub>レ</sub>贈答ニ付届候ハ、願之事御取計可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候〇去月十六日京師へ好便有<sub>レ</sub>之僕ガ對策別ニ愚論一篇梁川星富へ贈り候此度中谷ニ託シ愚論の續梁翁へ贈り候積リ大意ハ不<sub>レ</sub>外ニ對策候國字ニテ認候學校論航海下手ノ策ナドも詳ニ致候〇堀田ノ近況墨夷ノ様子何如

六月朔日

藤寅拜白

日下実甫足下

松洞へ無<sub>レ</sub>書此書御見せ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候

桂へ先日之議論如何と御傳へ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候

(以下久保清太郎が餘白に書添へたるものである)

清太敬白

四月廿三日之貴翰忝拜見仕候御入塾後彌御出精可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成御考奉ニ珍喜候江戸方の泰平を破リ候半と云ふ周布翁出足仕候所此節ハ着可<sub>レ</sub>仕と相考候如何之様子ニ候哉後便御聞せ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候私儀貴答旁別書可<sub>レ</sub>差上ニ答之処此節母欠分相ニ付不<sub>レ</sub>得ニ間暇ニ塾にも両

三日ニ壹度參候位之事故今晚も一寸参り懸り先生の書餘りし番を得御断而已申上候以上 (東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

四三九 某に與ふ 安政五年六月十九日 松陰在萩松本

十五日 殿様御歸城奉<sub>(益田)</sub>恐悅候十六日彈正殿壹人被<sub>(益田)</sub>召出<sub>(益田)</sub>御留守中之事被<sub>(益田)</sub>聞召上<sub>(益田)</sub>候此日彈正殿諸生之議論京城風説其外何もかも被<sub>(益田)</sub>持出<sub>(益田)</sub>候由是ハ江戸方壅蔽アラシクテ恐レテナリ此日四ツ半時ハ八ツ時まで御前ニ快論アリシ由僕等も内々ちりら身<sub>(益田)</sub>餘り候難<sub>(益田)</sub>有御噂被<sub>(益田)</sub>遊候由此事ハ外ニ可<sub>(益田)</sub>申上<sub>(益田)</sub>候十七日十八日御目見、十七日之夕方ハ滿願寺へ御アルキ初、今十九日御門出、御參堂等誠ニ何事も御速之事大有爲之思召前知難<sub>(益田)</sub>有奉<sub>(益田)</sub>存候○言路一條大ニ開ケ候因奴ノ言も直ニ 君公へ達候事體ニ相成而モ大臣國相より上達スルトハ前代未聞之事共ニ就<sub>(益田)</sub>ルハ遊學之諸君御建築風説等著實ニ御認メ送り可<sub>(益田)</sub>被<sub>(益田)</sub>下候左候ハ、直々上達之道有<sub>(益田)</sub>之候様相成候彈相・周布も夫ニ準シ氣魄甚盛ニ○周布東行江戸まで達セヌハ残念然<sub>(益田)</sub>シ京<sub>(益田)</sub>過<sub>(益田)</sub>り梅田<sub>(益田)</sub>へ逢隨分愉快之談アリト申事僕送<sub>(益田)</sub>周布<sub>(益田)</sub>一詩アリ周布ノ次韻好作出來申候

幽囚録ハ傳<sub>(伊藤)</sub>之助<sub>(伊藤)</sub>より榮太<sub>(吉田)</sub>へ送<sub>(吉田)</sub>レト申置候

此節<sub>(伊藤)</sub>兩相御断出候是<sub>(伊藤)</sub>ガ定<sub>(伊藤)</sub>ラチバ嬉シトテメツタニ喜<sub>(伊藤)</sub>フコモナラズ候庸相猶可、奸相ガ出<sub>(伊藤)</sub>テハサツバリ夫切リ

\* (國相益田正、行相浦和良)

(萩市豊田勝藏氏藏 校合濟堂)

四四〇 久坂玄瑞に與ふ 安政五年六月十九日 松陰在萩松本 久坂在江戸

伊佐塾<sub>(安門)</sub>ニ頻<sub>(中谷)</sub>ニ讀ム様子ナリ茂十郎山口へ行留守中<sub>(中谷)</sub>ニ正亮九州<sub>(中谷)</sub>ハ戻リ大ニ叱ル故頗ル憤勵ノ機アリ來原姪岡部<sub>(富太郎)</sub>ハ兄ノ品鑑ノ如シ福原一向<sub>(中谷)</sub>不<sub>(中谷)</sub>來近來ノ勉強家ハ岡部ノ外有吉熊次郎・木梨平之允等<sub>(伊藤博文)</sub>之中井ノ侄ノ由天野清三郎中々奇物他人未<sub>(五)</sub>ニ深取<sub>(五)</sub>一僕獨愛<sub>(五)</sub>之藝生富樫文周頻<sub>(五)</sub>ニ讀ムナリ此五生皆寄宿、提山坊主大ニ進<sub>(伊藤博文)</sub>ム利介亦進<sub>(伊藤博文)</sub>ム中々周旋家ニナリサフナ南<sub>(五)</sub>館中<sub>(五)</sub>ニる勉強ノ由山根<sub>(武治郎)</sub>も定<sub>(武治郎)</sub>メテ勉強ナラン兄去後山根ハ兩三度來ル南ハ絶<sub>(武治郎)</sub>テ不<sub>(武治郎)</sub>來人各有<sub>(武治郎)</sub>志兄決<sub>(武治郎)</sub>勿<sub>(武治郎)</sub>強<sub>(武治郎)</sub>レ人○松洞所<sub>(德助)</sub>良松桂老人四月十日物故榮太<sub>(吉田)</sub>ニも知<sub>(吉田)</sub>スベシ○口羽<sub>(德助)</sub>へハ不<sub>(德助)</sub>絶往復口羽ノ識見益進詩眼大進<sub>(德助)</sub>ム清狂稿論定<sub>(德助)</sub>ハ口羽<sub>(德助)</sub>へ託候<sub>(德助)</sub>跋<sub>(德助)</sub>ハ兄早々御認<sub>(德助)</sub>可<sub>(德助)</sub>レ然候松洞ガ良<sub>(德助)</sub>セシ圖ヲ卷首へ出<sub>(德助)</sub>シタシ刻手彼是撰置候様御相談可<sub>(德助)</sub>被<sub>(德助)</sub>下候蕭海傳ヲ作ル管是ハ像ノ傍へ附置<sub>(德助)</sub>テ中谷<sub>(德助)</sub>へ託<sub>(德助)</sub>シ拙堂<sub>(德助)</sub>へも撰擇<sub>(德助)</sub>と叙<sub>(德助)</sub>トヲ頼置候江戸ニる藤森<sub>(德助)</sub>へとも一叙<sub>(德助)</sub>ヲ乞<sub>(德助)</sub>テハ如何是も清狂生前ノ知己ナ<sub>(德助)</sub>レハナリ委細ハ中谷<sub>(德助)</sub>ガ申上候管ナ<sub>(德助)</sub>レ思ヒ出候所<sub>(德助)</sub>文書附置候御考合可<sub>(德助)</sub>被<sub>(德助)</sub>下候淡水<sub>(赤川)</sub>へも御相談可<sub>(赤川)</sub>被<sub>(赤川)</sub>下候○直八<sub>(時山)</sub>も折々塾へ來<sub>(時山)</sub>テ食<sub>(時山)</sub>ヲ炊<sub>(時山)</sub>テ宿スル組<sub>(時山)</sub>ノ者中<sub>(時山)</sub>ノ奇男子<sub>(時山)</sub>ニ可<sub>(時山)</sub>レ愛<sub>(時山)</sub>風<sub>(時山)</sub>ト思<sub>(時山)</sub>出候岩國<sub>(來原)</sub>ノ二宮<sub>(來原)</sub>小太郎<sub>(來原)</sub>へ良藏<sub>(來原)</sub>ガ遺候拙記

六月十九日

松陰生

実甫老兄

松洞へ別ニ不<sub>(松洞)</sub>遺<sub>(松洞)</sub>書付<sub>(松洞)</sub>一此書御對讀勿論ナリ

村塾寄宿生有吉熊次郎頗ル讀書出來サフあり氣アリ

\* (この行は原本反對側より逆に記しあり、反故なるべし)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

四四一 久坂玄瑞に與ふ 安政五年六月廿八日 松陰在江戶

(來書いつきも如斯五月ノ課ナルベシ 四月念六七書六月念七 達佐々謙・提山・岡部富太郎ナト少シク 奮勵直ハハ勿論)

病肺之事最早昔話ニ御座候必御案被下間布候此節大ニ暑中ニ候得共甚壯あり隔日左傳八家會讀勿論塾中常居七ツ過會讀終ル夫々島又ハ米春與ニ在塾生ニ同之米春大得ニ其妙ニ大氏兩三人同上リ會讀シナガラ春之史記ナド二十四五葉讀ム間ニ米精ケ畢八家文ナレハ亦一快あり口羽ニ話候ヘハ評云、オカ

黒龍江行之事僕ハ不同意あり併未タ深ク同志ヘ謀リ不レ申候同志決議之上委細可ニ申上ニ候大意云、一昨日益彈正・浦靱負入代リ今日益手元内藤萬里助・浦手元前田孫右衛門ニ御在國中ニハ餘程萬事募集候機會有レ之候尤も諸役人今兩三人ノ差除次第(元カ)也果シテ募集勢ナレハ桂・赤川ハ公命ニテ召返し大ニ人材鼓舞議議々々之手ヲ下シ度存候ヘ共久坂・松洞ハ矢張在江戶ニ四方之新聞取糺シ連ニ注進中谷ハ上國ヲ受持北條源藏ハ長崎受持可レ然候是晴天積リニ然處佐々木ハ贈リ候洋言ノ如キ事差向キ今日も知レ不レ申上國ヲ差捨テ遠ク黒龍ヘ行ケル時勢ニ無レ之候「大樂ガ周旋ハ誠ニ感心但江戶ニ此事ヲ謀る所果何如財用ハ大坂米粟ハ北國近江辺ニコソアルベキニ」又海外ニ出ル道アラハ北京・廣東ヘ行、洋言之實否ヲ糺スヲ急務ニ御座候併是も空論ナリ残念々々併黒龍江行ハ來春ニ相成候ハ、夫迄ニハ何トカ時勢出來可レ申候

勅使東下ノ策僕亦思レ之但シ恐多キヲナレモ幕吏手揃ノ中ヘ一人ノ公卿ノ御下リニテハ迎も説貫キ六ヶ敷可レ有レ之と考、又論シ通ニ仕候併是ハ今ニテ思ヘハ甚勿体ナキ考ナリ早速中谷迄申遣スヘク候中谷ハ京邸ヲ根據トシ伊勢・越前

へ跋涉之積リナリ用事アラハ書翰京邸まで御出シ可レ然候中谷ト二兄と氣脈ノ絶ヌ様ニセ竹嶋讀島為ニ英夷有「其難」信候興膳近日も福原まで申來候北國船毎々往返其前後ヲ通船致候ヘ共為レ何事も無レ之様子又嘆夷既ニ據レ不レ苦矢張開墾ヲ名トシ交易ヲナシ因テ外夷ノ風説ヲ聞ク「尤も妙嘆夷既ニ據レハ別る難」差捨ニ候無レ左候ハイツ何時長門ナトヘ來襲も不レ可レ測也寸板不レ能下レ海ノ陋ヲ破ルニハ是等ニシク妙策ハ無レ之候黒龍・蝦夷ハ本藩ハ迂遠夫ハ竹嶋朝鮮・北京辺ノ事コソ本藩ノ急ニ相見候

吉松論ハ先書ニも申上候先夫ありニ可レ被ニ成置ニ候文冊何トゾ西遊サセ度ものナリ是までハ昨夜ノ書ニ是よりハ今夜廿八日之書ニ今日口羽來訪折柄高杉落合、有隣(富水久保)清太談論、口羽も此節少々不快胸痛之氣味ニて此節至極悠々閑雅氣保養之積リ夫ニ付今日不レ圖(清狂詩ナト論候)詩話ナトニテ終レ日近來ノ好キ祭り仕候住吉就中憂國之談も一二有レ之候○塩屋文、論澳門居夷、以下五六篇皆妙実ニ海内之文宗と覺候塩屋ノ上梓本ニ日本海航記と申もの有レ之是ハ彼理等廣東ニて日本來航之事ヲ議タル書ノ由御せんさく一二本御購贈可レ被下候

六月廿八日

松陰寅白

実甫足下

對策ハ穴戸ヘ向ケ出候穴戸本月十日発京大和廻リ近日帰ルベシ歸りし上對策ノ事尋ベシ

(別紙)

得レ士最良策、併不レ如レ使<sup>レ</sup>士得<sup>レ</sup>子吾之為<sup>レ</sup>愈、己ヲ成シテ人自ラ降参スル様ニセテハ行ヌナリ此節愚識如<sup>レ</sup>右一変候  
 松洞ハ画ヲツトメ且讀書ヲ勉メ玄瑞讀書作文ツトムヘシ人ヲ結フモ吾ヨリ意アリテハ途ニ長久セズ只來者不<sup>レ</sup>拒、去者  
 不<sup>レ</sup>追ニアリ僕一病慚快候ヘ共學業兎角荒廢殘念々々兎角非力故榮太スラ既ニ輕視シテ去ル況其他ヲヤ只自力ヲ強ク  
 シテ人自ラ來ル如クスベシ傳<sup>(伊藤)</sup>之助も時々來候得共心服ト否ヲ不<sup>レ</sup>知偶余ニ心服スルモノ兩三輩アレト皆々力ナキモノ  
 ニ御座候力アルモノ、余ニ服シタルタメシナシ○櫻ヘ能ク御傳ヘ可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候村童ヲ集メ少々塾畑出來候且耕且讀位ハ  
 俗吏モヒドク怪ミ不<sup>レ</sup>申と御傳可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候○赤川ヘハ僕申迄もあく候得共前日之進講ハ大ニ裨益アリ月性以<sup>レ</sup>講諭ニ萬  
 民、淡水以<sup>レ</sup>講動三百里、好匹儔ニ候處片方ヲ失ヒ氣の毒なもの御申可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候○竹嶋論ハ能ク桂ヘ御相談可<sup>レ</sup>然候秋  
 ノ事ヲシテヤリテ開カセ置ケハ其上ハ致方アルナリ(朱書)  
 良ノ論案過シナリ嘆夷關キカケタレハ尙可ナリ何分一寸ナリト外ヘ張出サテハ不<sup>レ</sup>相揃<sup>(副カ)</sup>候水軍ヲ仕向ル、云ハ尙愚論  
 ナリ

水軍ニテ行ハ彼モ備ヲスル商船デ行ハ彼モ商ヲスルナリ

(別紙)

棟梁藤井勝之進一昨日來話造船ノ事大分手ニ入<sup>レ</sup>る話是<sup>レ</sup>今鍊鎖之事ヘカ、ル積リ併一人餘リ手ヲヒロゲテモ届不<sup>レ</sup>申  
 ニ付人ヲ驅リニ戻リ候周布・前田も中々本氣ニナリテ居ル様子併政府ノ差除相濟不<sup>レ</sup>申も何も論片附不<sup>レ</sup>申候藤井ハ  
 人物骨格並妙、事ヲ堪<sup>(二)</sup>サフナ男子ニ是ハ桂ノ愛養セシ人物あり此事御傳可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候豊三郎も同行崎陽ヘ行積ノ由松洞

ハ手紙ヲ遣ラヌトテ腹ヲ立テルニ不<sup>レ</sup>及此書ヲ對讀スレハ遣タモ同事ナリ

無逸ヘ附シ候事ニ付上符ハ略シ候御怪咎被<sup>レ</sup>下間布奉<sup>レ</sup>存候 頓首

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

四四二 某に與ふ

安政五年夏 松陰在萩松本

楞嚴漫富御讀違被<sup>レ</sup>成候よし珍重奉<sup>レ</sup>存候京師ノ事大氏風説通り御出被<sup>レ</sup>成候逆為<sup>レ</sup>指事も有<sup>レ</sup>御座ニ間布候併籠藩一脱十  
 分ノ大翻、御舒張存外ノ御發明も可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>在是事為<sup>レ</sup>老兄ニ珍重奉<sup>レ</sup>存候天下模稜ノ世中實ハ是も非もナキ泥海ニテ實地御  
 覽被<sup>レ</sup>成候ハ、如何にもトリ留め御迷惑可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成と奉<sup>レ</sup>察候萬々御自重奉<sup>レ</sup>專祈<sup>レ</sup>候

(萩市大津友太郎氏藏 校合濟)

四四三

×高杉晋作より

安政五年七月以前

高杉在萩  
松陰在萩松本

市仙携<sup>レ</sup>幽室文稿・奚所須高・宋元明鑑紀奉使抄<sup>レ</sup>來、再拜受<sup>レ</sup>之、乃共讀<sup>レ</sup>通鑑半冊、且讀<sup>レ</sup>奚所須高序、英氣益盛、讀書不<sup>レ</sup>倦、實市  
 仙者松下塾一奇仿也、如<sup>(坊カ)</sup>覺<sup>レ</sup>日々讀書是進、晋此五六日浪塵中々大空塵、讀書益倦、惰氣慚生、雖<sup>レ</sup>然自<sup>レ</sup>今日者、英氣大振、誠心  
 通貫如眼目<sup>(不)</sup>紙、

口羽兄亦出<sup>レ</sup>萩、未<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>賜<sup>レ</sup>先生之書、固知<sup>レ</sup>故欲<sup>レ</sup>通書未<sup>レ</sup>能矣、一昨夜田上氏來謂、口羽氏者何喪也、予曰母喪也、君以<sup>レ</sup>何知<sup>レ</sup>友



喪乎、田曰、予於享德寺門前日々遇之、普聞之大悦々、乃昨晚看三日痕入、而謂享德寺祖父墓、欲遇日羽、而侵律洞隣寺、然遂不得遇、殘念無限、  
(東京市吉田茂子氏藏 校合濟園)

四四四 久坂玄瑞に與ふ

安政五年七月六日 松陰在松本 久坂在江戸

日本國利漢年契只様、延引難御堪候今日好便アリトテ傳之助來り候故即託候○暗夷四隻蒸氣船献上と申候去月廿四日來崎候大變不遠と覺候○兄諸國脩行之事昨夜周布へ申入置候未々。○高杉願答不承候山縣半藏同齋藤榮藏三人廿日頃出足暢夫大ニ議論アリ甚妙齋藤ハ安井入塾ノ積リ之由暢夫ハ藤森共可然歟御考察被成候様奉存候○榮太へも時勢日々ニ迫り候段御傳へ可被下候 暗夷ノ四隻ハ五月晦墨夷ノ所謂ト同類カ異類ヲ未詳風説ニて前ラシク相聞候

(この退白は文首の行間にある)

御地同志之士可與談ニ時事、計有幾名、姓名承度候幕吏中有志之士承度候閣老堀田ハ如何脇坂ハ正議カ其他ハ伴食ハ蕭海、月性傳至極名文出來候僕も書事一篇認候不ニ相替ニ粗鄙一昨夜蕭海・秋良來ル秋良ハ留宿氣魄甚盛ナリ

七月六日

寅次郎拜白

久坂實甫兄 足下

本藩形勢益面白ク相見申候

(所藏者逸名 校合濟園)

四四五

桂小五郎・赤川淡水・久坂玄瑞に與ふ

安政五年七月十日

松陰在松本 三子在江戸或京都

此度ハ誠ニ取急キ代リニ送ニ杉藏ニ叙認申候御一覽可被下候書翰得認不申候杉藏志之所誠ニ致ニ感心ニ候僕力ノ届候丈ケハ此地ニ議論可仕候赤川・久坂二君北地行ハ誠ニ愚論周布政なとも左様申候御止り可然候桂君御細書誠ニ辱奉存候會約至極妙々何分御周旋可被成候(この退白は原本文首原白)高杉晋作廿日出足之答ニ御座候萬端被仰合ニ御周旋可被下候同道ハ山縣半藏ニ齋藤榮藏可嘆々々

七月十日

寅二郎

桂君

赤川君

久坂君

(東京市野村益三氏藏 校合濟園)

四四六

×中谷正亮より

安政五年七月十日

中谷在京都 松陰在松本

急々相待申候○當節も僕與ニ時行(秋野)藩邸ニる自炊仕居暫時も京師ニ留学之積リニ御座候得共未タ執レ沁も入門不仕候○本藩御固メ兵庫ニ相成候由突ニ国家大事と奉存候 夷人ニ對し候欲レ張ニ国夷(威カ)有レ推ニ疑幕府(謀カ)、從ニ幕府、則於國事、可上達ニ報慮ニ下受中有志之憤、振ニ先公之餘烈、亦在レ此、損ニ先公之餘烈、亦在レ此、處置果如何、在ニ君上大臣之心ニ焉耳、口羽・周布議論如何、高論是祈

七月十日夜聞ニ急傳、燈下走筆、乱雜御推讀是祈、

安政五年

四九

正亮拜

有隣・久保諸君に宜敷御致聲奉<sub>レ</sub>祈候

松陰先生 侍史

度々風説御座候得共只々一席之談ニ御座候間畧申候間東之様子も御承知<sub>セ</sub>奉<sub>レ</sub>存候又畧申候

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟藏)

四四七 桂小五郎に與ふ

安政五年七月十一日

松陰在萩松本  
桂在江戸

御細書披閱消<sub>ニ</sub>遙想<sub>ニ</sub>候竹嶋論元祿度朝鮮御引渡之事ニ付六ヶ敷もあらんと此地ニも議申候併當時大變革之際ニ御座候得<sub>テ</sub>朝鮮へ懸ケ合于<sub>レ</sub>今空嶋ニ相成居候事無益ニ付此方<sub>ノ</sub>開クナリと申遣候ハ、異論ハ有<sub>レ</sub>之間布若又洋夷共已ニ手ヲ下シ居候事あらは尙又難<sub>レ</sub>閣彼<sub>ノ</sub>足溜りとなら<sub>ニ</sub>吾長州ニ於テ非常ノ難アリ併已ニ彼<sub>ノ</sub>有と相成候ハ、致方ナシ開墾ヲ名トシ渡海致候ハ、是則航海雄畧ノ初<sub>ノ</sub>ニモ相成可<sub>レ</sub>申候蝦夷之事精々論シテハ見可<sub>レ</sub>申候へ共政府ノ事体中々夫程ノ雄志無<sub>レ</sub>之是ノミ嘆息之至ニ御座候○直一と老兄と之事御尤々々半渡馬<sub>物</sub>も良医の用トナル<sub>ヲ</sub>方劑家之工夫ニ御座候着眼とほし<sub>ケ</sub>れハ二三年在府シテモ迂遠<sub>ニ</sub>事との御事知<sub>ニ</sub>時務<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>俊傑<sub>ト</sub>コソ馬徳操申置<sub>サ</sub>りし<sub>カ</sub>り○會約一條至極感心仕候○高杉晋作近日出府仕候是ハ少年中之傑出<sub>ニ</sub>御座候玄瑞之才晋作之識とて毎ニ同友中ニも賞シ候事ニ御座候○丑寅已來ハ時事百變久シク不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>拜晤<sub>ニ</sub>誠ニ遙想仕候良藏<sub>也</sub>も家事不平多ク大ニ失<sub>ニ</sub>氣魄<sub>ニ</sub>候且先般申上候京

城之議もアリ何卒當秋ナト一寸御帰省之都合出來不<sub>レ</sub>申哉と奉<sub>レ</sub>待候左候ハ、政府も振作之機有<sub>レ</sub>之所ナレハ老兄之力ヲ以些ト世間ノ形勢も知せ度相合居候心事多緒不<sub>レ</sub>尺々々七月十一日

松陰寅拜

桂小五郎兄足下

(別紙)

竹嶋・大坂嶋・松嶋合セテ世ニ是ヲ竹嶋ト云廿五里ニ流れ居候竹嶋計り十八里有<sub>レ</sub>之三嶋共人家無<sub>レ</sub>之候大坂嶋ニ大神宮ノ小祠有<sub>レ</sub>之出雲地<sub>ノ</sub>海路百二十里計産物蛇魚類良材多ク有<sub>レ</sub>之開墾致候上ハ良田美地も出來可<sub>レ</sub>申此嶋蝦夷ノ例ヲ以て開墾被<sub>ニ</sub>仰付<sub>ニ</sub>下<sub>ノ</sub>願出航海仕候もの可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候

(外封)

封

江戸  
桂小五郎様

平安要用

辱知生

(東京市木戸幸一氏藏 校合濟藏)

四四八 前田孫右衛門と往復

安政五年七月十二日

松陰在萩松本  
前田在萩

今日愚兄罷出候節京師飛脚又々参り候由承り候故甚案勞仕候此<sub>此間飛脚ニ</sub>江戸<sub>ノ</sub>歸り候もの杉藏と申もの至極忠誠之人物ニ付御様子相伺度差出候間不<sub>レ</sub>苦候ハ、大意之所御聞せ被<sub>レ</sub>下候様奉<sub>ニ</sub>希上<sub>ニ</sub>候勿々不<sub>レ</sub>

安政五年

五一

七月十二日

孫右衛門様座下

(外封)前田孫右衛門様

(全紙裏前田返書) 降 恕

辱ニ薰讀、如レ諭京都ノ書狀到來、假條約御調印濟之義、御老中連署ニテ廣橋・万里小路御両所様迄申參候由、誠以惡逆無道可レ惡之極以細ハ杉藏ニ申置候間、御聞可レ被レ下候猶又筒井ノ之上書流涕數行、災ニ國賊天地間ニ置キ候ものニテ無レ之切齒之到候以上

七月十二日

孫右衛門

寅二郎様

(外封)杉梅太郎様

前田孫右衛門

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟囑)

寅二郎

杉梅太郎

四四九 前田孫右衛門と往復

安政五年七月十三日

松陰在談松本 前田在談

甚申上難キ事ニ候へ共要路中ニ若ヤ俗論邪說共ハ無ニ御座ニ哉甚氣遣敷奉レ存候

今日 庶議何如相決候哉、幕議違勅之上ハ御雷同不レ被レ遊候段ハ申迄も無ニ御座ニ候得共今日徒ラニ致ニ安座ニ候るニ矢張助レ禁為レ逆之理ニ御座候此所如何御手ヲ被レ下候哉、道太上京被レ仰付ニ候由本藩ノ国是ハ勿論御密奏可ニ相成ニ候所勅旨下リ候<sup>(迄カ)</sup>迎<sup>(迄カ)</sup>御見合被レ成候哉、陳又江戸へ今一應之御忠諫是亦肝要之儀と相見候間此条何如相決候哉此兩件ニテ凡

國是相定候儀ニ付内々大意之処御教示奉レ待候是等之義以ニ書中ニ御伺申上候も如何敷候へ共何分切迫之儀ニ付御高免奉レ頼候已上

七月十三日

寅白

遠老丈 座下

論ニ大義ニ一篇相認申候脱稿之上早々御持せ可レ仕候

(全紙裏前田返書) 降 恕

俗論無レ之段ハ御案心可レ被レ成候十七日大臣衆卿お召出有レ之申候其内下會議も重る論置可レ申候昨日ハ御忠告辱奉ニ多謝<sup>(同布政之助)</sup>候公輔も昨夜相見被レ申候

御表諭委曲承諾廟議確定難レ仕甚以苦辛仕居申候尤彌遠勅ニ相極候上ハ今一應是非幕府に忠告之義ハ大概一定仕候若幕府が巧言令色を以説盡 報慮を改させ候節之策いゝ致候る可レ然哉其期ニ到リ一策有レ之度事ニ御座候密奏之議も未決ニ御座候何も當節之確報無レ之るハ手を下候事出来兼大キニ煩勞仕居候道太參り候ハ、確報呈可レ上候

\* 七月十三日

霄 寅白 老兄

壤 致遠老丈 座下

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟囑)

\* (以下松陰筆を其ま、利用したるなり、霄壤老兄は前田無)

四五〇 × 荻野時行より

安政五年七月十六日

荻野在大阪  
松陰在森松本

関東之近状荒々申上候

一橋公御氣付書被<sub>レ</sub>差出<sub>レ</sub>候由主意ハ墨夷假條約之儀 勅諭之趣も有<sub>レ</sub>之候得共是非一圓御断可<sub>レ</sub>然若不得止ハ崎陽一港爾夷同様被<sub>レ</sub>差許<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然と之事故大田侯御内々御存寄被<sub>レ</sub>申候ハ方今之形勢中々是等之事被<sub>レ</sub>仰立<sub>レ</sub>候ハ甚御指支ニ相成候間御認替可<sub>レ</sub>然との事ニ候處一橋公曰吾等赤心ニツ無し強<sub>レ</sub>認替之義ハ相成不<sub>レ</sub>申左様之儀ふらハ氣附書出し申間敷とて御引取ニ相成候由尾州公御同意御打拂之御主意水府公素々御同様之由大田侯御認替之儀被<sub>レ</sub>仰立<sub>レ</sub>候處水府公曰若文義不<sub>レ</sub>宜ハ幾應も書改可<sub>レ</sub>差出<sub>レ</sub>其主意ハ決<sub>レ</sub>改候様不<sub>レ</sub>相成<sub>レ</sub>との御答之由ニ御坐候是等之事共觸<sub>レ</sub>忌諱<sub>レ</sub>候哉左之通被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>不堪<sub>レ</sub>洪敷之至<sub>レ</sub>候

尾張 中納言

思召御旨義被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候ニ付御隠居被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>候外山屋鋪へ住居穩便ニ致度御慎可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候尾州家相續之義ハ松平攝津守へ被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>候

水戸前中納言

思召——駒込屋鋪へ——被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>候

水戸 中納言

前中納言殿御思召——被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>候右ハ兼々中納言殿ニ及御心添被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>處御不念ニ思召候

但差扣之儀被<sub>レ</sub>相伺<sub>レ</sub>候付當分之内御登城ハ御見合被<sub>レ</sub>成候様被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>候

別紙

亞米利伽條約之義先般被<sub>レ</sub>仰進<sub>レ</sub>候通無<sub>レ</sub>御余儀ニ次第ニ條約調判相濟候處其頃普西亞船渡來去ル已年假條約爲<sub>レ</sub>取替<sub>レ</sub>相濟居候義

ニ付申立之件々精々評判之上取縮亞米利伽之振合を以條約御取結可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候右之趣先達ニ 淑開<sub>レ</sub>候様傳奏業<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申達<sub>レ</sub>候以上

七月七日

右ハ昨夜大久保要方にて承り寫取差出候事

七月十六日

隼太

松陰先生 玉榻下

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟書)

四五二 某に與ふ

安政五年七月十六日

松陰在森松本  
某在森

兵庫警衛御辭退之事高杉生先日ハ頗<sub>レ</sub>ニ議論仕候得共尤もとも不<sub>レ</sub>相考<sub>レ</sub>打過候處今朝風<sub>レ</sub>と思付候誠ニ卓識ナルヲ發明仕(反午前案文稿参照)揮<sub>レ</sub>筆作<sub>レ</sub>此篇<sub>レ</sub>申候何卒清侍御へ御申入奉<sub>レ</sub>頼候扱又京師在學生之事只今中谷正亮<sub>・</sub>荻野隼太兩人罷越居福原御留守と(與三兵衛)心ヲ協ハセ事狀報知之筈ニ御座候京人ニハ梁川星嵩尤も善ク 九重ノ御様子存知居且聖運法王へも時々謁見仕候故必星嵩ヲ尋<sub>レ</sub>候様兩人へ囑置申候又生田良佐と申至極沈実誠忠之士ニ御座候弊塾二十日許寓居仕候處昨日ハ上京仕候付矢張中谷と心ヲ協セ候様ニと申置候此趣ヲモ御序ニ侍御迄御通し可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候用事ノミ匆々拜白

十六夜

(前田孫右衛門又は中村道太郎に宛てたるものであらうか)

(熊毛郡三輪村福永卓爾氏藏 校合濟書)

四五二

×中谷正亮より

安政五年七月中旬

中谷在京都  
松陰在松本

今朝梅田方に参り候處源二郎曰今朝 粟田宮様に罷出候處御 目見被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>何か御憤懣之御氣色ニ被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>候も其方事折角可<sub>レ</sub>召寄<sub>レ</sub>之處幸ニ能<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>リとて近夕被<sub>レ</sub>召寄<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰候ハ天下之事危急存亡今日ニ迫<sub>レ</sub>リ昨夜去<sub>レ</sub>ル處を報知せり井伊掃部去月十九日江戸致<sub>レ</sub>至足<sub>レ</sub>ニ歸<sub>レ</sub>リ城普請抔致<sub>レ</sub>居候由尙又集<sub>レ</sub>家中之者ニ血判申附候由趣上<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>成事申附候共相背間敷との事然處家老之中岡本半助・井原主税之助今一人類リニ切諫致由一向不<sub>レ</sub>聞入<sub>レ</sub>人数四千斗リニ當<sub>レ</sub>月末方ニ<sub>レ</sub>京師警衛と名<sub>レ</sub>罷登<sub>レ</sub>り候由是ハ今度関東之處置 朝廷ニ<sub>レ</sub>イヤヲ云ハセメ積<sub>レ</sub>先脅嚇之術と見ヘタリ且來月十日迄ニ<sub>レ</sub>眞鍋<sub>下</sub>總守致<sub>レ</sub> 上京ニ<sub>レ</sub>由其時ニ<sub>レ</sub>朝廷大臣以下異論有<sub>レ</sub>之者ハ関白之命ふり大闇之命ふりとて片端<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>幽閉<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>恐 主上<sub>レ</sub>江洲に奉<sub>レ</sub>押籠<sub>レ</sub>候覺悟相極メ天下にて 主上之思召<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>り抔とて汚<sub>レ</sub> 皇國<sub>レ</sub>之振舞必然之事也其時ニ到<sub>レ</sub>りてハ最早手之附處も有間敷其内ニ一策有<sub>レ</sub>たき事也 主上<sub>レ</sub>を始奉<sub>レ</sub>り吾等其外近衛左府・中山大納言・久我抔ハ其時ニ到<sub>レ</sub>り候てハ有志之大名に翰旨を下<sub>レ</sub>ス之外手段無<sub>レ</sub>之と致<sub>レ</sub>覺悟<sub>レ</sub>処ニ其方<sub>レ</sub>内々聞<sub>レ</sub>紀可<sub>レ</sub>申左スレハ少シ人数成共京大阪之間ニ上<sub>レ</sub>置警衛致様周旋可<sub>レ</sub>致也且又関白に其儘ニ致<sub>レ</sub>置候<sub>レ</sub>ハ 朝廷之大害ニ相成候間何卒可<sub>レ</sub>除策無<sub>レ</sub>之哉書附可<sub>レ</sub>出也諸大名に 翰旨之文も書附可<sub>レ</sub>出也と被<sub>レ</sub>仰候由ニ御座候左候ハ、承久之事目前ニ有<sub>レ</sub>之候様相考申候然處俗論家抔ハ左様事出來候<sub>レ</sub>天下之人黙してハ居間敷様と申候<sub>レ</sub>一向不<sub>レ</sub>驚<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>輩も可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候得<sub>レ</sub>ハ是ハ俗吏見<sub>レ</sub>る不<sub>レ</sub>覺取<sub>レ</sub>只 君公大夫之心を確<sub>レ</sub>メ居事大急務と奉<sub>レ</sub>存小生初<sub>レ</sub>書生輩之講<sub>レ</sub>史候<sub>レ</sub>承久抔の事ニ到<sub>レ</sub>り候<sub>レ</sub>ハ此時ニ<sub>レ</sub>天下ニ一人有志之者無<sub>レ</sub>之哉と涙を流し齒を噉<sub>レ</sub>ハリ候得共今日ニ到<sub>レ</sub>り候<sub>レ</sub>ハ銘々尻込ニ致<sub>レ</sub>し人ニ譲<sub>レ</sub>り時を待<sub>レ</sub>抔と申必竟太平柔弱之習氣ニ御座候承久時抔も其等之有志<sub>レ</sub>澤山ニ有<sub>レ</sub>之候様被<sub>レ</sub>考候賜目井目之謠之如其局ニ當<sub>レ</sub>り候<sub>レ</sub>ハ氣付兼<sub>レ</sub>る者相見申候當時迄も人之起<sub>レ</sub>るを頼<sub>レ</sub>居候内ニ関東<sub>レ</sub>手を廻<sub>レ</sub>し 主上<sub>レ</sub>に彦根迄も押籠<sub>レ</sub>メ奉<sub>レ</sub>り候<sub>レ</sub>天下ニ號令スルトキハ曾<sub>レ</sub>孟德抔の遺策陳腐ナレ<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>恐<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>其時ニ到<sub>レ</sub>り起<sub>レ</sub>ル人ふくハ其儘ニ差置<sub>レ</sub>きや若シ兵を擧<sub>レ</sub>ケハ勤王ハ扱置謀反之名を蒙<sub>レ</sub>りとも事ハ成<sub>レ</sub>り申間敷同シ天下ニ先達<sub>レ</sub>テ事ヲ起<sub>レ</sub>ナラハ 主上<sub>レ</sub>之御身ニ

事無<sub>レ</sub>キ内ガ誠ニ好機會かと奉<sub>レ</sub>存候何<sub>レ</sub>レ<sub>レ</sub>関東<sub>レ</sub>と違勅之名<sub>レ</sub>勿論因循家<sub>レ</sub>共其名義ニ服<sub>レ</sub>し相應サル<sub>レ</sub>事ヲ得<sub>レ</sub>中間敷奉<sub>レ</sub>存候是等之處周布氏に篤と御議論奉<sub>レ</sub>祈候 一警衛人数御國<sub>レ</sub>御登由ニ相成候儀ハチ度六ヶ敷御座候ハ、浦賀之人数を急ニ御呼下<sub>レ</sub>シニ相成精英を撰<sub>レ</sub>び京大阪之内に暫之間御留置被<sub>レ</sub>成候得<sub>レ</sub>誠ニ妙かと奉<sub>レ</sub>存候左スレハ彦根四千之弱兵恐ニ足<sub>レ</sub>らずとも狼藉之取計得<sub>レ</sub>仕間敷候然<sub>レ</sub>ハ天下之功業大忠義之ニ過候事ハ有<sub>レ</sub>ラシト奉<sub>レ</sub>存候何卒御周旋奉<sub>レ</sub>祈候小生も即刻<sub>レ</sub>大坂に罷下<sub>レ</sub>り急便相頼<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申且又大久保ニ致<sub>レ</sub>相對<sub>レ</sub>水府抔動<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申積<sub>レ</sub>御座候已上

(寫本東京市掛取三郎氏藏 校合濟慶)

四五三

益田彈正に贈る

安政五年七月中旬頃

松陰在松本  
益田在松本

衆議ト道謀トノ差別肝要ニ奉<sub>レ</sub>存候衆議ト申ハ 君公御壹人御決心被<sub>レ</sub>遊候<sub>レ</sub>大臣小臣士民等へ御決心之筋ヲ議セラル、ナリ左候へ共事必成就可<sub>レ</sub>仕候道謀ト申ハ決心無<sub>レ</sub>之候<sub>レ</sub>誰<sub>レ</sub>氣付<sub>レ</sub>ハドウカ彼ガ氣付<sub>レ</sub>ハコウカと問フ事ニ 朕志先定、詢謀僉同、鬼神其依<sub>レ</sub>龜筮<sub>レ</sub>協助ト申一句何卒 君公へ一書被<sub>レ</sub>仰上<sub>レ</sub>候誠忠之士ハ無<sub>レ</sub>之もの<sub>レ</sub> 君公ノ御志タニ定<sub>レ</sub>り候ハ、勤王ハ御一人ニても宜敷と御覺悟被<sub>レ</sub>遊候事肝要ニ奉<sub>レ</sub>存候陳又御末家・岩國へも御評議懸<sub>レ</sub>り候事急務ニ御座候別紙論三末岩國二篇是ハ近著<sub>レ</sub>囚室雜論<sub>レ</sub>と申内之一篇ニ付雜論未<sub>レ</sub>備候へ共此篇ノミ差出候<sub>レ</sub>も御評議奉<sub>レ</sub>祈候

(東京市益田兼施氏藏 校合濟慶)

四五四

×土屋蕭海より

安政五年七月廿二日

土屋、松陰  
在松本

殘炎甚御多元奉<sub>レ</sub>賀候廟議一定致候由可<sub>レ</sub>賀々々々藝州木原<sub>レ</sub>書東到來清狂祭文再至、供<sub>レ</sub>電囑<sub>レ</sub>候故御痛正可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成下<sub>レ</sub>候過日友人村田

勝藏が承り候得じ默霖備之三原にて囚られ藝城にて囚獄し罹り候由実説の様申居候々一怪事也遠崎邊にて長濱より居由虚実不分明御塾生藝州生に御尋可被成下候乃兄近來御紛充らん一向御目懸り不申御次手ニ御致意可被成下候草々

廿二日  
外封 二十一回夫子侍史

※遠崎は周防國にあり月性の居所、長濱は安藝國にあり默霖の居所

(東京市榊取三郎氏藏 校合濟堂)

蕭海生

四五五 中谷茂十郎より中谷正亮に贈る(松陰筆)

安政五年七月廿三日 茂十郎在萩 正亮在京都

與各章齋山田先生書(戊午國室文相所藏のもの)

此書御一見直久坂の御送り被成候様ことの事ニ御座候

七月廿三日

茂十郎白

叔父君 座右

(前の全文は勿論松陰筆にして、添書も亦松陰が代りて書いたものである) (文意を察するに茂十郎の名を以て、松陰より正亮への傳言であらう)

(神戸市福本義亮氏藏 校合濟堂)

四五六 ×土屋蕭海より

安政五年七月廿三日 土屋在萩 松陰在萩松本

昨日芳東蕭誦御門生相對御免被仰付候様大賀此事候山田氏も造艦役被仰付候由廟堂精勵無遺方近來之希事後來之一新刮目

相待申候藝陽木原にの書狀を御繁用中不レ必ニ別裁此芳東直様差贈り可申候扱兵庫衛の御不同意之様子過日高杉子が承り申候如何なる議論ニ候哉縱令幕府之情偽顯然なる事ニ候共是々意中之事にて分明し辞令よ措き難かるべし且陷ニ其術中一まねして施我計ニ却る妙策にて 京師にの應援も宜しく且濱崎表を訓練致し士大夫操櫓の稽古も出來其外味噌醬油迄も積載候様なら々莫大之雜費を省き勞實著て浦賀之頓兵挫銳と同日論あらま



此邊にて一戦を如何にも愉快あらまや當今之時勢大名之一役を不レ免兵庫御断り有レ之候ても又々外之愚役を必定言付るる知べし彼是が善ふる者を取ら如く々なし彼是辞べ義を無レ之事かと存候御高論如何

過刺門生來り言ふ昨日之急足之趣を伊井伊兵衆引率シ 京師に御吏ニ被レ參候様子京師も左良玉の想を爲シ人心洶々たる事の由又伊勢 大廟に勅使之節を路上大風雨獻納之弓一張フツリ

折候由怪事々々水戸御父子・越前・尾州・雲州諸公皆々隱居被仰付候様子定メる西城一件あらん又幕府違勅書來り候由國國に觸知セ候てを以の外之義何卒此書に就て江戸表に御諫言被レ在候急務かと奉レ存候萬一此書城中に公見の沙汰に共相成候て大義之二字も水の泡諸有司之心膽如何分大義二字と多々 御當家引受と致シ度候へて 御匠祖様に對シ恐レ多く候事也 江戸表參勤之義を肥前之例に倣ひ御辞退被成候方可宜 此を俗吏に内々ま交候へ利之爲より夷より降參をる輩故何のくもなく相さむ可申候雖然信實の處未タ承り不申二三日奔走しかと実非を証シ候積ニ御座候 論々無益右隱居事共本事ニ候へ天下騷動可レ知矣御定論如何爲レ右早々申上候 頓首

廿三日

邑犬生拜

猛士几下

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

四五七

×中谷正亮より 安政五年七月廿四日以前

中谷在京都  
松陰在蘇松本

去廿日之芳簡今日福原ヲ落掌難<sup>(云)</sup>有奉<sup>(元カ)</sup>謹讀<sup>(ハ)</sup>候清狂吟稿之儀奉<sup>(ハ)</sup>承知<sup>(ハ)</sup>候此間星巖老翁其外梅田・家里<sup>(ハ)</sup>杯<sup>(ハ)</sup>少シ談申候所當節<sup>(ハ)</sup>忌諱<sup>(ハ)</sup>ニ觸<sup>(ハ)</sup>キ候得<sup>(ハ)</sup>少シ<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>も六ヶ敷由况清狂之詩忌諱<sup>(ハ)</sup>ニ觸<sup>(ハ)</sup>候處尤長所其貸削<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>も清狂師必不<sup>(ハ)</sup>能<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>誤<sup>(ハ)</sup>然<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>ハ如<sup>(ハ)</sup>ニ來<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup>上<sup>(ハ)</sup>梓<sup>(ハ)</sup>と<sup>(ハ)</sup>止<sup>(ハ)</sup>て活字<sup>(ハ)</sup>刷<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>方<sup>(ハ)</sup>宜<sup>(ハ)</sup>敷<sup>(ハ)</sup>程<sup>(ハ)</sup>と<sup>(ハ)</sup>奉<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>存<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>若<sup>(ハ)</sup>左<sup>(ハ)</sup>様<sup>(ハ)</sup>相<sup>(ハ)</sup>成<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>へハ本藩<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>調<sup>(ハ)</sup>被<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>成<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>哉<sup>(ハ)</sup>吟<sup>(ハ)</sup>稿<sup>(ハ)</sup>早<sup>(ハ)</sup>速<sup>(ハ)</sup>完<sup>(ハ)</sup>壁<sup>(ハ)</sup>可<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>仕<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>間<sup>(ハ)</sup>有<sup>(ハ)</sup>無<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>答<sup>(ハ)</sup>奉<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>待<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>○蘭<sup>(ハ)</sup>夷<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>密<sup>(ハ)</sup>報<sup>(ハ)</sup>未<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>承<sup>(ハ)</sup>申<sup>(ハ)</sup>今<sup>(ハ)</sup>度<sup>(ハ)</sup>條<sup>(ハ)</sup>約<sup>(ハ)</sup>調<sup>(ハ)</sup>印<sup>(ハ)</sup>も<sup>(ハ)</sup>定<sup>(ハ)</sup>る<sup>(ハ)</sup>其<sup>(ハ)</sup>等<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>夏<sup>(ハ)</sup>々<sup>(ハ)</sup>起<sup>(ハ)</sup>り<sup>(ハ)</sup>可<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>申<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>可<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>惡<sup>(ハ)</sup>々<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>○岡<sup>(ハ)</sup>村<sup>(ハ)</sup>定<sup>(ハ)</sup>次<sup>(ハ)</sup>郎<sup>(ハ)</sup>事<sup>(ハ)</sup>先<sup>(ハ)</sup>書<sup>(ハ)</sup>申<sup>(ハ)</sup>上<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>其<sup>(ハ)</sup>後<sup>(ハ)</sup>消<sup>(ハ)</sup>息<sup>(ハ)</sup>隔<sup>(ハ)</sup>絶<sup>(ハ)</sup>○先<sup>(ハ)</sup>日<sup>(ハ)</sup>星<sup>(ハ)</sup>巖<sup>(ハ)</sup>翁<sup>(ハ)</sup>に<sup>(ハ)</sup>天<sup>(ハ)</sup>下<sup>(ハ)</sup>大<sup>(ハ)</sup>計<sup>(ハ)</sup>及<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup>談<sup>(ハ)</sup>所<sup>(ハ)</sup>先<sup>(ハ)</sup>達<sup>(ハ)</sup>る<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>高<sup>(ハ)</sup>策<sup>(ハ)</sup>も<sup>(ハ)</sup>已<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>達<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup> 報<sup>(ハ)</sup>覽<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup>今<sup>(ハ)</sup>日<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>至<sup>(ハ)</sup>り<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>も<sup>(ハ)</sup>已<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>條<sup>(ハ)</sup>約<sup>(ハ)</sup>調<sup>(ハ)</sup>印<sup>(ハ)</sup>相<sup>(ハ)</sup>濟<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>事<sup>(ハ)</sup>故<sup>(ハ)</sup>此<sup>(ハ)</sup>上<sup>(ハ)</sup>と<sup>(ハ)</sup>是<sup>(ハ)</sup>非<sup>(ハ)</sup>鎖<sup>(ハ)</sup>國<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>一<sup>(ハ)</sup>決<sup>(ハ)</sup>致<sup>(ハ)</sup>シ<sup>(ハ)</sup>公<sup>(ハ)</sup>朝<sup>(ハ)</sup>方<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>氣<sup>(ハ)</sup>力<sup>(ハ)</sup>を<sup>(ハ)</sup>益<sup>(ハ)</sup>策<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>外<sup>(ハ)</sup>無<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>座<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>梅<sup>(ハ)</sup>田<sup>(ハ)</sup>杯<sup>(ハ)</sup>も<sup>(ハ)</sup>鎖<sup>(ハ)</sup>國<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup> 報<sup>(ハ)</sup>慮<sup>(ハ)</sup>も<sup>(ハ)</sup>鎖<sup>(ハ)</sup>國<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup> 粟<sup>(ハ)</sup>田<sup>(ハ)</sup>宮<sup>(ハ)</sup>様<sup>(ハ)</sup>勿<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup> 近<sup>(ハ)</sup>衛<sup>(ハ)</sup>様<sup>(ハ)</sup>・中<sup>(ハ)</sup>山<sup>(ハ)</sup>様<sup>(ハ)</sup>・久<sup>(ハ)</sup>我<sup>(ハ)</sup>様<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>同<sup>(ハ)</sup>様<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup> 九<sup>(ハ)</sup>條<sup>(ハ)</sup>殿<sup>(ハ)</sup>下<sup>(ハ)</sup>大<sup>(ハ)</sup>閣<sup>(ハ)</sup>様<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>勝<sup>(ハ)</sup>り<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>大<sup>(ハ)</sup>俗<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup>此<sup>(ハ)</sup>節<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>決<sup>(ハ)</sup>儀<sup>(ハ)</sup>と<sup>(ハ)</sup>兩<sup>(ハ)</sup>殿<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>除<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup>○頼<sup>(ハ)</sup>三<sup>(ハ)</sup>樹<sup>(ハ)</sup>於<sup>(ハ)</sup>梅<sup>(ハ)</sup>田<sup>(ハ)</sup>處<sup>(ハ)</sup>致<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>面<sup>(ハ)</sup>會<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>星<sup>(ハ)</sup>翁<sup>(ハ)</sup>杯<sup>(ハ)</sup>至<sup>(ハ)</sup>極<sup>(ハ)</sup>同<sup>(ハ)</sup>意<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup>然<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>と<sup>(ハ)</sup>も未<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>タ<sup>(ハ)</sup>盡<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>議<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>○平<sup>(ハ)</sup>塚<sup>(ハ)</sup>彌<sup>(ハ)</sup>齋<sup>(ハ)</sup>に<sup>(ハ)</sup>致<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>尋<sup>(ハ)</sup>問<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>處<sup>(ハ)</sup>病<sup>(ハ)</sup>氣<sup>(ハ)</sup>故<sup>(ハ)</sup>相<sup>(ハ)</sup>對<sup>(ハ)</sup>不<sup>(ハ)</sup>得<sup>(ハ)</sup>仕<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>近<sup>(ハ)</sup>々<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>内<sup>(ハ)</sup>又<sup>(ハ)</sup>々<sup>(ハ)</sup>尋<sup>(ハ)</sup>問<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>積<sup>(ハ)</sup>り<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>座<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>○山<sup>(ハ)</sup>田<sup>(ハ)</sup>梅<sup>(ハ)</sup>東<sup>(ハ)</sup>相<sup>(ハ)</sup>尋<sup>(ハ)</sup>貴<sup>(ハ)</sup>文<sup>(ハ)</sup>評<sup>(ハ)</sup>語<sup>(ハ)</sup>相<sup>(ハ)</sup>頼<sup>(ハ)</sup>申<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>温<sup>(ハ)</sup>厚<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>人<sup>(ハ)</sup>物<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>得<sup>(ハ)</sup>共<sup>(ハ)</sup>世<sup>(ハ)</sup>事<sup>(ハ)</sup>至<sup>(ハ)</sup>る<sup>(ハ)</sup>迂<sup>(ハ)</sup>濶<sup>(ハ)</sup>時<sup>(ハ)</sup>務<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup>杯<sup>(ハ)</sup>相<sup>(ハ)</sup>成<sup>(ハ)</sup>申<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>○鈴<sup>(ハ)</sup>々<sup>(ハ)</sup>木<sup>(ハ)</sup>知<sup>(ハ)</sup>己<sup>(ハ)</sup> 粟<sup>(ハ)</sup>田<sup>(ハ)</sup>宮<sup>(ハ)</sup>様<sup>(ハ)</sup>諸<sup>(ハ)</sup>大<sup>(ハ)</sup>夫<sup>(ハ)</sup>進<sup>(ハ)</sup>藤<sup>(ハ)</sup>加<sup>(ハ)</sup>賀<sup>(ハ)</sup>守<sup>(ハ)</sup>至<sup>(ハ)</sup>る<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>俗<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>付<sup>(ハ)</sup>未<sup>(ハ)</sup>タ<sup>(ハ)</sup>尋<sup>(ハ)</sup>問<sup>(ハ)</sup>不<sup>(ハ)</sup>仕<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>○春<sup>(ハ)</sup>日<sup>(ハ)</sup>者<sup>(ハ)</sup>依<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>旧<sup>(ハ)</sup>正<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup>然<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>共<sup>(ハ)</sup>官<sup>(ハ)</sup>事<sup>(ハ)</sup>繁<sup>(ハ)</sup>冗<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup>未<sup>(ハ)</sup>タ<sup>(ハ)</sup>相<sup>(ハ)</sup>尋<sup>(ハ)</sup>不<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>申<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>○先<sup>(ハ)</sup>月<sup>(ハ)</sup>廿<sup>(ハ)</sup>九<sup>(ハ)</sup>日<sup>(ハ)</sup>京<sup>(ハ)</sup>師<sup>(ハ)</sup>三<sup>(ハ)</sup>家<sup>(ハ)</sup>大<sup>(ハ)</sup>老<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>中<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>召<sup>(ハ)</sup>登<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>勅<sup>(ハ)</sup>使<sup>(ハ)</sup>今<sup>(ハ)</sup>六<sup>(ハ)</sup>日<sup>(ハ)</sup>歸<sup>(ハ)</sup>京<sup>(ハ)</sup>近<sup>(ハ)</sup>々<sup>(ハ)</sup>聞<sup>(ハ)</sup>老<sup>(ハ)</sup>大<sup>(ハ)</sup>閣<sup>(ハ)</sup>下<sup>(ハ)</sup>總<sup>(ハ)</sup>守<sup>(ハ)</sup>上<sup>(ハ)</sup>京<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup>其<sup>(ハ)</sup>上<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>是<sup>(ハ)</sup>非<sup>(ハ)</sup>違<sup>(ハ)</sup>勅<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>節<sup>(ハ)</sup>者<sup>(ハ)</sup>先<sup>(ハ)</sup>生<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>高<sup>(ハ)</sup>策<sup>(ハ)</sup>如<sup>(ハ)</sup>何<sup>(ハ)</sup>本<sup>(ハ)</sup>藩<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>も<sup>(ハ)</sup>即<sup>(ハ)</sup>時<sup>(ハ)</sup>應<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>召<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>勢<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>座<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>ハ、 尊<sup>(ハ)</sup>王<sup>(ハ)</sup>攘<sup>(ハ)</sup>夷<sup>(ハ)</sup> 洞<sup>(ハ)</sup>春<sup>(ハ)</sup>公<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>功<sup>(ハ)</sup>業<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>若<sup>(ハ)</sup>シ<sup>(ハ)</sup>其<sup>(ハ)</sup>勢<sup>(ハ)</sup>無<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>時<sup>(ハ)</sup>ハ<sup>(ハ)</sup>航<sup>(ハ)</sup>海<sup>(ハ)</sup>遠<sup>(ハ)</sup>略<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>實<sup>(ハ)</sup>ヲ<sup>(ハ)</sup>以<sup>(ハ)</sup>て<sup>(ハ)</sup>幕<sup>(ハ)</sup>府<sup>(ハ)</sup>ヲ<sup>(ハ)</sup>匡<sup>(ハ)</sup>救<sup>(ハ)</sup>ス<sup>(ハ)</sup>ル<sup>(ハ)</sup>論<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>止<sup>(ハ)</sup>ル<sup>(ハ)</sup>ヘ<sup>(ハ)</sup>シ<sup>(ハ)</sup>此<sup>(ハ)</sup>以<sup>(ハ)</sup>幕<sup>(ハ)</sup>府<sup>(ハ)</sup>因<sup>(ハ)</sup>循<sup>(ハ)</sup>歲<sup>(ハ)</sup>月<sup>(ハ)</sup>を<sup>(ハ)</sup>延<sup>(ハ)</sup>シ<sup>(ハ)</sup>一<sup>(ハ)</sup>日<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>安<sup>(ハ)</sup>を<sup>(ハ)</sup>偷<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>策<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>陥<sup>(ハ)</sup>り<sup>(ハ)</sup>可<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>申<sup>(ハ)</sup>難<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>計<sup>(ハ)</sup>是<sup>(ハ)</sup>策<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>下<sup>(ハ)</sup>成<sup>(ハ)</sup>者<sup>(ハ)</sup>也<sup>(ハ)</sup>可<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>成<sup>(ハ)</sup>丈<sup>(ハ)</sup>ケ<sup>(ハ)</sup>ハ<sup>(ハ)</sup>勤<sup>(ハ)</sup>王<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>一<sup>(ハ)</sup>策<sup>(ハ)</sup>奉<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>祈<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>○京<sup>(ハ)</sup>師<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>周<sup>(ハ)</sup>旋<sup>(ハ)</sup>家<sup>(ハ)</sup>梅<sup>(ハ)</sup>田<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>止<sup>(ハ)</sup>り<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>是<sup>(ハ)</sup>ハ<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>承<sup>(ハ)</sup>知<sup>(ハ)</sup>之<sup>(ハ)</sup>通<sup>(ハ)</sup>り<sup>(ハ)</sup>宮<sup>(ハ)</sup>様<sup>(ハ)</sup>に<sup>(ハ)</sup>時<sup>(ハ)</sup>々<sup>(ハ)</sup>預<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>御<sup>(ハ)</sup>招<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup>其<sup>(ハ)</sup>外<sup>(ハ)</sup>ハ<sup>(ハ)</sup>皆<sup>(ハ)</sup>々<sup>(ハ)</sup>相<sup>(ハ)</sup>手<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>成<sup>(ハ)</sup>り<sup>(ハ)</sup>兼<sup>(ハ)</sup>申<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>源<sup>(ハ)</sup>次<sup>(ハ)</sup>郎<sup>(ハ)</sup>ハ<sup>(ハ)</sup>言<sup>(ハ)</sup>路<sup>(ハ)</sup>も<sup>(ハ)</sup>能<sup>(ハ)</sup>開<sup>(ハ)</sup>ケ<sup>(ハ)</sup>居<sup>(ハ)</sup>申<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>朝<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>上<sup>(ハ)</sup>り<sup>(ハ)</sup>夕<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>雲<sup>(ハ)</sup>上<sup>(ハ)</sup>ニ<sup>(ハ)</sup>達<sup>(ハ)</sup>シ<sup>(ハ)</sup>申<sup>(ハ)</sup>候<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup>可<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>賀<sup>(ハ)</sup>々<sup>(ハ)</sup>レ<sup>(ハ)</sup>も<sup>(ハ)</sup>諸<sup>(ハ)</sup>公<sup>(ハ)</sup>卿<sup>(ハ)</sup>を<sup>(ハ)</sup>別<sup>(ハ)</sup>る<sup>(ハ)</sup>六<sup>(ハ)</sup>ツ<sup>(ハ)</sup>ケ<sup>(ハ)</sup>敷<sup>(ハ)</sup>由<sup>(ハ)</sup>

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

四五八

某に與ふ

安政五年七月廿四日 松陰在蘇松本

覺書

御意の旨御文中に云今日を異變の始めと心得無二の覺悟を極むるに於ては本懐たるへし  
右に付戊午七月二十四日於ニ松下塾ニ申談の件々如レ左

- 一同隊同伍は勿論朋友知音志を合せ御意に相叶候様相互に氣を附合可レ申候事
- 一兵具並軍用金腰兵糧等の證議の事
- 一家内無用の雜具賣拂黄金に代る事
- 一飲食居所の費を省く事
- 一文武の諸藝出精の事
- 右の外にも心附次第追々書入可レ仕候事

寅次郎書

(松陰先生遺著所載 校合濟)

四五九 ×久坂玄瑞より

安政五年七月廿四日

久坂在京都  
松陰在萩松本

一昨夜穴戸播磨(與三兵衛)福原邸監迄赤川ト僕ト早々京師立去可ニ歸國一段申來候福原ハ正直一片之人物ニ候得ハ左程議論不仕即退邸仕候  
 昨朝(雲雀)梅田之樓に蟄シ居申候赤川ハ昨夜の淀船上ル歸國之上様子御聞可被遣候僕實今春出郷未レ有レ所爲何面目歸國、モシ此  
 事ニ附萩表(雲雀)がも又々歸國セヨト申來候共決して歸リハ不レ致候矣、僕之心事御察可被遣候僕も近日之中大和・高田邊に當分退居之  
 積ニ御座候他國ハ一人ても京師に人ヲ出ヌ折柄却て京師入ルヲ禁ス江戸之論誠ニ込入タ事ニ候萩表も亦如此に候得ハ早ヤ致方  
 ハ無ニ御座候と後便相待候何卒高杉・尾寺など有志之士人ニ上京有レ之度候京師ニ幕府方之人十二八九其上此度之警衛夷狄ヲ拒ク手  
 段ニても無ニ御座候○僕近頃中谷ト萩野ト謀ル致方之無キ様ニ相成候得ハ浪華邊に龍山伯ヲ始メ家ヲ借り自炊ニて天下有志之士ヲ  
 悉ク聚度候○(出陣之考ニハ大ニ異なり)陳僕中々奔走ニ金費にとても僕の小祿位にハ捌不レ申候僻塾共蟄シ讀書して居候得ハ随分十兩位でも参り候得共東  
 騎西馳致シ候てハ十兩てハ間ニ合不レ申候何卒政府に御論可被遣候毎月一兩宛一年十貳兩上ガ賜ル様ニと存候赤川にも申置候僕ハ  
 決して登樓(母方の親戚在所)なとして婦人(其方)一錢も費なと決し無レ之其上諸兄之警戒口羽之贈詩も有レ之銘ニ肺肝ニ居候此度少々(生雲に中谷候間贈出シ)  
 次第賓卿之處(中谷)迄御送可被遣候○陳僕先生之著書時々活刷(其方)なとて参候有レ之是ハ宜シカラス候近來問策なとも色々京師にチラハリ  
 申候何卒御良策も有レ之候得ハ梅田カ梁川カ頼カ之處に竊ニ御送り可被遣候色々脇方(入江)に参り候てハ終ニ策も不レ行候噫是も又吉  
 田之策文カ肝心之男シヤなと申位(其方)よて一向益キハ無レ之却て害も相成候夫ガハ此三氏(其方)なとに御送被レ成候得ハ良策ハ宮様になりと  
 も中山・近衛其外様なりとも随分被レ達候夫策ヲ獻スレハ續密(其方)て無くてハ用ル人も是ハ某々の策シヤト云レてハ少々氣毒な氣味も自  
 ラ有レ之候左候得ハ策ハ用ル人自身之策之様ニして用イサセテハ不レ相叶候象山之追々梁川迄竊ニ贈ル書世間ニ流布不レ致先生之書  
 ハ俗儒迂生之手ニ送も有レ之用ユル人も未見之時早ヤ世間ニ流布致てハ果不レ行候先生之文稿なとも色々他國人(其方)評(其方)なとサセルハ亦  
 不レ宜候先生之文大鉢國事ニ關係をレハ不レ評可ナリ無用之人(其方)にハ御見セ不レ被レ成と申候可なり色々(其方)と酷薄申上候得ニ何卒御諒察可

被レ遣候活刷なとも世人ハ功名ニ近シト不レ知ニ先生ニ者云様ニ相成候てハ遂ニ策も不レ行候○(以下一行半紙破れてなし)杉藏(入江)も此内東下之  
 由今日中谷に浪華ガ書贈り候由残念ナリ僕東西奔走讀書も不レ成事業も不レ建甚愧ニ諸兄ニ候清狂上人遺稿上梓是ハ活刷(其方)て無くてハ決  
 して不レ相捌候中谷(其方)がも申上候由ナリ○陳第一之急務ハ例之兵庫御警衛之事ナリ近來政府論如何腹ヲスヘ断然相州御引拂可被レ成  
 候幕府ノ論ハ唯名耳ニて因循姑息火急引拂サスル勢ハ無ニ御座候政府も一變是位之事不ニ出来てハサツバリ不ニ相捌候此内申上  
 候下 勅之事も諸侯カ強ク不ニ相成てハ難レ行候何も荒々用事而已申上候中谷・萩野も何き上ガ金ヲ不レ賜てハ不ニ相叶候と申居候  
 是も宜御頼申上候草々以上

七月念四

尚々皆々様に宜御風聲可被レ成候諸君子にも御頼申上候時氣御自護爲レ國是祈

松陰先生函丈

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

四六〇 ×久坂玄瑞より

安政五年七月廿五日

久坂在京都  
松陰在萩松本

京師之儒多ハ幕府に諂者ニて諸司代邊に常ニ往來仕候得ハ中々容易ニハ心腹ハ言ハレ候御策問之儀御高示可被遣候○唯今肥後  
 藤田(雲雀)甚五左衛門梅田(雲雀)へ來ル面白ソウナ人物之様ニ見へ申候何卒有志之士京師へ來ル(其方)縉紳(其方)の後押致度事候○僕來時松洞も窮居申候正  
 助何如論ニて居候哉事ニ因テハ松洞も歸國之積之由ニ御座候貧生可レ憐讀書も実ニ不レ就松洞込入居申候

七月念五朝

先生

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)



四六一 福原清介・中村道太郎・中谷正亮に與ふ

安政五年七月廿六日

松陰在該松本  
三人在京都

傳之助其外上京此義少シハ書生論行レ候氣味も有レ之候僕良藏等と量り候所にてハ京都之風聞不レ確且彦根等之事ハ一人御遣シ相成候ハ、実事明白ニ可レ有レ之候又尾侯蟄居ニ付尾國民心動靜彼是聞糺不レ仕るも不レ相捌ニ京々彦根まで宿々少ハ脇道ニても人物地理等詮儀、京々兵庫迄同斷、叡山・笠置・奈良・郡山・十津川・新宮・和歌山・伊賀ノ上野・津・山田・桑名・大垣・大津等へ夫々手ヲ分け御差廻可レ然候京都ノ公卿雲上之事ハ兩人居殘候へそ可ニ相分ニ付入代りノ四方之様子御聞合肝要ニ奉レ存候送ニ六人者ニ叙篤と御覽被レ下候る福原御留守居へ御論談可レ被レ下候委細ハ六人者可ニ申上レ候得共僕もも申上候ニ

七月廿六日

清介君

道太君

正亮君

寅白

(西宮市成田軍平氏藏 校合濟慶)

四六二 ×前田孫右衛門より(カ)

安政五年七月廿六日

前田在該松本  
松陰在該松本

！(前文關)一諸老へ此段を御申入有是し其時諸老返答、左様ニハ相成間舖と御申被レ成候ハ、其成サレ難意趣を承り可レ申候若其事ニ付

此儀先達カ公儀ニ於ても京都に被レ仰入ニふれり候へ共兎角主上ニハ江州にハ不レ爲レ入思召候々と申候ハ、答曰、左様ニ候ハ、私一應京都へ罷出此段直ニ傳奏方迄申上度何分私ニ於レハ此事ニ就る左様ニ相成候る心も安き能ハす候間誠ノ感する處いつく迄も論し申上<sup>(不明)</sup>候段申是し此時如何被レ成レ答御座有是く返答ニ應レ處置有是し何分勿々

小生儀も明後日出萩申候

玉稿拜覽、独善先生閉ニ天下之變ニ如何ノ思ヲナス可々

二十五日夜

書外明日出萩其節御議論承り可レ申候君難臣豈避、一語罵レ得独善夫子ニ足矣、又振ニ得独善夫子ニ足矣

二十六日朝

義卿足下 托三君

一覽之後可ニ製棄

(神戸市福本義亮氏藏 校合濟慶)

四六三 ×中谷正亮より

安政五年七月廿七日

中谷在該京都  
松陰在該松本

本月十一日貴翰過ル廿四日相達忙手奉ニ謹讀ニ候杉藏登塾仕候由同人カも報知仕候高杉も自力ニる廿日発程之由當節日々翹首可ニ相待申候半藏<sup>(山縣)</sup>カ何等之事ニ上京仕候哉至極不審ニ奉レ存候尾寺も遊學不ニ差免ニ候由嘸々不平と奉ニ遠想ニ候造船之事誠ニ妙ナリ何卒愉快ニ行ハレかしと奉レ祈候京師カ江戶にも御國にも別る便少ク江戶往來之飛脚も立寄不レ申候先日カ追々福原にも論し候得共中々引上ケテ吳不レ申何分太平人ニ困リ申候如ニ來論ニ來嶋と書面往復之事速早話<sup>(早速)</sup>し置申候何卒用ひて吳レハヨイト祈居申候來論之肥後人今日藩邸に尋來リ先生ニ御面會之様子話申候格別之人物ニて見不レ申候此節梅田方ニ寄宿仕候由話申候此間淡水・玄瑞上京

仕候處俗論なる淡水と婦国玄瑞と梅田方ニ寓居近々之内大和高田に行積リナリ（福澤）平塚にて一兩度参り申候得共病氣或他出たる未タ面會不<sub>レ</sub>得仕候山田梅東に致<sub>レ</sub>面會高文之評相頼置申候此人至る迂闊時務杯一向談不<sub>レ</sub>申候実ニ不<sub>レ</sub>知様子ニ御座候家里新太郎も塾を張リ書生も大分有<sub>レ</sub>之候様子此節で関東之手先共致し居候様話も有<sub>レ</sub>之候故余リ附合も不<sub>レ</sub>仕候久保氏檢使誠ニ妙ナリ來原之様子誠ニ歎息之到<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>存候梁川も梅田ニ遣ハレ居申候遠畧之論杯中々相談成兼申候眞部上京之事も今以相分り不<sub>レ</sub>申候大老も當分上京之儀（不脱カ）相成候由因循可<sub>レ</sub>惡京師之形勢淡水が御承知と奉<sub>レ</sub>察候先日と已ニ内勅も下り可<sub>レ</sub>申之勢之處今日ニ到リ又々様子替り候様子何分何爲御決極も無<sub>レ</sub>之由追々正義之次第も御衰へ被<sub>レ</sub>成候哉之由承り甚慨歎候連々も愉快ニ事行ハレ不<sub>レ</sub>申候然處先日以來朝廷之兩人岡田式部丞と申者ニ出會仕候此人到る之好人物正論之人ニ御座候三條家に親近ニ罷出候由此内々追々雄畧論仕候得て到る同意之様子ニ何卒書取吳候様申事故先生之議論之通りに此節之様子を加へ名を除き候る相渡し置候此人申分ニ此議論誠ニ妙ナリ何卒朝廷之議論ニして行度者ナリ三條殿屹と御勸メ可<sub>レ</sub>申上と申居候未タ何爲返答も無<sub>レ</sub>御座候得共とふか面白く参り候様奉<sub>レ</sub>考候舟越清誠誠ニ感心周旋仕候小生處にも毎々参り申候此度と到る急便故諸君に別ニ書狀差出不<sub>レ</sub>申候乍<sub>レ</sub>失敬一有隣兄に御投翰之御禮頼仕候宜敷奉<sub>レ</sub>希上候

七月廿七日

松陰先生 梧下

（東京市榊取三郎氏藏 校合濟處）

正亮拜

四六四 久坂玄瑞に與ふ

安政五年七月廿七日

松陰在松本 久坂在京郡

頼に堀田・水野を斬らうくと云ふ人あれとも僕思ふに積善の家には餘慶あり昔東照宮三成を助け置れし餘慶に今

も堀田・水野をきる人無きなり一笑

天網恢々疎而不洩とは此事を云ふか

本藩の事狀日々維新、實に小儒唯有<sub>二</sub>涙縱横<sub>一</sub>、日々御前會議、德音未<sub>レ</sub>た兩國に洋溢と申には無<sub>レ</sub>之候へとも秋中へは十分洋溢なり此事は委細申上度候へとも來月四日より尾寺出足に付夫まで御待被<sub>レ</sub>成候て寛々御聞可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候尾寺江戸に行事は杉藏（人江）に御話被<sub>レ</sub>下候は、嗚々喜ふならん京に傳之助・松介（伊傳）・仙吉（伊傳）・利輔（惣榮）・悦二郎（山縣）・小助（山縣）六人被<sub>二</sub>差登<sub>一</sub>候遊學論が行れぬとて皆不平を抱き居候處存外の榮選皆々生上り申候先是直八も上京是は無<sub>レ</sub>程歸來なるへし（人江・吉田）此事杉藏・榮太を喜はすへし（高杉）暢夫も追々到着なるへし宜舖御傳奉<sub>レ</sub>願候（福原清介も上京山田亦助も被<sub>レ</sub>召出<sub>一</sub>候）

軍船も一隻「フリッキ」出来るに決し候

榮太に御申傳へ僕家祖松野平助の事は京都にて中谷まで遣置候と御申奉<sub>レ</sub>願候

尾寺の外劍槍等の出精人數九人江戸に被<sub>二</sub>差登<sub>一</sub>候

長崎へも十人程被<sub>レ</sub>遣候是は蘭人に傳習なり

來原氣魄盛也事は精密、松島・小田村も至極周旋也大臣一統憤發中にも伊勢殿・益・福殿尤も君意に先きたち被<sub>二</sub>相働<sub>一</sub>候（毛利伊勢・益田正・福原盛後）

言路洞開は誠に二百年來の奇事と可<sub>レ</sub>申か

京に追々御往復被<sub>レ</sub>成候哉京の狀は誠に面白く候へとも江戸よりの分は甚氣魄薄く相見候此所御猛省可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候

堀田の謀主は誰か御聞可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候手塚律藏・木村軍太郎杯は用らるゝか否や岩國の二宮小太郎は如何<sub>レ</sub>肝要の事忘れ

よつたり片山與七儒者養子をするなり小田村に頼み人物を求む余因て中村理三郎外にも人あれとも先是より始む可然と申候小田村も片山も同意依之理三郎の母に談し候處是も喜ぶ様子併貫二在府に付問ひに遣すと申候何卒口羽覺藏か中村貫二に直言も宜敷候(片山の息女に配する下積りの由)

儒者片山養子を求む讀書の出來さうな者ならては不相掬一錢の土産をも求めはせず片山方に廢嫡の愚子あれとも是は三田尻の關屋とか申富商親類にて引受け世話する筈故ちとも煩には相成不申候何卒遣はさんか  
是迄小田村の曰くなり僕の曰く

儒者は業家とか云て人はいやかる其上片山小身なれば尙以ならん然とも是治世の論なり治世論を以て云は、儒者は學問行儀次第學頭にもなれば侍儒にもなれる不レ失ニ長柄傘也又國家の益をいへは一藩の子弟を造就すると君美を承順し君過を匡救すること程の御奉公はあるまい家業はいやの小祿てはいけぬのと云へき事に非ず況國家多事の時學問行儀の重き利祿の比に非ず理三の事決して片山の養子とならば松下塾に入らせて二三年せは随分出來可申と存候

右の趣を以て覺藏か寛二に御相談被下候様奉願候尤も是等の事老兄無得手ならば來島子に此書御見せ御頼可被下候

七月廿七日

寅次拜白

實甫老兄

(松浦松詞) 無窮には因例無書無逸は若し發しつれば無益と存無書杉藏にも無書皆々可然御傳可被下候

(松陰先生遺著所載 校合濟)

四六五 二宮小太郎に與ふ

安政五年八月朔日

松陰在藏松本  
二宮在岩國

原田熊五郎  
高橋藤之進

右兩生此度洋銃修行仕度老臺御尋仕候覺悟ニる貴地罷出候所貴塾へ共寄寓相成候ハ、大ニ仕合申候兩生儀僕友人土屋彌之助門下ニる讀書仕り僕所へも往來仕候者ニ付如レ此御願申上候委細來原良藏も書狀差上可申候へ共先右様御願仕候以上

八月朔日

吉田寅二郎

岩國  
二宮小太郎様

二白當春良三歸着大ニ老臺之御近狀相伺甚奉ニ歎慕ニ候也  
因繫中署名ハ用捨有レ之候故表署ハ用ニ他名ニ候萬御怪殺被下間布候

(外封)

二宮小太郎様 要用

萩城

來原良藏

安政五年

六九

(東京長藏は安政五年二月十六日相模より茲に歸る)

原田熊五郎  
高橋藤之進  
持參

(萩市松陰神社藏 校合濟)

四六六 尾寺新之丞に與ふ

安政五年八月三日 松陰在萩松本  
尾寺在萩

御出途嚙々御競奉<sub>レ</sub>察候

(戊午兩室文箱參照)  
送叙且々認候へ共甚蕪陋孰<sub>レ</sub>後便改正可<sub>二</sub>差上<sub>一</sub>候尤議論ハ少モ不<sub>レ</sub>変候但間々徐々御説得可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候餘り突直ニ過候  
へハ俗人或ハ怪怒致候此處貴兄へ甚氣遣申候別符二通ハ甚御面倒奉<sub>レ</sub>存候へ共御届御頼仕候

三日

寅一ノ

新之允様

(尾寺自身は新之丞ニ署名し松陰は多く新之允ニ書く)

(神戸市福本義亮氏藏 校合濟)

四六七 ×吉田榮太郎より

安政五年八月八日 吉田在江戸  
松陰在萩松本

尙々塾中富永先生始め大奮發之段杉藏一々申開せメ大喜悅奉<sub>レ</sub>り候

八月六日杉藏着邸御地動静略承<sub>レ</sub>り先進退事程能參<sub>レ</sub>り申候由賀<sub>レ</sub>之專一ニ御座候貴先生他人相對御許容有<sub>レ</sub>之候由追々杉藏頭ノジン  
ノ<sub>レ</sub>スル事計申開せメ誠ニ難<sub>レ</sub>有御事奉<sub>レ</sub>存候久保清太様ニも初<sub>レ</sub>御就官被<sub>レ</sub>遊候由可<sub>レ</sub>然御傳へ奉<sub>レ</sub>祈候此度ハ差急キ不<sub>レ</sub>暇<sub>レ</sub>呈<sub>二</sub>一書<sub>一</sub>

○赤・久之両君如何被<sub>レ</sub>成候歟と奉<sub>レ</sub>案候直<sub>レ</sub>ハ杉藏への書御讀可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>遣下<sub>一</sub>候一小人ノ噂<sub>二</sub>御不審懸<sub>レ</sub>りと<sub>二</sub>相成候由誠歟先ハ杉藏  
歸着再可<sub>レ</sub>申上之<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>此ニ御座候當地ハ爲<sub>レ</sub>何評判も無<sub>レ</sub>之故可<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>事御座候尙江曙五郎先生小石川傳通院ニ隱遁致サ<sub>レ</sub>候由如何  
之策<sub>二</sub>ヤ<sub>一</sub>

八月八日

榮太郎再拜

松陰先生様

松洞も壯健ニ御座候杉藏歸邸之儀申開スヘキと奉<sub>レ</sub>思候へ共無<sub>二</sub>致方<sub>一</sub>成丈ケ早く聞せ候積<sub>二</sub>リニ御座候

\*當時、赤川淡水・久坂玄瑞の兩名は京都にありて退京命令を受けた

(萩市吉田市右衛門氏藏 校合濟)

四六八 久保清太郎に與ふ

安政五年八月十三日 松陰・久保  
在萩松本

佐々木翁など近く隔牆の事來て一見の上被<sub>二</sub>申吳<sub>一</sub>候ても不<sub>レ</sub>苦事と怒を挟み居候段をも御申可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候

(編者吉次郎・佐々木四郎兵衛)  
瀬能・佐々木二翁より御氣附の段家兄よりも承<sub>レ</sub>り貴君よりも承<sub>レ</sub>り候得共何分口達にてはつかまへ處無<sub>レ</sub>之甚こまりし故  
別紙の通書附申候間二翁の御氣附も書面に御認被<sub>レ</sub>下候様御申入可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候左候は、其ヶ條ノ<sub>レ</sub>に當りて議論可<sub>レ</sub>仕候  
元來軍事は嚴を尙<sub>レ</sub>候譯にて白起も以<sub>二</sub>軍事<sub>一</sub>諫者斬共申候程の事にて事に取懸<sub>レ</sub>候ては色々の異論を夫れなりにして  
は軍令行はる、ものに無<sub>レ</sub>之候根を絶ち葉を枯すと申程に論し詰め萬一論し負け候は、僕は打止めにて佐々木翁に丸  
に頼み候様可<sub>レ</sub>仕と存候間翁の備立の法をも御尋可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候只今百人計の人數中にも異論申もの無<sub>レ</sub>之眞黒に相成居  
候間如<sub>レ</sub>此に候は、西洋にもせよ農兵にもせよ軍は勝ち可<sub>レ</sub>申候軍の勝てるか目途にて流儀を論するには無<sub>レ</sub>之候尤此

度の備立の山鹿流に相叶不<sub>レ</sub>申件々承度候僕も武教全書を研究する事數十年〔見合頭取も同様の事〕全書の意味少しは會得仕居候且又瀬能より御示の御沙汰面は一向此度の備立にはか、はり不<sub>レ</sub>申候只神器陣を出精せよと申事也山鹿流の備立をするなと申事無<sub>レ</sub>之又山鹿流に對し備立は神器陣にさ、はる故致間敷と申沙汰曾て無<sub>レ</sub>之候右の趣二翁に御申入可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候以上

十三日

寅次郎

清太郎様

(別紙)

此度山鹿流備立致<sub>ニ</sub>興行<sub>ニ</sub>候に付<sub>ニ</sub>掛<sub>・</sub>練<sub>・</sub>曳<sub>・</sub>衝<sub>・</sub>鞭<sub>・</sub>鋒<sub>・</sub>矢<sub>・</sub>鷹<sub>・</sub>行<sub>・</sub>彎<sub>・</sub>月<sub>・</sub>小<sub>・</sub>連<sub>・</sub>大<sub>・</sub>連<sub>・</sub>長<sub>・</sub>蛇<sub>等</sub>の陣法相用進退分合臂の指を使ふ如くなるは古來通行の制に御座候就<sub>レ</sub>中<sub>・</sub>單<sub>・</sub>列<sub>・</sub>を<sub>・</sub>重<sub>・</sub>列<sub>・</sub>又<sub>・</sub>三<sub>・</sub>列<sub>・</sub>と<sub>・</sub>致<sub>・</sub>し<sub>・</sub>且<sub>・</sub>人<sub>・</sub>間<sub>・</sub>を<sub>・</sub>接<sub>・</sub>近<sub>・</sub>する<sub>・</sub>は<sub>・</sub>余<sub>・</sub>か<sub>・</sub>意<sub>・</sub>匠<sub>・</sub>に<sub>・</sub>出<sub>・</sub>る<sub>・</sub>か<sub>・</sub>如<sub>・</sub>し<sub>・</sub>と<sub>・</sub>雖<sub>・</sub>も<sub>・</sub>古<sub>・</sub>傳<sub>・</sub>已<sub>・</sub>に<sub>・</sub>論<sub>・</sub>ず<sub>・</sub>る<sub>・</sub>所<sub>・</sub>也<sub>・</sub>平<sub>・</sub>面<sub>・</sub>側<sub>・</sub>面<sub>・</sub>各<sub>・</sub>進<sub>・</sub>退<sub>・</sub>歩<sub>・</sub>法<sub>・</sub>を<sub>・</sub>嚴<sub>・</sub>にする<sub>・</sub>は<sub>・</sub>尙<sub>・</sub>書<sub>・</sub>に<sub>・</sub>所<sub>・</sub>謂<sub>・</sub>、<sub>・</sub>步<sub>・</sub>伐<sub>・</sub>止<sub>・</sub>齊<sub>・</sub>、<sub>・</sub>即<sub>・</sub>此<sub>・</sub>法<sub>・</sub>に<sub>・</sub>し<sub>・</sub>て<sub>・</sub>中<sub>・</sub>古<sub>・</sub>榮<sub>・</sub>應<sub>・</sub>聲<sub>・</sub>を<sub>・</sub>節<sub>・</sub>と<sub>・</sub>して<sub>・</sub>且<sub>・</sub>打<sub>・</sub>且<sub>・</sub>進<sub>・</sub>む<sub>・</sub>亦<sub>・</sub>此<sub>・</sub>類<sub>・</sub>に<sub>・</sub>可<sub>・</sub>有<sub>・</sub>之<sub>・</sub>候<sub>・</sub>畢<sub>・</sub>竟<sub>・</sub>兵<sub>・</sub>道<sub>・</sub>千<sub>・</sub>變<sub>・</sub>萬<sub>・</sub>化<sub>・</sub>各<sub>・</sub>其<sub>・</sub>人<sub>・</sub>に<sub>・</sub>存<sub>・</sub>ず<sub>・</sub>る<sub>・</sub>事<sub>・</sub>に<sub>・</sub>候<sub>・</sub>處<sub>・</sub>其<sub>・</sub>一<sub>・</sub>定<sub>・</sub>の<sub>・</sub>神<sub>・</sub>理<sub>・</sub>と<sub>・</sub>申<sub>・</sub>す<sub>・</sub>は<sub>・</sub>孫<sub>・</sub>子<sub>・</sub>は<sub>・</sub>虛<sub>・</sub>實<sub>・</sub>を<sub>・</sub>説<sub>・</sub>き<sub>・</sub>假<sub>・</sub>卵<sub>・</sub>圓<sub>・</sub>石<sub>・</sub>激<sub>・</sub>水<sub>・</sub>等<sub>・</sub>を<sub>・</sub>以<sub>・</sub>て<sub>・</sub>譬<sub>・</sub>と<sub>・</sub>せ<sub>・</sub>り<sub>・</sub>西<sub>・</sub>洋<sub>・</sub>人<sub>・</sub>か<sub>・</sub>兵<sub>・</sub>家<sub>・</sub>は<sub>・</sub>軍<sub>・</sub>を<sub>・</sub>以<sub>・</sub>て<sub>・</sub>器<sub>・</sub>械<sub>・</sub>と<sub>・</sub>す<sub>・</sub>へ<sub>・</sub>し<sub>・</sub>と<sub>・</sub>い<sub>・</sub>ふ<sub>・</sub>も<sub>・</sub>即<sub>・</sub>此<sub>・</sub>事<sub>・</sub>に<sub>・</sub>て<sub>・</sub>中<sub>・</sub>古<sub>・</sub>の<sub>・</sub>戰<sub>・</sub>法<sub>・</sub>の<sub>・</sub>専<sub>・</sub>ら<sub>・</sub>一<sub>・</sub>番<sub>・</sub>槍<sub>・</sub>を<sub>・</sub>賞<sub>・</sub>ず<sub>・</sub>る<sub>・</sub>は<sub>・</sub>皆<sub>・</sub>其<sub>・</sub>神<sub>・</sub>理<sub>・</sub>に<sub>・</sub>叶<sub>・</sub>へ<sub>・</sub>り<sub>・</sub>然<sub>・</sub>れ<sub>・</sub>ど<sub>・</sub>も<sub>・</sub>是<sub>・</sub>等<sub>・</sub>の<sub>・</sub>事<sub>・</sub>は<sub>・</sub>和<sub>・</sub>漢<sub>・</sub>の<sub>・</sub>戰<sub>・</sub>蹟<sub>・</sub>を<sub>・</sub>熟<sub>・</sub>味<sub>・</sub>し<sub>・</sub>孫<sub>・</sub>武<sub>・</sub>か<sub>・</sub>真<sub>・</sub>趣<sub>・</sub>を<sub>・</sub>默<sub>・</sub>得<sub>・</sub>ず<sub>・</sub>る<sub>・</sub>もの<sub>・</sub>に<sub>・</sub>あ<sub>・</sub>ら<sub>・</sub>さ<sub>・</sub>れ<sub>・</sub>は<sub>・</sub>説<sub>・</sub>諭<sub>・</sub>する<sub>・</sub>も<sub>・</sub>悟<sub>・</sub>ること<sub>・</sub>能<sub>・</sub>は<sub>・</sub>す<sub>・</sub>是<sub>・</sub>を<sub>・</sub>以<sub>・</sub>て<sub>・</sub>此<sub>・</sub>度<sub>・</sub>の<sub>・</sub>練<sub>・</sub>兵<sub>・</sub>を<sub>・</sub>笑<sub>・</sub>ふ<sub>・</sub>もの<sub>・</sub>は<sub>・</sub>笑<sub>・</sub>ふ<sub>・</sub>に<sub>・</sub>任<sub>・</sub>せ<sub>・</sub>呵<sub>・</sub>る<sub>・</sub>もの<sub>・</sub>は<sub>・</sub>呵<sub>・</sub>る<sub>・</sub>に<sub>・</sub>任<sub>・</sub>せ<sub>・</sub>發<sub>・</sub>明<sub>・</sub>の<sub>・</sub>人<sub>・</sub>あ<sub>・</sub>ら<sub>・</sub>ん<sub>・</sub>を<sub>・</sub>待<sub>・</sub>つ<sub>・</sub>の<sub>・</sub>み<sub>・</sub>な<sub>・</sub>り

(松陰が自ら操練を指導したのは、嘉永二年と安政五年であるが、この手紙は、寅次郎の名より見て後期の場合と推定するを穩當と思ふ)

(松陰先生遺著所載 校合濟齋)

四六九

×吉田榮太郎より

安政五年八月十四日

吉田在江戸  
松陰在松本

應對政介<sub>が</sub>松洞<sub>へ</sub>御歸候と申越候其答和らる<sub>る</sub>御座候由君疾<sub>ノ</sub>有難キ<sub>ヲ</sub>ガ耳<sub>ニ</sub>入候歟

七月廿七日之久坂君に當ル御書相届申候此日松洞方へ至ル尤先達る久阪君に當ル御書上封ふし之分持參候実ニ一昨日相届申候此書松洞方へ渡し置候ニ付日付ハ儘ニ覺へ不<sub>レ</sub>申候併シ六月廿八日之御書歟と覺申候ヨキ祭りをシタト有<sub>レ</sub>之申候黃昏歸邸杉藏方へ參り候處杉藏曰飛脚<sub>判</sub>至來先生<sub>が</sub>久坂君へ當り候書有<sub>レ</sub>之候付於<sub>ニ</sub>來<sub>・</sub>嶋<sub>・</sub>開<sub>・</sub>封<sub>・</sub>候<sub>・</sub>其<sub>・</sub>書<sub>・</sub>來<sub>・</sub>嶋<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>在<sub>・</sub>、<sub>・</sub>幸<sub>・</sub>に<sub>・</sub>歸<sub>・</sub>り<sub>・</sub>掛<sub>・</sub>取<sub>・</sub>歸<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>と<sub>・</sub>依<sub>・</sub>之<sub>・</sub>來<sub>・</sub>嶋<sub>・</sub>へ<sub>・</sub>參<sub>・</sub>り<sub>・</sub>拜<sub>・</sub>見<sub>・</sub>候<sub>・</sub>先<sub>・</sub>々<sub>・</sub>本<sub>・</sub>藩<sub>・</sub>之<sub>・</sub>事<sub>・</sub>狀<sub>・</sub>難<sub>・</sub>有<sub>・</sub>二<sub>・</sub>君<sub>・</sub>有<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>涙<sub>・</sub>、<sub>・</sub>來<sub>・</sub>嶋<sub>・</sub>モ<sub>・</sub>大<sub>・</sub>愉<sub>・</sub>快<sub>・</sub>ト<sub>・</sub>御<sub>・</sub>稱<sub>・</sub>候<sub>・</sub>○<sub>・</sub>中<sub>・</sub>村<sub>・</sub>理<sub>・</sub>三<sub>・</sub>郎<sub>・</sub>君<sub>・</sub>片<sub>・</sub>山<sub>・</sub>御<sub>・</sub>差<sub>・</sub>子<sub>・</sub>一<sub>・</sub>件<sub>・</sub>之<sub>・</sub>所<sub>・</sub>讀<sub>・</sub>畢<sub>・</sub>、<sub>・</sub>僕<sub>・</sub>仰<sub>・</sub>謂<sub>・</sub>來<sub>・</sub>嶋<sub>・</sub>君<sub>・</sub>曰<sub>・</sub>、<sub>・</sub>幸<sub>・</sub>明<sub>・</sub>日<sub>・</sub>飛<sub>・</sub>脚<sub>・</sub>俄<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>發<sub>・</sub>候<sub>・</sub>由<sub>・</sub>答<sub>・</sub>書<sub>・</sub>僕<sub>・</sub>が<sub>・</sub>可<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>呈<sub>・</sub>此<sub>・</sub>事<sub>・</sub>如<sub>・</sub>何<sub>・</sub>可<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>申<sub>・</sub>越<sub>・</sub>歟<sub>・</sub>、<sub>・</sub>來<sub>・</sub>嶋<sub>・</sub>曰<sub>・</sub>然<sub>・</sub>不<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>及<sub>・</sub>ナ<sub>・</sub>ガ<sub>・</sub>ラ<sub>・</sub>周<sub>・</sub>旋<sub>・</sub>可<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>致<sub>・</sub>其<sub>・</sub>段<sub>・</sub>先<sub>・</sub>生<sub>・</sub>へ<sub>・</sub>申<sub>・</sub>遣<sub>・</sub>と<sub>・</sub>の<sub>・</sub>御<sub>・</sub>事<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>御<sub>・</sub>座<sub>・</sub>候<sub>・</sub>此<sub>・</sub>段<sub>・</sub>御<sub>・</sub>心<sub>・</sub>得<sub>・</sub>候<sub>・</sub>へ<sub>・</sub>り<sub>・</sub>し<sub>・</sub>但<sub>・</sub>本<sub>・</sub>文<sub>・</sub>飛<sub>・</sub>脚<sub>・</sub>俄<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>發<sub>・</sub>ト<sub>・</sub>有<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>之<sub>・</sub>怪<sub>・</sub>シ<sub>・</sub>ミ<sub>・</sub>玉<sub>・</sub>ふ<sub>・</sub>ナ<sub>・</sub>カ<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>明<sub>・</sub>十五<sub>・</sub>日<sub>・</sub>が<sub>・</sub>月<sub>・</sub>代<sub>・</sub>刺<sub>・</sub>の<sub>・</sub>免<sub>・</sub>ル<sub>・</sub>故<sub>・</sub>發<sub>・</sub>ス<sub>・</sub>ル<sub>・</sub>由<sub>・</sub>僕<sub>・</sub>ハ<sub>・</sub>只<sub>・</sub>今<sub>・</sub>承<sub>・</sub>り<sub>・</sub>し<sub>・</sub>事<sub>・</sub>候<sub>・</sub>右<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>付<sub>・</sub>松<sub>・</sub>洞<sub>・</sub>へ<sub>・</sub>も<sub>・</sub>不<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>申<sub>・</sub>甚<sub>・</sub>殘<sub>・</sub>念<sub>・</sub>松<sub>・</sub>洞<sub>・</sub>も<sub>・</sub>四<sub>・</sub>五<sub>・</sub>日<sub>・</sub>中<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>ハ<sub>・</sub>來<sub>・</sub>り<sub>・</sub>可<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>申<sub>・</sub>無<sub>・</sub>溜<sub>・</sub>息<sub>・</sub>を<sub>・</sub>ツ<sub>・</sub>キ<sub>・</sub>可<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>申<sub>・</sub>併<sub>・</sub>シ<sub>・</sub>手<sub>・</sub>段<sub>・</sub>も<sub>・</sub>ナ<sub>・</sub>キ<sub>・</sub>事<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>御<sub>・</sub>座<sub>・</sub>候<sub>・</sub>一<sub>・</sub>六<sub>・</sub>月<sub>・</sub>廿<sub>・</sub>三<sub>・</sub>日<sub>・</sub>水<sub>・</sub>府<sub>・</sub>老<sub>・</sub>公<sub>・</sub>・<sub>・</sub>越<sub>・</sub>前<sub>・</sub>公<sub>・</sub>・<sub>・</sub>尾<sub>・</sub>張<sub>・</sub>公<sub>・</sub>登<sub>・</sub>城<sub>・</sub>欲<sub>・</sub>見<sub>・</sub>將<sub>・</sub>軍<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>然<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>將<sub>・</sub>軍<sub>・</sub>病<sub>・</sub>氣<sub>・</sub>と<sub>・</sub>て<sub>・</sub>避<sub>・</sub>る<sub>・</sub>不<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>逢<sub>・</sub>故<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>次<sub>・</sub>之<sub>・</sub>間<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>て<sub>・</sub>高<sub>・</sub>聲<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>る<sub>・</sub>三<sub>・</sub>公<sub>・</sub>違<sub>・</sub>勤<sub>・</sub>事<sub>・</sub>旁<sub>・</sub>御<sub>・</sub>談<sub>・</sub>有<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>之<sub>・</sub>候<sub>・</sub>由<sub>・</sub>將<sub>・</sub>軍<sub>・</sub>愕<sub>・</sub>驚<sub>・</sub>大<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>憤<sub>・</sub>り<sub>・</sub>候<sub>・</sub>由<sub>・</sub>松<sub>・</sub>洞<sub>・</sub>或<sub>・</sub>云<sub>・</sub>三<sub>・</sub>公<sub>・</sub>井<sub>・</sub>伊<sub>・</sub>を<sub>・</sub>詰<sub>・</sub>り<sub>・</sub>候<sub>・</sub>由<sub>・</sub>一<sub>・</sub>先<sub>・</sub>達<sub>・</sub>る<sub>・</sub>水<sub>・</sub>府<sub>・</sub>老<sub>・</sub>公<sub>・</sub>之<sub>・</sub>御<sub>・</sub>事<sub>・</sub>松<sub>・</sub>平<sub>・</sub>高<sub>・</sub>松<sub>・</sub>讚<sub>・</sub>岐<sub>・</sub>守<sub>・</sub>・<sub>・</sub>竹<sub>・</sub>越<sub>・</sub>兵<sub>・</sub>部<sub>・</sub>少<sub>・</sub>輔<sub>・</sub>・<sub>・</sub>水<sub>・</sub>野<sub>・</sub>土<sub>・</sub>佐<sub>・</sub>守<sub>・</sub>其<sub>・</sub>外<sub>・</sub>井<sub>・</sub>伊<sub>・</sub>之<sub>・</sub>手<sub>・</sub>足<sub>・</sub>等<sub>・</sub>守<sub>・</sub>護<sub>・</sub>致<sub>・</sub>候<sub>・</sub>様<sub>・</sub>水<sub>・</sub>府<sub>・</sub>家<sub>・</sub>老<sub>・</sub>武<sub>・</sub>田<sub>・</sub>何<sub>・</sub>を<sub>・</sub>呼<sub>・</sub>出<sub>・</sub>シ<sub>・</sub>被<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>仰<sub>・</sub>付<sub>・</sub>候<sub>・</sub>處<sub>・</sub>一<sub>・</sub>水<sub>・</sub>府<sub>・</sub>邸<sub>・</sub>出<sub>・</sub>入<sub>・</sub>ス<sub>・</sub>ル<sub>・</sub>者<sub>・</sub>懷<sub>・</sub>中<sub>・</sub>ヲ<sub>・</sub>改<sub>・</sub>め<sub>・</sub>候<sub>・</sub>様<sub>・</sub>目<sub>・</sub>附<sub>・</sub>へ<sub>・</sub>被<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>仰<sub>・</sub>付<sub>・</sub>候<sub>・</sub>よし<sub>・</sub>然<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>左<sub>・</sub>様<sub>・</sub>ノ<sub>・</sub>事<sub>・</sub>ハ<sub>・</sub>相<sub>・</sub>成<sub>・</sub>間<sub>・</sub>敷<sub>・</sub>と<sub>・</sub>日<sub>・</sub>附<sub>・</sub>申<sub>・</sub>候<sub>・</sub>由<sub>・</sub>右<sub>・</sub>ニ<sub>・</sub>付<sub>・</sub>其<sub>・</sub>儀<sub>・</sub>亦<sub>・</sub>止<sub>・</sub>候<sub>・</sub>よし<sub>・</sub>右<sub>・</sub>ハ<sub>・</sub>松<sub>・</sub>洞<sub>・</sub>昨<sub>・</sub>日<sub>・</sub>來<sub>・</sub>り<sub>・</sub>談<sub>・</sub>し<sub>・</sub>申<sub>・</sub>候<sub>・</sub>付<sub>・</sub>決<sub>・</sub>る<sub>・</sub>先<sub>・</sub>便<sub>・</sub>松<sub>・</sub>洞<sub>・</sub>申<sub>・</sub>上<sub>・</sub>候<sub>・</sub>も<sub>・</sub>知<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>不<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>申<sub>・</sub>候<sub>・</sub>へ<sub>・</sub>共<sub>・</sub>爲<sub>・</sub>レ<sub>・</sub>念<sub>・</sub>申<sub>・</sub>上<sub>・</sub>候<sub>・</sub>一<sub>・</sub>二<sub>・</sub>三<sub>・</sub>日<sub>・</sub>跡<sub>・</sub>が<sub>・</sub>玉<sub>・</sub>川<sub>・</sub>上<sub>・</sub>水<sub>・</sub>へ<sub>・</sub>毒<sub>・</sub>ヲ<sub>・</sub>流<sub>・</sub>し<sub>・</sub>と<sub>・</sub>云<sub>・</sub>フ<sub>・</sub>テ<sub>・</sub>專<sub>・</sub>ラ<sub>・</sub>評<sub>・</sub>判<sub>・</sub>仕<sub>・</sub>候<sub>・</sub>



四七二 伊藤靜齋に與ふ

安政五年八月十五日

松陰在萩松本  
伊藤在馬關

小國歸<sub>レ</sub>萩老臺之近狀承<sub>レ</sub>之降念仕候天下之形勢日ニ増切迫御苦心奉<sub>レ</sub>察候拙生傳授已上之門弟相對之事被<sub>レ</sub>差許<sub>レ</sub>候此事ニ付御書被<sub>レ</sub>下候由小國<sub>ノ</sub>承<sub>レ</sub>之然<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>達<sub>レ</sub>上書も内密仕<sub>レ</sub>との事<sub>ニ</sub>難<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>存候此事御報知申上候至極取急他事不<sub>ニ</sub>申上<sub>レ</sub>候

御製

澄し得ぬ我身そ水よしすむ共濁しはせしな萬國民

御感泣可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候

八月十五日

松陰生

靜齋學兄 座下

此富樫文周藝國醫生弊塾ニ久敷潜在沈黙家ナレ<sub>レ</sub>至極篤志之人<sub>ニ</sub>此度長崎まで遊<sub>フ</sub>積ナリ(戊午兩室文箱達<sub>ニ</sub>富樫文周叙參照)

安政五年七月二十日家學教授許可、第九卷、關係公文書類參照

(長府町梶山由郎氏藏 校合濟園)

四七三 山田七兵衛に與ふ

安政五年八月十五日

松陰在萩松本  
山田在長崎

弊塾潜在の富樫文周此度鎮西に遊び長崎へも出候由宜敷御頼仕候先御地の奇事一見の積に御座候借福原事に付肥後御聞繕の事も左近允殿物故丸に無用に相成倍々可<sub>レ</sub>嘆の至りに御座候右の事先達て肥後の永島三平に申遣置候若彼地御

出被<sub>ニ</sub>成下<sub>レ</sub>候は、御言戻被<sub>ニ</sub>成下<sub>レ</sub>候様奉<sub>レ</sub>頼候

小國剛藏歸着色々鎮西の話承り申候貴地蒸汽機の話など大に膽を潰し候由申候君公日々御前會議被<sub>ニ</sub>仰付<sub>レ</sub>候由誠に御盛の御事奉<sub>ニ</sub>感心<sub>レ</sub>候御製

澄し得ぬ我身は水にしつむとも濁しはせしな萬國民

右肥後其外有志の人々に御示し可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候

八月十五日

松下塾

長崎御屋敷

山田七兵衛様

(松陰先生遺著所載 校合濟園)

四七四 小國剛藏に與ふ

安政五年八月十八日

松陰在萩松本  
小國在萩

今朝京城<sub>ノ</sub>飛脚兩人歸ル松助・仙吉トテ皆有志之ものニ御座候久坂ノ書中ニ別紙水戸へ之内勅有<sub>レ</sub>之候寫入<sub>ニ</sub>貴覽<sub>ニ</sub>候是ハ無<sub>レ</sub>程本藩等へも三家家門之御方ニ御示談有<sub>レ</sub>之事と察候へ共其期ニ到り模稜ハ出來不<sub>レ</sub>申候外ニ今一條何カ趣有<sub>レ</sub>之由是ハ未タ承知不<sub>レ</sub>仕候不<sub>ニ</sub>取敢<sub>レ</sub>畧答申上候別紙ハ御一見御返シ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候明日御歸在と<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>嚙々御繁務と奉<sub>レ</sub>察候以上

安政五年

八月十八日

小國剛藏様

(萩市中谷福松氏藏 校合濟)

七八

松下塾

四七五

×飯田正伯より

安政五年八月十九日

飯田在萩  
松陰在萩松本

奉三十一回先生書

僕白、嚮以七月十八日退塾、歸家問父母之安否、而後又入塾、未旬日、父良淳在、僕忽心驚、舉身流汗讀書鬱然不樂、即日棄業歸家、家人盡驚、僕忽至、時父良淳疾始一日、僕問醫曰、幾瘥瘥矣、僕不覺揮淚曰、何爲可治此病、醫曰有可治之道、汝非可憂也、然僕按於醫書、以手足痿痺爲不仁、醫仁者以天地萬物爲一體、莫非己也、認得爲己何所不至、若不屬己、自與己不相干、如手足之不仁、僕嘗聞之言、譬之至于此、以阿堵之言切責醫曰、於醫書以手足痿痺爲不仁、汝有何良術乎、醫曰、雖偏鶴、和偏豈有良術哉、而況於余乎、僕益憂矣、父疾日重而少無瘳、然意氣慷慨、朝夕三復、先生之士規七則矣、或時父呼僕曰、余歲五十六而無功積于官、往々恥之、而今逢如此之疾、死不可逃也、僕聲戰曰、死生有命、富貴在天、正心立子朝、假令雖無功積于官、何爲恥、父曰聞汝言、心始安、然僕心不平、終以廿七日死、於是茫然如夢中、始死皇々焉、如有所求而不得、既殞望々焉、如有所從不及、既葬慨然如不及、其反而息、每哭踊絕方蘇矣、僕雖居喪中、實國家之憂存于子心、瞬息不可忘也、退塾以來父母之嗟聲在耳、墨夷之言不入於耳、而突然中谷茂十郎來告于僕、是以始得知墨夷之情、於是憂挾兩腋、如何而得慨然不覺嘆哉、僕忌明又入塾、再蒙先生之厚恩焉、心緒萬端、憂苦不終所欲言、正白不宜再拜、八月十九日伏願

神斧

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

四七六

松浦松洞・吉田榮太郎に與ふ

安政五年八月十九日

松陰在萩松本  
松浦吉田在江戶

本月十五日直八歸ル今十一日朝松介・仙吉婦ル

口羽氣分宜シ近日寺社奉行トナル由先是良藏爲御祐筆(小五郎)大檢使赤川直二郎ハ官中ノ舍長トナル皆之繩ヲ縛リ(明倫館)

たる

幕府及尾張

然其期ニ至リ親望持重有之者濟ヌト考へ此事追々論スル積ニ

十八日ナリ

今日ハ流儀ノ操習ニテ大井濱ハ皆々出張銃陣短兵隊等有之此起リハ堅田家來河内記令大ニ奮発二十六人位壯士ヲ

知行所より召出シ鍊兵ヲ頼ミ當月朔日於松下塾日練致候より之事亦一盛事飯田正伯も旗役トナル亦一奇ニ非ス

ヤ長崎へ山田七兵衛其外十人程行軍艦製造ヲ目的トシテ之役配夫ニ有之是ハ最早委細御存と相考委敷不申上候

小國剛藏此内帰着九州談肥後大俗論中一種之可頼ものアリ是ハ秘説宮部中谷へ之書直八ハ贈ル答ニ不知書中所

レ言、肥前隨分奮勵銃陣盛、是ハ甲冑両刀ニ西洋陣ヲ用ユ筑前ハ不甚振然其銃陣が専ら西洋通リニ行ハレ輕卒已下

ナリ筑後ニハ銃陣不用長崎蒸氣機甚盛之事ニテ致誇張候要之今日之形勢議論ニ至テハスヘテ甚迂ナリ宮部上京促

安政五年

七九



生田良佐書來候沈寔如<sup>(稱カ)</sup>見<sup>(左近之五)</sup>其人ニ妙々、猶崎未<sup>(稱カ)</sup>來候安富ハ出萩未<sup>(稱カ)</sup>得<sup>(稱カ)</sup>二一面<sup>(稱カ)</sup>候

陳々可<sup>(稱カ)</sup>嘆惜<sup>(稱カ)</sup>之至福原氏ノ物故外ニハ薩侯ヲ失ヒ内ニハ此大夫ヲ失、勤王之<sup>(稱カ)</sup>大缺失ニ可<sup>(稱カ)</sup>相成<sup>(稱カ)</sup>一氣<sup>(稱カ)</sup>の毒千萬後嗣之處佐世氏能<sup>(稱カ)</sup>其任當<sup>(稱カ)</sup>リ候ハ、妙ナリ果何如

右ハ餘<sup>(以下松陰自筆)</sup>り多事ニ付京へ遣候書ヲ彌<sup>(以下松陰自筆)</sup>二ニ写サセ候也いつき跡の飛脚ニ委細可<sup>(稱カ)</sup>申遣<sup>(稱カ)</sup>候也

八月十九日

無<sup>(無窮・無邊)</sup>生足<sup>(無窮・無邊)</sup>下

寅白

(本文は大体品川彌二郎の代筆、行間の細字及末尾の\*以下は松陰の筆である)

(大阪市本莊熊次郎氏藏 寫眞校合濟園)

四七七

益田彈正に贈る

安政五年八月廿一日

松陰在萩松本 益田在萩

私儀從來之狂狷近來別<sup>(稱カ)</sup>る人心不<sup>(稱カ)</sup>服好名之謗尤以甚敷元來私不忠不孝之身ニ<sup>(稱カ)</sup>何歟國事妄論仕候事ニ付好名之謗ハ誠ニ的當ニ御座候併謗議洵々ニ<sup>(稱カ)</sup>る者私口より出候所ハ何程尤有<sup>(稱カ)</sup>レ之候<sup>(稱カ)</sup>も不<sup>(稱カ)</sup>被<sup>(稱カ)</sup>行事と覺悟仕、恭默拊口専ら相心懸居候然處此度 勅諭 幕府・尾張・水戸等ニ降<sup>(稱カ)</sup>り候由實事ニ候得<sup>(稱カ)</sup>と誠ニ天下之一大事と相考別封一通差出申候封中之趣是ト被<sup>(稱カ)</sup>思召<sup>(稱カ)</sup>候ハ、早々御手ヲ被<sup>(稱カ)</sup>下度非<sup>(稱カ)</sup>ニ候ハ、早々御燒失奉<sup>(稱カ)</sup>願候於<sup>(稱カ)</sup>私も封中之趣御探擇ニ相成候得<sup>(稱カ)</sup>と畢生之本望不<sup>(稱カ)</sup>過<sup>(稱カ)</sup>レ之又候可<sup>(稱カ)</sup>申上<sup>(稱カ)</sup>事も無<sup>(稱カ)</sup>レ之又御尤<sup>(稱カ)</sup>不<sup>(稱カ)</sup>被<sup>(稱カ)</sup>思召<sup>(稱カ)</sup>候ハ、私存付之所大ニ見誤リニ付即日引籠<sup>(稱カ)</sup>り専ら讀<sup>(稱カ)</sup>古人之書<sup>(稱カ)</sup>ニ絶<sup>(稱カ)</sup>今世之務<sup>(稱カ)</sup>候覺悟ニ御座候然處別封ハ相成事ニ御座候ハ、御屬員等へハ御示被<sup>(稱カ)</sup>下間布奉<sup>(稱カ)</sup>頼候一身ノ禍敗ヲ避

け候ニてハ全ク無<sup>(稱カ)</sup>御座<sup>(稱カ)</sup>候得<sup>(稱カ)</sup>共人物之臧否杯ハ別<sup>(稱カ)</sup>る怨隙之原ニ相成朋黨之漸ヲ釀成候儀ニ御座候間御慎可<sup>(稱カ)</sup>被<sup>(稱カ)</sup>成候尤別封ハ是非備<sup>(稱カ)</sup>ニ 公覽<sup>(稱カ)</sup>度犬馬之微衷ニ御座候間其上ニ<sup>(稱カ)</sup>る之義ニ候ハ、致<sup>(稱カ)</sup>暴露<sup>(稱カ)</sup>ニ何程之重責ヲ蒙<sup>(稱カ)</sup>リ候共不<sup>(稱カ)</sup>苦奉<sup>(稱カ)</sup>存候餘<sup>(稱カ)</sup>り粗糞之儀申出奉<sup>(稱カ)</sup>忍入<sup>(稱カ)</sup>候へ共何分天下之一大事乃 御當家ニ於<sup>(稱カ)</sup>テモ御同様之御事難<sup>(稱カ)</sup>默止<sup>(稱カ)</sup>ニ狂狷之性人心不<sup>(稱カ)</sup>服之時唯君相一言之御褒貶此度ニ決<sup>(稱カ)</sup>し候儀と覺悟仕候間萬々鄙懷御降察奉<sup>(稱カ)</sup>希上<sup>(稱カ)</sup>候

八月廿一日

幽囚罪人

藤原矩方再拜白

益行相臺下 執事

(第四卷意見書類、安政五年八月廿日夜翌日言上仕候事ニ參照)

(東京市潮惠之輔氏藏 校合濟園)

四七八

益田彈正に贈る

安政五年八月廿一日

松陰在萩松本 益田在萩

組の者六人計先日京師被<sup>(稱カ)</sup>差登<sup>(稱カ)</sup>候所名古屋・彦根其外近畿之所々ハ飛耳長目之御手段相成候事々と奉<sup>(稱カ)</sup>察欣<sup>(稱カ)</sup>拊仕居候処此内帰着<sup>(稱カ)</sup>之もの之話承<sup>(稱カ)</sup>り候へと近畿之事ハ暫置邸外にも容易ニハ不<sup>(稱カ)</sup>被<sup>(稱カ)</sup>出誠ニ幽囚同様之次第トテ致<sup>(稱カ)</sup>嘆息<sup>(稱カ)</sup>居候京邸之議論是ニ<sup>(稱カ)</sup>る大概御察可<sup>(稱カ)</sup>被<sup>(稱カ)</sup>下奉<sup>(稱カ)</sup>存候也

廿一日

寅白

(東京市益田兼施氏藏 校合濟園)

四七九 長原武に與ふ

安政五年八月廿六日 松陰在蘇松本  
長原在江戸

尾寺新之九

此人僕知己ニ著実有志之ものニ御座候山鹿流ヲモ心懸候ニ往々登門可仕候付都下之狀態尙御藏書等も御示奉レ頼候  
此便甚急委曲不ニ申上ニ候近狀此人ノ御聞可被下候頓首

八月廿六日

寅二白

永原武様 侍員

(東京市長原坦氏藏 校合濟齋)

四八〇

×伊藤靜齋より

安政五年八月廿六日

伊藤在馬關  
松陰在蘇松本

過ル十五日御認之尊東十八日夕富樫生持參 先生御近況親布承レ之奉ニ敬賀ニ候 僕依然送光御降意可被下候同生も廿五日夜歸關翌廿  
六日朝出シ歸省相成申候

一別紙者最早御承知後々奉レ存候得とも先被ニ差贈ニ候様富樫生も申事ニ付乍ニ延引ニ差出申候是等之風光ハ不ニ申上ニ共疾より之御了  
知ニ候得とも猶又御覽可被レ成候京師之形勢此邊寂として不レ承レ之候  
九條家もそろ／＼金臭之雜説も有レ之候道路之説如何

一追々差出候書狀相届候ハ一筆之御答奉レ願彌遲滞ニ候ハ、まらなと取懸り可レ申途中ニ碍滞仕候様ニ者呈書ニ苦しみ申候  
一當時船木才判御代官竹内正兵衛ニ申御方ハ如何之爲レ人ニ候哉隨分有志之士歟村田翁々近親ニ承り候得者定る凡庸ニ者有ニ御座ニ間  
布右に御知音筋有レ之候歟是も拜承仕度候答奉レ願

一一般惡疫流行言語同断之事ニ候貴境も御同様と承レ之不レ堪ニ恐怖罷在候豫防之良法ハ海川共魚肉不レ宜候魚之病と申事ニ候関地  
ふとハ池堀ふとのうら、浮鮒之類往々死浮ひ申候海上も是ニ准シ候事と奉レ存候兎角淡薄之物計食用時々健胃下劑服用是ニ限ると醫論  
一決仕候大ふともたけ鳥も間々有レ之可レ申説ニ候是も天下之一變ニ御坐候九州者最甚敷病様先年之コロリ共違ひ可レ申歟萬事命と  
ハ乍レ申豫防せざるも愚之至歟况形勢將多事一夫一婢も可レ惜事ニ奉レ存候御社中無ニ御疎ニ事ニ者御坐候得とも懸念之餘猶又申上候  
先者申上度實ニ御自重爲ニ國家ニ是祈 誠恐頓首拜

八月廿七日

尙々幾重も々々是祈尊報日夜奉ニ渴望ニ候 以上

(外封) 松陰先生執事 平安

靜齋拜

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟齋)

四八一 某に與ふ

安政五年八月頃 松陰在蘇松本

彈正殿家來萩野隼太と申もの中谷正亮同道上京仕居候此者有志之人ニる学力も有レ之候然處自力にて京坂上下周旋中  
ニ費ヲ支ヘ兼候由右ニ付彈正殿へ嘆吳候様ニ中谷も頼來候此人彈正殿も深ク其志ヲ愛セラレ候趣ニ相聞申候間何卒  
此意ヲ密ニ彈正殿へ通シ候奇策有レ之間布哉若クハ大坂京ニる官金御貸渡相成追る返濟被ニ仰付ニ候様之道共ハ無ニ御  
座ニ候哉誠ニ御面倒之儀奉レ存候へ共私儀敢テ一毫ノ利言ニ無ニ御座ニ候且必シモ是ヲ要むるハ無レ之候へ共是亦志士  
之志ヲ助け候一助と奉レ存候故御尋申上候ニ (前後闕文)

(東京市益田兼施氏藏 校合濟齋)

四八二 久坂玄瑞に與ふ

安政五年八月頃

松陰在藤松本  
久坂在京師

肥後の藤田は先日萩へも立寄歸國の由小田村より承り候

別紙前田の復書御覽可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候貴兄身上の事此地にて赤川直二なども相謀色々周旋致し候へとも何共致方無<sub>レ</sub>之實は江戸も柱就官に候へ共ちと缺乏に相成候に付急に東下御周旋可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候洋書の事命なれば原書を讀さるゝを得ず併爰に象山に聞たる事あり原書を讀むにも一通り譯書を見て彌、原書を讀まねはならぬと申處へ心附候上にて讀むへしといへり此説妙なり急にあらゆる譯書悉く御周流候て彌、爰か目の附所と目的相定り候上にて原書に御か、り可<sub>レ</sub>然候原書家は專精には候へ共大抵固陋なり譯書に博渉し原書家を壓倒して然後著實に原書にか、り可<sub>レ</sub>然候と申す内國家の事も如何にか變動可<sub>レ</sub>仕候へは江戸に居ても京に居ても原書を讀ても譯書を讀てもいつれ暫時の事なり事起れば事有る所へ行き事を成すより外はなし

僕策問散らばる由頗る氣の毒に存候兼て御存通り遇<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>設<sub>レ</sub>城府<sub>レ</sub>之性質故如<sub>レ</sub>此成行候も自然の勢にて口羽なども近來以て此事甚存寄申吳致<sub>レ</sub>服膺<sub>レ</sub>候乍<sub>レ</sub>去御地にて對策散り候は最初老兄に見せ候積りにて穴戸まで遣し秋良・白井にも連名に致候書よりの事なるへし今更如何せん爾後頼にも梅田にも一書をも遣不<sub>レ</sub>申只梁川は深知己の事に付追々遣候事も有<sub>レ</sub>之候此段は必御案被<sub>レ</sub>下間布候去ながら爰に一大眼御發明可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候元來天下の事區々の人巧にて成敗するものにては無<sub>レ</sub>之殊に隱秘の事は却て人の疑慮を蒙り不<sub>レ</sub>宜只々公明正大十字街を白日に行き候如くにて天命に叶は、

成るへし不<sub>レ</sub>叶は敗るへし魏徵・陸贄の諫争録奏議天下後世人皆傳聞するは孔光溫榭(榭)と同日の論には無<sub>レ</sub>之候鄙見如<sub>レ</sub>此好名の病素より有<sub>レ</sub>之口羽も甚咎<sub>レ</sub>之候へとも是亦人々の所見不<sub>レ</sub>必嫌<sub>レ</sub>其謗<sub>レ</sub>也餘は後便可<sub>レ</sub>申上<sub>レ</sub>候

寅白

玄瑞足下

此書賓卿・萩野にも御轉示可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候賓卿老兄より去月念五七頃の書は今日到手候賓卿より申來り候岡田式部丞の事其後如何承度候經板紙に有<sub>レ</sub>之書は御符中にして傳之助(伊藤)か利輔(伊藤)か京邸居付の者に儘に御渡置榮太郎上京の節相渡吳候様御頼仕候也

(松陰先生遺著所載 校合濟齋)

四八三 益田彈正に贈る

安政五年八月頃

松陰在藤松本  
益田在京師

(本文は門弟某筆細字松陰筆)

象山先生書翰写

信濃松代藩臣  
佐久間修理名啓字子明

四月十二日曉門生婦り其五日付御誨答拜接忙手披讀仕候處美疾も早速ニ御快復時下愈御清健まで時事も段々御苦勞御座候狀詳悉浣慰之至奉<sub>レ</sub>存候儲又再度呈書之趣も春日讃岐守ハ久我殿ノ諸大夫陽明學家ニテ正論有志ノ人ナリ(原本上欄)て御惠示猶其盡さ、類所ハ門生の御口授被<sub>レ</sub>下毎度ならら御親切之至奉<sub>レ</sub>感銘ニ奉<sub>レ</sub>方謝ニ候然る處佐倉候等の御様子最初某の企望罷在候様の場ニ至らば甚失望之次第其上 朝廷ハ三月廿六日御決着之 勅命も御座候趣ニ候へハ於<sub>レ</sub>東府ニ違 勅之罪を被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>避候ハんとすまハ旧獵<sub>レ</sub>二日亞使の御許諾有<sub>レ</sub>之候所違約ニ相成我<sub>レ</sub>其曲を負ふも兵端速ニ

開参可レ申又其約を踐せらまむハ忽ち違 勅の罪ヲ罹せらま候へく実ニ進退維谷り奈何ともすゑららざる御大難  
 と奉レ存候所忽ち一計を存し出し候併事機ニ後ま候るを詮なき事ニ存候夫迄ハ先生ハ兩度私使を参らせ候等の事親戚  
 懇意のものへも總て秘中の秘ニ致し置候處事爰まで身を顧ミ候は違はられたとひ再ひ罪譴を重ね候迄も愚忠を尽  
 し候ハんと致シ決心ニ其未時親戚ニ目附役勤め候もの、方ハ國家へ致シ關係ニ差急き面會致度事件有レ之候ニ付早速出  
 向き吳候様申遣候所當日のやよく公事まで早出致し不在ニ付又別ニ手段いとし家老まで候もの屏居候出向き面談候様  
 相謀り候所是も常套ニのミ致シ拘泥ニ候弊俗ニ者早速（テカ）埒ありは彼是故障まで漸十三日夕刻ニ及び閏月主水と申家老  
 是ハ暖簾門下ニ 目付同道ニ屏居の出張ニ付夫迄の運び委細相露し其上ニ愚策之次第申聞候所是も忽ち致シ同意  
 其學陽明流也 同列も有レ之候所文書廻達等ニ者時限後ま候として自身ニ其同列の宅を相回し及ニ評義ニ候處いつまも異議の無レ之  
 存候（原本上欄） 協同候て其用をして目付壹人急出府相命し候ニ至り夫迄の都合十分ニ行届候ニ付此上其言の行ハ候を望願罷在候所  
 遂江戶ニ（原本上欄）故障有レ之存候様行ハ候ニ至らば乍去内々寡君口上をも御添候て某に調へ候草案川路司農迄相示し又  
 嘆息之至（原本上欄） 一ト手まで岩瀬霜臺にも見せ候と申事ニ候處追々御承知も可有御座ニ候通の御時勢故ニ段々の愚策も遂ニ泥羹と相  
 成候事不堪ニ痛恨ニ候此度旧來立入候領内のもの賣用ニ其御地の出向き候を聞せ候ニ付是ニ相託し段々御骨も折ら  
 せ御周旋被レ下候義用舎之段ハ兎も角も箇様迄ニ致候と申丈ケ中々ニ苦心之所内々報聞仕度別番懸ニ御目ニ候是ハ其儘  
 ニテ差上度奉レ存候（原本上欄） 御留置被レ下差支イ無ニ御座ニ候尤むさと御他見ハ被レ成被レ下間しく某などの料見ニハ外夷百千の軍艦ハ智謀勇略と  
 有レ之候へば左迄恐るゝは足らば候へとも。一。条。之。勅。命。ハ。御。違。背。御。座。候。て。ハ。於。倫。理。難。レ。被。レ。相。濟。一。御。事。と。奉。レ。存。候。所。當。節  
 正議凛然（原本上欄）

ハ是ニ反し候様被レ存候金川ニおるて岩瀬・井上二氏亞國條約ヲ調印有レ之候等 聖天子の逆鱗乍レ恐左こそと推測の  
 奉らま候其後其御地の御様子此地ニあるハ一向ニ不ニ相分ニ候又々例之通眼目之義御報知を蒙り度奉ニ万祈ニ候其御地失火  
 何程延レ焼り候て本願寺なども禍ヲ罹り候よし御住居辺如何ニ候ひしや千万無ニ心許ニ奉レ存候當夏ハ此地なと殊の外雨  
 多候て幾年にも無レ之洪水も有レ之候ひき夫故気候も不揃ニ冷気勝ニ有レ之漸此月ニ入候て天気も定り季候も引直り  
 候様覺え候其御地如何哉御眠食倍御清雅ニ御座候歟政君にも愈御得無ニ御座ニ候や相伺候賤家依レ旧無事幸ニ御省念可  
 被レ下候急便ニ付不能ニ多書ニ候不宣

七月十九日

大星再拜

星巖梁先生臺下

大星修理  
別名也

淫雨詩一首錄呈伏乞ニ 繁正

淫雨連數月、將晴復如レ旧、陸地幾生レ魚、龍蛇欲レ棲レ固、誰鍊ニ五色石、仰補ニ上天漏、月日不可見、清  
 然淚霑レ袖、  
 （東京市益田兼施氏藏 校合濟堂）

四八四 益田彈正に贈る

安政五年九月六日 松陰在萩 松本 益田在萩

別紙漢文書牘壹通地方組杉藏と申もの、書ニ御座候此もの、事ハ定る御聞及も可レ被レ為レ在候所學力等ハ為レ指事も  
 無ニ御座ニ候得共誠ニ才智有レ之忠義之志厚ク感心之ものニ奉レ存候此内飛脚ニ江戶へ歸り候折柄大猪川ニ十日計河

留ニ逢候其節相認候分ニ御座候是等も亦 國家正氣之一端ニ御座候間御官暇之節御一見被ニ成下ニ候様奉ニ嘆願ニ候也

九月六日

囚奴寅二白

益相公執事

(別紙)

臣致誠惶誠恐頓首謹言、頃伏考ニ時勢、幕府既如是矣、竦座誠所ニ思而寒心ニ者、卒 廷議之所ニ決也、臣聞而喜起、 淑慮之明断、公郷之英決、誠可ニ仰賴、可ニ伏重、果 皇國神尙真在也、然事實至是、乃 淑断之所ニ出、獨有ニ違勅討伐之命ニ耳、吁至ニ是命ニ則 宸懸之威、其果如何哉、臣在ニ逆旅、憂苦不ニ寢矣、竊觀ニ列藩ニ固非ニ皆不ニ可ニ賴、正論憤發亦有、當ニ是之時ニ決非ニ挾ニ傍觀之意ニ而已、但 朝廷與ニ諸侯ニ隔絶ニ二百余年、於是 朝廷果委ニ大命於誰ニ耶、亦有ニ義仲・董卓之畏ニ焉、諸侯果執挺出自任ニ於此命ニ耶、亦有ニ魁ニ於騷擾之懼ニ焉、可ニ歎息ニ矣、所ニ以義不ニ忽立ニ者、獨住ニ于情不ニ相通ニ也、我藩之於ニ 朝廷、家系祖先固不ニ待ニ言也、當今之正議尤能激ニ于 朝廷、而 君公亦能察ニ于 天情ニ矣、諸藩最不能ニ若、而蓋 朝廷特倚賴焉、今夫天下之義勢、唯屈ニ于沮情ニ矣、敵而通之引而伸之、使ニ激而發ニ整而舉ニ之、所謂義倡也、以是可ニ誅ニ賊而攘ニ夷、天下諸侯誰肯レ之者、其策曰、誠以成矣、挾レ私焉決不レ成也、臣私察ニ列藩ニ可レ任甚希、且此任豈肯委ニ之于他藩ニ耶、我 公在焉、公其重ニ任于此哉、然則責ニ于 公ニ者、益執政與ニ清御史ニ之職也、責ニ執政ニ者内藤・前田・周布君職也、責ニ三君ニ者兩國士民之分也、臣雖ニ鄙微ニ在ニ士民之數ニ、故以ニ昧死ニ敢白、

(東京市益田兼施氏藏 校合濟堂)

四八五 品川某に與ふ

安政五年九月八日

松陰在蘇松本 品川在馬門須佐

品川武馬子風氣にて只様萩表被レ滯甚難ニ御堪ニ候今日玄佐被レ過御傳言致ニ承知ニ候先日横山其外へ御託シ之書も拜見仕候萩野も書來り候御地ハ昇平之習気未タ脱不レ申由御心配奉レ察候併邦衛其外書生にて在萩之處主公温々賜レ座夜半過まで懐ヲ開テ談セラレ候あと御家ニふと曠典隨分御愉快ニ被ニ思召ニ度候

「中村道太郎帰着一度面會京師之御様子皆々至尊ニ出候趣聖蓮王轉法輪久我等之様子誠ニ感涙スベシ」桑名之家老服部石見之話ハ玄佐へ託候○傑昨日一書ヲ貴主公へ呈候來原・久保昨日貴主へ調候別番ハ小国・萩野・益邦諸君へ御見せ可レ被レ下候 瀧彌太郎・馬嶋春海之両生罷出候可レ然御指ニ是亦小国其外へ御頼可レ被レ下候

八日

松陰生

品川君足下

取紛レ大乱書御免(原文首首白)

(縣立山口圖書館藏 校合濟堂)

四八六 松浦松洞に與ふ

安政五年九月九日

松陰在蘇松本 松浦在江戸

近來ハ御喪心と覺候事之有レ之候故他事不ニ申進ニ其由ノミ申候扱尾・水・越・橋御答ノハ全ク奸物ノ深識妙算ニ出候事ニる四公果シテ賢ナラハ決シテ默然引受ヘキ事ニ無レ之候足下云水・越・越・橋御答ノハ全ク奸物ノ深識妙算ニ出候事ニ今ノ時ニ當リ此四公ノ外天下孰レカアル四公穩便々々ト被レ仰候ハ、天下ノ名侯恐クハ一人も義氣ヲ張ルものハナシ左候時ハ 天朝ハ如何成行可レ申哉天子様ハ泉涌ノ幸ヲナサセ奉りてもヤハリ憤懣ハセヌカ隱岐ノ嶋弓矢かくみて

安政五年

八九

出處し、御心思へハ涙し流る。おもほさぬ隠岐の出處し聞時ハ賤の男吾も髮逆立テ是本居宜長ノ歌涙し流れぬが感心カ髮逆立タヌカ感心カ四公もし忠臣ナラハ必ツ臣子ニ告玉フベシ

吾等事外虜之事ハ実ニ神州無前之大患ニ付 天朝幕府之御為トノミ存詰精々議論抽ニ粉骨ニ候処不レ圖も如レ此被ニ仰付ニ候吾等一身不レ足言といへとも辱くも祖先ノ諸業ヲ受継幕府之盛親ニ備リ 天朝奉事外虜捷伐專可レ遂ニ其節ニ身分ニ付假令如レ此被ニ仰付ニ候共尊 皇攘夷之筋ニ付るも分毫も素論不レ交候況ヤ近來幕府之御處置違レ勅和レ我之事等ハ決る 將軍家之尊慮ニ出ルニ非ス偏ニ某々奸猾之徒ノ手ニ出候間必々奉レ怨ニ將軍家之念不レ可レ挾候此舉ニ付或奉レ怨ニ將軍家ニ又ハ尊皇攘夷之素志ヲ相挫レ候様於レ有レ之ハ甚吾等本意ニ叶不レ申ノミおらす天朝幕府ヘ奉レ對不レ相濟ニものニ付屹加責罰ニ候間不レ可レ致ニ心得違ニ事ト

可ニ仰出ニ候左候る祐天下之大丈夫なるハ無レ之哉假令是ニる國滅シ候共墨夷ニ臣タルニハ勝リ不レ申哉且奸猾人淺智ニ非ざるハ奸物ハ隱身ノ術ヲ佛家ヘ学タルトミヘ己レハ隱レテ堀田ト伊賀トテ違勅ヲヤラセ物論ガ八ケ間布候ヘそ二人ヲ伴シ間部ヲ出シテ天朝ヲ懾カサセル彦根も矢張遣ハレ手ナラン且隱身ノ奸物モ伴レル時ガ來タラハ伴レモセウガ奸物ハ天下ニ多キもの前狼後虎事亦艱、四名公様今ノ奸物ヲ御碎被レ成テハ後ノ奸物ハモウイケマセン天子様ノ御身上ト己ノ身上トチガ重カ天子ノ危ハ見捨テ己ノ身上ハ禍ヲ畏レル何共ノ合点ユカヌコ足下ノ言ハ手前料見カ又ハ同志中も同様カ早々承タシ半井ハ越前ノ山田之事申參候感涙如レ霞何卒其人ヘ此論可レ被レ成下ニ候符中有レ之囚室臆度ハトウヅ山田カ吉田貞藏ナト越人ヘ御見せ可レ被レ下候臆度ガ間違ナラハ僕ガ喪心あり間違ナクハ手段シテ尾・水・越・橋ヘ

御奉上可レ被レ下候殊ニ越侯望ム所ニ陳又幕府・尾・水ヘ 勅詔下り候頃吾藩へも鷹司公ハ御内書來り候由ニ付僕日頃

之同志へも不レ謀シテ久保ヲ頼ミ彈正殿ヘ上書ヲ託シ候所早速達ニ 公聽ニ候由然レ不レ知ニ用捨何如ニ後數日周布政之助兵庫御用ト号被レ差登ニ候併実ハ上京仕候趣ニ周布ハ御前ニテ直命ヲ被リ行候ゆヘ何事ニヤ世人ハ一向不レ知あり吾等も只々戰々兢兢葉待レ罪而已、可レ惜能登殿ノ弟安殿ト申一人才ヲ流行病ニテ死ナセ候福原ヘハ佐世主殿被レ嗣候様ニ思召アリ未レ決、他分違背ハ有レ之間布候 \*(安政五年八月十一日福原左近之允死、後嗣佐世主殿實は福原の子即後の福原總後である。)

重九

松陰生

松洞生足下

此書尤と不レ被レ存候ハ、來嶋を初メ尾寺・高杉・半井・杉藏(江吉田)・榮太郎其外日常ノ同志ヘ悉ク御見せ是非書附ヲ以テ御聞せ可レ被レ下候

日下も多分此書達セヌ内ニ東下ナラン同前、書成時丑鐘徹レ耳候一人ノ奸猾さハ仆候ヘハ天下之事ハ定リ可レ申候(其弊亂征無)其巨魁ニ脅從無レ治、此ノ八字處ニ變之大活術之傑目指ス所ノ奸物一向不レ足恐都合江戸ノ一邸ノミ且新宮ノ人心甚不レ服是ヲ以テモ奸物ノ奸タルヲ知ルヘシ入鹿ヲ誅シタ事実ヲ覺テ居人ハ一人モナキカ水戸ニハ立派ナ大日本史カアル出シテ見玉ヘ營中テ打捨ルハ上策、一邸ヲ襲フハ中策、坐視觀望ハ不レ足言ナリ此事越前ハ被レ行候ハ、妙々此一条ハ同志へも秘密山田ヘ御謀リ可レ然候此外無レ策嗚呼々々、一夕ハ入鹿ヲ誅シ直足ニテ登營入鹿ノ罪ヲ明白ニ書立將軍ヘ呈シ前ノ八字ノ意味ヲ合せ天下ヘ大令ヲ発スベシ天下ハ一夕ニ定マルニノク然後 天朝尊ク幕府重シ

藤氏ノ尊榮乃越氏ニ帰スルナリ事破タ時ハ菴義・徐敬業あり

(東京市松林桂月氏藏 校合濟)

四八七 前田孫右衛門に贈る

安政五年九月十二日

松陰在松本  
前田在萩

盆頃弊塾滞居候生田良佐此間在所まで歸着昨日出塾仕候罷出候付御相對可被成下候尤京師出足ハ大分早ク候へ格別新聞無之候得共京邸之模様ハ大ニ爰元と打變り飛耳張目之手段丸々閉塞書生大ニ忌嫌候勢にて良佐も鬱々歸來中谷正亮信濃まで下向之心構之様子ニ御座候追々松助・仙吉杯も右之趣承り候へ共良佐承り別る愕然不奉存候只今登り居候組ノもの共邸中ニのみ簡居不仕彦根新宮辺へ寄御遣有之度仙吉・小助ナト歸居候分も追々被差登候御所置有之度事ニ奉存候且阿州・土州等勤王之手段も追々間諜御用被成度と良佐も申居候此間諜はちと人物ならるゝ相捌申間布候尤周政登候へ何事も無免事ニ可有之候へ共是等之所今一議奉冀候玄瑞之書一通入御覽候

寅白

九月十二日

前田致遠老丈

座下

(防府町藤原甚吉氏藏 校合濟)

四八八

×中谷正亮より

安政五年九月十五日(カ)

中谷在京師  
松陰在松本

(前文圖)○國重徳へ於途中一面會仕候其節福乙之進尙一見実ニ感心不覺落涙仕候其中ニ又薩外夷と結び我藩を反心有之ふき云ふし

外夷之手をかり候手段有之候歟之趣余り致し候事ニ候得ども姦計油断も不相成祖先日小田邸へも其邊之事情風説傳承候事も有之候ニ付斷置候得ども尙又急便此由崎陽まで被仰越度左候得と相合ミ探索之致し様も可有之存候分り兼申候孰カ有志之士一人京師に上セ度奉存候何卒御周旋奉祈候舟越清藤分盛(平塚) 颯齋(伊藤) 頻りに航海説を唱ルナリシカシ俗を少シ交セルナリ明日発程甚多忙不能尽追付傳之助歸るナリ其節御聞取可被下候午ニ失敬右之趣愚姪にも御聞セ被下候様奉頼候是僕東下之事ナリ萩野も不違内帰國之由ナリ是又可憐い細直ニ御聞可被下候閣筆

十五日

正亮

松陰先生格下

(東京市榊取三郎氏藏 校合濟)

四八九 玉乃東平殿に與ふ

安政五年九月十六日

松陰在松本  
玉乃在岩國

高橋生數々御世話ニ被成候事と奉存候  
高橋東之進(傳) 歸來芳翰拜見彌御盛之御様子奉并賀一如諭京城奉別後時事大變革小生奇厄只々如夢ニ御座候餘事姑置天朝愈以御盛 勅諭降り候後関白御交替傳奏も同断誠ニ大愉快ニ覺申候然ルニ本月二日星當翁物故是誠ニ長息之至ニ御座候陳ハ此内蒙命候 先公御戰記等之儀小生乍愧是等之事平素甚不心懸ニ候所先承及候所にてハ江氏家譜・吉田物語・溫故私記・御感狀集等ノミニ御座候其外少々家記類ハ各家ニ藏有仕候所若御用も御座候ハ、御門生ニても御差出被成候ハ、弊塾ニあり共滞寓にて小生輩も物序ニ是等之證儀可然覺悟御座候先ハ右御答申上度勿々閣筆仕候頓首

安政五年

九月十六日

東平様

尙以此度同邑生大賀幾助ト申もの山陽南海辺遊歴ニ出懸候間何卒御面會被<sub>レ</sub>下度又御同志好事之人々にも御引合可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下奉<sub>レ</sub>願候  
(所藏者不明 寫真校合濟)

九四

寅次郎拜白

四九〇

×松浦松洞より

安政五年九月十七日

松浦在江戸  
松陰在蘇松本

〔人江吉田〕  
杉藏・榮太婦期相逼最早不<sub>レ</sub>遠内御面接奉<sub>ニ</sub>欣<sub>ニ</sub>井候時<sub>ニ</sub>水府も志士多分蜂起致どふなら事愉快ニ參<sub>テ</sub>可<sub>レ</sub>申候歟之勢ニ相見<sub>ヘ</sub>申候い  
細<sub>ク</sub>高杉・小寺・半井諸君よ<sub>テ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>申越<sub>ニ</sub>候僕実<sub>ニ</sub>策無<sub>ニ</sub>御座<sub>ニ</sub>奥羽行も何程之益ニ相成る<sub>ニ</sub>と申計算御座候<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>も非<sub>ニ</sub>され<sub>ニ</sub>夫  
と扱置今度長井歟水野歟ニ從<sub>ル</sub>米利堅行果度所存<sub>ニ</sub>御座候此行<sub>ニ</sub>ふ<sub>レ</sub>所<sub>ニ</sub>見聞<sub>ニ</sub>或<sub>ニ</sub>或<sub>ニ</sub>記<sub>シ</sub>隨分益ニ相成<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>勘考仕候故<sub>ニ</sub>先  
御相談申上候如何<sub>ニ</sub>御座候哉尤も長井・水野杯他藩之者連行候哉未<sub>タ</sub>得<sub>テ</sub>聞<sub>ル</sub>し不<sub>レ</sub>申候得共氏家健介君之談<sub>ニ</sub>頼<sub>ニ</sub>ふ<sub>ニ</sub>次第<sub>ニ</sub>隨  
分連行申候様子<sub>ニ</sub>御座候右氏家君<sub>ハ</sub>西洋家村田造六<sub>ニ</sub>寓<sub>ニ</sub>熟<sub>ニ</sub>熟<sub>ニ</sub>御座候<sub>ニ</sub>今度矢張米利堅行欲<sub>セ</sub>た<sub>レ</sub>候由先日御国<sub>ニ</sub>願<sub>ヒ</sub>被<sub>ニ</sub>致<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>御国<sub>ニ</sub>  
之願<sub>ヒ</sub>御免御座候<sub>ニ</sub>夫<sub>ニ</sub>江<sub>ノ</sub>江<sub>ノ</sub>之御留居御頼<sub>ニ</sub>相成<sub>ニ</sub>申候<sub>ハ</sub>是<sub>レ</sub>長<sub>ニ</sub>井<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>水<sub>ニ</sub>野<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>承<sub>ニ</sub>允<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>由<sub>ニ</sub>僕<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>熟<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>願<sub>ヒ</sub>可<sub>レ</sub>仕<sub>ニ</sub>積<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>御座  
候得共茲<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>議論<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>小<sub>ニ</sub>寺<sub>ニ</sub>君<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>説<sub>ニ</sub>は<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>國<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>道理<sub>ニ</sub>して<sub>ニ</sub>江<sub>ノ</sub>江<sub>ノ</sub>も<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>程<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>運<sub>ニ</sub>する<sub>ニ</sub>し<sub>ニ</sub>は<sub>ニ</sub>ふ<sub>ニ</sub>し<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>事故<sub>ニ</sub>先<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>願<sub>ヒ</sub>  
處差扣申候若<sub>ニ</sub>江<sub>ノ</sub>江<sub>ノ</sub>も<sub>ニ</sub>運<sub>ニ</sub>ひ<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>得<sub>テ</sub>御<sub>ニ</sub>國<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>願<sub>ヒ</sub>仕<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>節<sub>ニ</sub>乍<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>面<sub>ニ</sub>倒<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>運<sub>ニ</sub>ひ<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>様<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>配<sub>ニ</sub>慮<sub>ニ</sub>偏<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>希<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>付<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>度<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>山  
々御座候得共筆紙<sub>ニ</sub>尽<sub>ニ</sub>し<sub>ニ</sub>難<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>何<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>榮<sub>ニ</sub>太<sub>ニ</sub>杉<sub>ニ</sub>藏<sub>ニ</sub>ニ<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>合<sub>ニ</sub>置<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>面<sub>ニ</sub>接<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>得<sub>テ</sub>御<sub>ニ</sub>開<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>遣<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>已<sub>ニ</sub>今日<sub>ニ</sub>よ<sub>テ</sub>鎌<sub>ニ</sub>倉<sub>ニ</sub>へ<sub>ニ</sub>罷<sub>ニ</sub>越<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>右<sub>ニ</sub>  
件<sub>ハ</sub>丸<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>小<sub>ニ</sub>寺<sub>ニ</sub>高<sub>ニ</sub>杉<sub>ニ</sub>半<sub>ニ</sub>井<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>君<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>託<sub>ニ</sub>置<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>彼<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>君<sub>ニ</sub>よ<sub>テ</sub>も<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>細<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>越<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>尙<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>様<sub>ニ</sub>内<sub>ニ</sub>服<sub>ニ</sub>部<sub>ニ</sub>和<sub>ニ</sub>卿<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>近<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>免<sub>ニ</sub>足<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>地<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>罷<sub>ニ</sub>歸<sub>ニ</sub>申

候由追々御塾にも罷出可<sub>レ</sub>申何分<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>宜<sub>ニ</sub>様<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>面<sub>ニ</sub>接<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>頼<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>先<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>頼<sub>ニ</sub>旁<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>度<sub>ニ</sub>荒<sub>ニ</sub>増<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>斯<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>座<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>保<sub>ニ</sub>護<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>祈<sub>ニ</sub>草<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>頓<sub>ニ</sub>首<sub>ニ</sub>

九月十七日

無窮拜

二白米利堅行<sub>ニ</sub>付<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>最早<sub>ニ</sub>供<sub>ニ</sub>張<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>數<sub>ニ</sub>相<sub>ニ</sub>定<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>熟<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>己<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>金<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>費<sub>ニ</sub>サ<sub>ニ</sub>ズ<sub>ニ</sub>テ<sub>ニ</sub>ハ<sub>ニ</sub>連<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>由<sub>ニ</sub>僕<sub>ニ</sub>殆<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>難<sub>ニ</sub>盡<sub>ニ</sub>仕<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>如何<sub>ニ</sub>様<sub>ニ</sub>思<sub>ニ</sub>案<sub>ニ</sub>仕<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>  
も<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>分<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>金<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>費<sub>ニ</sub>して<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>ハ<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>來<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>君<sub>ニ</sub>公<sub>ニ</sub>様<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>惠<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>祈<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>し<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>座<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>右<sub>ニ</sub>二<sub>ニ</sub>付<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>ハ<sub>ニ</sub>小<sub>ニ</sub>寺<sub>ニ</sub>高<sub>ニ</sub>杉<sub>ニ</sub>半<sub>ニ</sub>井<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>君<sub>ニ</sub>  
之<sub>ニ</sub>櫻<sub>ニ</sub>田<sub>ニ</sub>郎<sub>ニ</sub>長<sub>ニ</sub>井<sub>ニ</sub>君<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>談<sub>ニ</sub>判<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>遣<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>由<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>座<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>ど<sub>ニ</sub>ふ<sub>ニ</sub>程<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>ケ<sub>ニ</sub>か<sub>ニ</sub>し<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>夜<sub>ニ</sub>案<sub>ニ</sub>し<sub>ニ</sub>居<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>且<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>昨<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>水<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>得<sub>テ</sub>今<sub>ニ</sub>度<sub>ニ</sub>長<sub>ニ</sub>井<sub>ニ</sub>水<sub>ニ</sub>野<sub>ニ</sub>  
杯<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>米<sub>ニ</sub>利<sub>ニ</sub>堅<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>他<sub>ニ</sub>藩<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>連<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>相<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>幕<sub>ニ</sub>府<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>仰<sub>ニ</sub>付<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>座<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>との<sub>ニ</sub>由<sub>ニ</sub>愈<sub>ニ</sub>実<sub>ニ</sub>説<sub>ニ</sub>共<sub>ニ</sub>ふ<sub>ニ</sub>れ<sub>ニ</sub>絶<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>手<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>し<sub>ニ</sub>ハ<sub>ニ</sub>相<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>  
是<sub>ニ</sub>等<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>小<sub>ニ</sub>寺<sub>ニ</sub>半<sub>ニ</sub>井<sub>ニ</sub>高<sub>ニ</sub>杉<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>君<sub>ニ</sub>が<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>越<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>僕<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>件<sub>ニ</sub>実<sub>ニ</sub>氣<sub>ニ</sub>掛<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>鎌<sub>ニ</sub>倉<sub>ニ</sub>へ<sub>ニ</sub>參<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>多<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>滞<sub>ニ</sub>留<sub>ニ</sub>仕<sub>ニ</sub>積<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>  
座<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>決<sub>ニ</sub>着<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>處<sub>ニ</sub>熟<sub>ニ</sub>後<sub>ニ</sub>便<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>何<sub>ニ</sub>卒<sub>ニ</sub>米<sub>ニ</sub>利<sub>ニ</sub>堅<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>ハ<sub>ニ</sub>塾<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>君<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>知<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>さ<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>様<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>希<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>以上

松陰先生 座下

(勤王諸士遺墨帖所載寫眞 校合濟)

四九一

益田彈正に贈る

安政五年九月廿三日

松陰在蘇松本  
益田在蘇

梅田源二郎就捕等<sub>ニ</sub>ても<sub>ニ</sub>臆<sub>ニ</sub>病<sub>ニ</sub>論<sub>ニ</sub>起<sub>リ</sub>可<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>へ<sub>ニ</sub>共<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>源<sub>ニ</sub>二<sub>ニ</sub>亦<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>罪<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>尋<sub>ニ</sub>常<sub>ニ</sub>ナ<sub>ニ</sub>ラ<sub>ニ</sub>ヌ<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub>置<sub>ニ</sub>言<sub>ニ</sub>語<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>他人<sub>ニ</sub>ニ<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>テ<sub>ニ</sub>ハ<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>  
恐<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>候

先達<sub>ル</sub>申<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>杉<sub>ニ</sub>藏<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>今<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>赤<sub>ニ</sub>川<sub>ニ</sub>直<sub>ニ</sub>次<sub>ニ</sub>郎<sub>ニ</sub>が<sub>ニ</sub>承<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>へ<sub>ニ</sub>最<sub>ニ</sub>早<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>手<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>由<sub>ニ</sub>難<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>存<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>尙<sub>ニ</sub>江<sub>ノ</sub>江<sub>ノ</sub>飛<sub>ニ</sub>脚<sub>ニ</sub>來<sub>ニ</sub>杉<sub>ニ</sub>藏<sub>ニ</sub>書<sub>ニ</sub>狀<sub>ニ</sub>別<sub>ニ</sub>紙<sub>ニ</sub>  
參<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>趣<sub>ニ</sub>ニ<sub>テ</sub>ハ<sub>ニ</sub>杉<sub>ニ</sub>藏<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>已<sub>ニ</sub>ニ<sub>頼<sub>ニ</sub>政<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>決<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>趣<sub>ニ</sub>ニ<sub>相<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>私<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>讀<sub>ニ</sub>頗<sub>ニ</sub>ル<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>志<sub>ニ</sub>ニ<sub>感<sub>ニ</sub>し<sub>ニ</sub>落<sub>ニ</sub>涙<sub>ニ</sub>ニ<sub>及<sub>ニ</sub>ヒ<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>論<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>也<sub>ニ</sub>頼<sub>ニ</sub>政<sub>ニ</sub>位<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>來<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>へ<sub>ニ</sub>  
ハ<sub>ニ</sub>宜<sub>ニ</sub>敷<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>へ<sub>ニ</sub>共<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>ハ<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub>詮<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>來<sub>ニ</sub>さ<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>吾<sub>ニ</sub>藩<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>勤<sub>ニ</sub>王<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>勅<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>思<sub>ニ</sub>召<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub>杉<sub>ニ</sub>藏<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>もの<sub>ニ</sub>狗<sub>ニ</sub>死<sub>ニ</sub>させ<sub>ニ</sub>テ<sub>ニ</sub>ハ<sub>ニ</sub>何<sub>ニ</sub>共<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub></sub></sub></sub></sub>

安政五年

九五



相濟二事ニ奉レ存候故乍ニ此上ニ先日之議何卒御決断奉ニ希上ニ候いつき無レ程飛脚ニて歸り可レ申ニ付其頃迄ニ一定相成候様奉レ頼候又宣通無窮松浦龜太郎書之趣ニてそ水府も早腰拔候よし是ハカクコソ可ニ相成ニと前々存居候事ニて今更可レ驚事ニハ無レ之候併是ニ付俗議沸騰ハ必然ニ御座候間何卒無レ御頓着ニ正義之踏ヘ益々手強ク有レ之候様萬々奉レ祈候是ニ畏レ御手ヲ被レ為レ收候様ニ江家之義名忽チ地ニ墜候事と御存可レ被レ成候乍レ去凶煩隨分盛ニ御座候付御國勢格別御盛大無レ之者御凌も六ヶ敷被レ相考ニ候追々申上候御前衆議之上御直裁ヲ始メ御目附方改正又御代官召對等之事ナト着々現実被レ行不レ申る者相濟不レ申様奉レ存候扱又御一門之御歴々已下大身之衆中御家來内有志之者大半ハ屈抑失レ志居候此段をも些御詮儀被レ成度奉レ存候是等之事いつき近日委細申上度候ヘ共何分正氣マサニ沈込んとする之際誠ニ肝要之儀ニ付一日も無レ御猶豫ニ被レ附ニ御手ニ度奉レ存候 以上

九月廿三日

行相益君 執事

(東京市益田兼施氏藏 校合濟藏)

藤矩方再拜

四九二

×入江杉藏より

安政五年九月廿七日

入江在江戸  
松陰在蘇松本

秋冷暮流行病如何と苦念仕候益御賢勝ト奉レト候爰元水府ノ事務府大分恐怖之色ニて面白御座候両邸も御警備有レ之御役人も大キニ按顔何せ御内達事共有レ之候哉と被レ考候相州にも早速御飛脚行茲土も已前トハ手揃いニ相成兼る程ニ按も不レ仕候水府ノ衆議論之區々至極氣遣候ものも有レ之候ヘ共縮ル處実ハ本気決る平々ニテハ屈服ハ致間敷と被レ察候明日除喪不レ違うち模様も可レ有レ之と奉レ存

候私杯も暫時歸國被ニ差留ニ候多用不レ能ニ委曲ニ候謹言

九月廿七日

松蔭先生下執事

杉藏

(寫本東京市吉田茂子氏藏 校合濟藏)

四九三

荻野時行に與ふ

安政五年九月廿七日

松陰在蘇松本  
荻野在京郡

追々芳翰忝候星翁物故、梅田就縛、中谷・久坂其外東下、六人者生田等西歸御無聊之態致ニ遙想ニ候兄も東下之策ニ御定候哉如何此度又五人罷登候就レ中和作と申もの杉藏ノ弟ニ有ニ才氣ニ頗好ニ讀書ニ候尤も年少輕銳之質ニ付時々御控制被レ下度候○大原卿其外御周旋之件如何ニ御座候哉承度候○周布上京書生ハ不平もゆらん去ならら國事ニ取テハ大ニ進歩もゆらんと被レ察候○生田も不平之事有レ之婦邑可レ憐也

九月廿七日

松陰生

荻野時行兄

和作邸外ニる寓居可レ然儒家等有レ之候ハ、是亦御周旋可レ被レ下候以上

(東京市野村益三氏藏 校合濟藏)

四九四

野村和作に與ふ

安政五年九月廿七日頃

松陰在蘇松本  
野村在蘇

百事精思而後行るし勿レ凌ニ忽長者ニ取ル人疾惡ハ汝不レ忠ニ無ニ才氣、所レ忠此ニ事ノミ此度之行不レ可レ喜事、然事至亦不



へ御内達之御手段は出来申間布哉老兄御同志人東上ハさつぱり出来不レ申哉些御工夫奉レ頼候水戸士三十人亡命江戸へ  
潛み候由能成レ事否、梅田入獄ニ付一門生<sup>(赤根)</sup>赤根武人トテ梅田へ寓居仕居候處 亡命せしめ上京させ大和ノ土民ヲ協合伏見ノ  
獄ヲ毀タセ候様致候其生才アレハ氣少シ乏シ成セハ宜シキガト案勞仕居候象山ハ星巖ニ頼ミ春日讃州久我卿ノ手ニ  
兩三度上書有レ之候星巖沒後何如未レ詳僕も星巖ノ手ニ密奏仕候處星沒後大原卿ヲ得大ニ喜申候何分朝廷言路洞開之一  
事奉<sup>(忍)</sup>忍入レ候也

十月八日

松下陳人

(下關市岡田平吉氏藏 校合濟)

四九七

×飯田正伯より

安政五年十月八日

飯田在大阪  
松陰在松本

一別以來益御勇壯奉<sup>(第カ)</sup>恭賀候小第儀去月晦日三田尻出帆海上無<sup>(忠カ)</sup>美今月七日晝タツ時浪華着海仕候間乍レ懼御投念可レ被<sup>(忠カ)</sup>下候扱ハ浪  
華ニ於テ山田亦介・福原清介面會京師ノ事情略承リ候所 天朝ニハ鎖國共雄略共不<sup>(忠カ)</sup>定只々滿天下ノ人心居合ヨキ方エ快局トノ  
ニ御坐候然處當節ハ奸黨威ヲ擅ニシ京城中間者滿布シテ正論家又ハ列國ヨリ京師に出置所ノ間者枉シキ者ト見レハ片端ヨリ捕エ  
獄ニ入候ユヘ周布氏モ大恐怖ニテ福原清介ヲ引連レ早々浪華迄歸申候由巨細福生ヨリ承リ候 大原君ハ京城第一ノ傑物<sup>(傑カ)</sup>備慨大憤懣  
ノ御方ニテ大坂エ微行後ハ奸吏共此御方エ眼ヲ着ケ暗ニ警衛ヲ付置候様子ニテ御坐候然故ニ先生ノ御書簡并時論等彼方に達スル  
不<sup>(忠カ)</sup>相成<sup>(忠カ)</sup>候且幸ニ右ノ御書狀ヲ彼方様に達シ候トハ 大原君大憤懣ノ時ニテ候ヘハ微服潜行西下遊サス<sup>(忠カ)</sup>必然ナリ然ルトハ京攝ノ  
間ニハ間者滿布致候ハ京攝ノ内ニ於テ大原君囚奴トナル<sup>(忠カ)</sup>必セリ然ルトハ是ヨリノ事發露シ吾國ノ大難事ヲ醸ス<sup>(忠カ)</sup>モアランカ然ル

中ハ 皇國守護勤王ノ御趣意却る難<sup>(忠カ)</sup>相貫<sup>(忠カ)</sup>機去リ時移リ大義十ノ一二モ舉ラスノ先生同志ノ面々空ク削腹<sup>(削カ)</sup>ノ死<sup>(死カ)</sup>ガ、大志雄略ノ者  
何ソ先スル<sup>(忠カ)</sup>ハ厭ハサレト同シ先スルモ豈快ク有間鋪候其他ノ百弊蜂起ノ御國ノ大禍深患災ニ難<sup>(忠カ)</sup>計候右ノ次第愚案仕候ニ付伊藤傳  
之介ト談合<sup>(忠カ)</sup>ノ以テ先生ノ御書簡并ニ時論ハ一先傳之介ヨリ返納致サセ申候今暫ク時勢御見合被<sup>(忠カ)</sup>成候上ニテ最モ角モ御計可<sup>(忠カ)</sup>然奉<sup>(忠カ)</sup>存  
候申上度事稱々万機御坐候へ共只今ハ伏見驛錢屋方ニテ認メ候折から同伴ノ者皆々出立実ニ多忙ノ<sup>(忠カ)</sup>コニ書殘申候<sup>(忠カ)</sup>急ク山坐候<sup>(忠カ)</sup>互  
細ノ儀ハ傳之介に申合置候間此者ヲ御開合可<sup>(忠カ)</sup>被<sup>(忠カ)</sup>下候 草々頓首

十月八日曉認メ

二白御同志中様によろしく御傳聲可<sup>(忠カ)</sup>被<sup>(忠カ)</sup>下候

飯田正伯

松蔭先生

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟)

四九八

×中谷正亮より

安政五年十月十一日

中谷在江戸  
松陰在松本

芳翰難<sup>(忠カ)</sup>有謹讀仕候 小生等 大原卿參殿之事達ニ公聽<sup>(忠カ)</sup>候由肝銘難<sup>(忠カ)</sup>存奉<sup>(忠カ)</sup>感涙<sup>(忠カ)</sup>候此節ニ幕吏勤 王<sup>(忠カ)</sup>之者を嚴重ニ探索仕候間道路以<sup>(忠カ)</sup>目  
之勢ニ御座候越前之高論至極御尤之至奉<sup>(忠カ)</sup>感服<sup>(忠カ)</sup>候未ダ半井に<sup>(忠カ)</sup>得見セ不<sup>(忠カ)</sup>レ申候此節之事故書面ニ差扣可<sup>(忠カ)</sup>申奉<sup>(忠カ)</sup>存候只々高論を以山田  
に論しも可<sup>(忠カ)</sup>申奉<sup>(忠カ)</sup>存候小生未タ無<sup>(忠カ)</sup>一面<sup>(忠カ)</sup>何卒一面仕度奉<sup>(忠カ)</sup>存候此節頻リニ風説仕候仙臺土州、水府同前之御咎メ可<sup>(忠カ)</sup>被<sup>(忠カ)</sup>下候左候得<sup>(忠カ)</sup>有志之諸  
と申事ニ候得共未タ慥ニ據無<sup>(忠カ)</sup>レ之候間部も京都之事至る不都合廿日頃東下申事ニ候是実否無逸<sup>(忠カ)</sup>御開可<sup>(忠カ)</sup>被<sup>(忠カ)</sup>下候左候得<sup>(忠カ)</sup>有志之諸  
藩に手を着申候其上<sup>(忠カ)</sup>又々朝廷を脅嚇<sup>(忠カ)</sup>之策<sup>(忠カ)</sup>無<sup>(忠カ)</sup>レ之哉と奉<sup>(忠カ)</sup>存候吾藩も至る危き由頻リニ風説有<sup>(忠カ)</sup>レ之萬一有<sup>(忠カ)</sup>レ之節ニ決<sup>(忠カ)</sup>俗論相起  
り可<sup>(忠カ)</sup>申候間其時ニ至りて人々之處置ニ御座候一人ニ處置仕候人と共ニ事を成可<sup>(忠カ)</sup>申候と覺悟仕候何卒其人澤山に有<sup>(忠カ)</sup>レ之かしと奉

安政五年

祈候御國ニ義團を結び義を唱へ候て只々先生一人之任と奉<sub>レ</sub>存候爰元ニも來島・桂<sub>(實市)</sub>・日市・高杉・尾寺杯と決して遲疑<sub>テ</sub>仕間敷候  
 已ニ今夕來島と其話を仕候何分爰元人物ニ乏敷候間何卒來原を東下之策<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>之候哉御周旋奉<sub>レ</sub>祈候傳之助又々西上之由妙先生カ大  
 原卿<sub>ニ</sub>之書も無<sub>レ</sub>之候哉承度奉<sub>レ</sub>存候小生も江川入門之積<sub>ニ</sub>御座候高杉大領國を發し申候處桂と共に追々説和<sub>ラ</sub>け申候得共未銃陣を學  
 フ程<sub>ニ</sub>至<sub>リ</sub>不<sub>レ</sub>申何卒先生<sub>ノ</sub>御諭し奉<sub>レ</sub>祈候長井掃國定<sub>ル</sub>愉快之御議論可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之と奉<sub>ニ</sub>遙想<sub>ニ</sub>候是又御高策御諭奉<sub>レ</sub>祈候松洞も今日歸  
 着<sub>ニ</sub>之由未<sub>タ</sub>面會不<sub>レ</sub>得仕<sub>ニ</sub>候萩野も東下氣魄甚衰可<sub>レ</sub>憐少<sub>シ</sub>輕薄之氣味も有<sub>レ</sub>之哉<sub>ニ</sub>御座候是迄も不<sub>レ</sub>忍<sub>レ</sub>言<sub>ニ</sub>其惡<sub>ニ</sub>候故曾テ口外不<sub>レ</sub>仕候  
 得共余<sub>リ</sub>憤懣<sub>ニ</sub>堪不<sub>レ</sub>申候故不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止<sub>リ</sub>口外仕候東下後一度面會其節入學周旋相頼候故半井・尾寺杯と相談仕居候處其内ニ土屋彌之助  
 弟<sub>ニ</sub>相頼旗本<sub>ニ</sub>奉公仕候相決候由尾寺<sub>ノ</sub>承申候萩野<sub>ノ</sub>其後一向不<sub>レ</sub>來是等之處<sub>ニ</sub>輕薄と申候也然し窮生故旗本奉公固より尤之事候  
 得共小生杯<sub>ニ</sub>何共相談も不<sub>レ</sub>仕半井<sub>ニ</sub>も又然<sub>リ</sub>可<sub>レ</sub>歎<sub>ニ</sub>宮部之書未<sub>レ</sub>來いか<sub>ニ</sub>相成候哉<sub>ニ</sub>御面倒<sub>ニ</sub>御序之節直<sub>ニ</sub>八<sub>ニ</sub>御尋奉<sub>レ</sub>祈候淡水杯  
 米利加行先生之御周旋と奉<sub>レ</sub>察候能クユケバヨイガ甚<sub>ニ</sub>六ヶ敷由<sub>ニ</sub>御座候行ハレザルトキハ直様御國<sub>ニ</sub>御返<sub>シ</sub>被<sub>レ</sub>成候様先生<sub>ノ</sub>周布<sub>ニ</sub>  
 御議論奉<sub>レ</sub>祈候左<sub>ニ</sub>ふくハ又々散財仕可<sub>レ</sub>申淡水一人之散財ハ致方も無<sub>レ</sub>之事<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>存候得共他人を誘ひ候<sub>ル</sub>甚<sub>ニ</sub>以迷惑奉<sub>レ</sub>存候先生之御  
 議論如何高論是祈日下も村田造六處<sub>(處)</sub>ニ勉強江崎も傳通院<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>日下已<sub>ニ</sub>面會之由高杉も參<sub>リ</sub>候得共留守<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>不<sub>レ</sub>面會<sub>ニ</sub>小生も未<sub>レ</sub>訪  
 道太唐船方<sub>ニ</sub>成<sub>ル</sub>由何卒能クアレハヨイガ虚喝<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>人<sub>ノ</sub>を欺<sub>ニ</sub>困<sub>ニ</sub>る彌之助<sub>ノ</sub>近來如何矢張俗論を吐ク可<sub>レ</sub>憎聞筆頓首

十月十一日夜書成曉鐘

二陳塾中之諸君子<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>書有隣老兄<sub>ニ</sub>と毎々疎濶多罪<sub>ニ</sub>先生<sub>ノ</sub>宜敷御傳奉<sub>レ</sub>願候何分御國ガ一致不<sub>レ</sub>仕候<sub>ル</sub>天下之事成不<sub>レ</sub>申候  
 御周旋是祈

松陰先生座右

(阿武郡福川村森田豐吉氏藏 校合濟堂)

中谷正亮拜

四九九 益田彈正に贈る

安政五年十月十二日

松陰在萩松本 益田在萩

別番壹冊幽囚之罪人毎々奉<sub>ニ</sub>忍入<sub>ニ</sub>候儀<sub>ニ</sub>御座候共何分國事不<sub>レ</sub>痛哭<sub>(堪脱カ)</sub>又々妄發仕候間御序を以奉<sub>レ</sub>呈<sub>ニ</sub>閣下之乙覽<sub>ニ</sub>度區  
 々之微衷御察被<sub>レ</sub>遊度奉<sub>レ</sub>願候今日之事何分 御直裁ト代官御目附召對ト志士御親<sub>ミ</sub>御講學被<sub>レ</sub>遊候事無<sub>レ</sub>之<sub>ル</sub>者吾輩誠  
 ニ絶望<sub>ニ</sub>御座候此事之成否ハ偏<sub>ニ</sub>執事<sub>(ノカ)</sub>ニ御建白<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>之事<sub>ニ</sub>囚臣杯之預<sub>リ</sub>知る<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>之候<sub>ニ</sub>共不<sub>レ</sub>堪<sub>ニ</sub>仰企<sub>ニ</sub>  
 至<sub>ニ</sub>候人物論<sub>ニ</sub>至<sub>リ</sub>候<sub>ル</sub>者來原良藏・赤川淡水等之建白も有<sub>レ</sub>之由小生存念<sub>ハ</sub>人<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>足<sub>ニ</sub>與適<sub>ニ</sub>只々前之四條祐急務<sub>(急務)</sub>ナレ其  
 内ニ 閣下之御直鑒被<sub>レ</sub>遊<sub>ニ</sub>若クハ無<sub>レ</sub>之と奉<sub>レ</sub>存候 恐惶謹言

十月十二日

寅二郎

益行相君 下執事

(東京市益田兼施氏藏 校合濟堂)

五〇〇 益田彈正に贈る

安政五年十月十三日

松陰在萩松本 益田在萩

杉藏之事<sub>(入江)</sub>ニ付態<sub>ト</sub>石津傳右衛門被<sub>レ</sub>差越<sub>ニ</sub>委細 高論之趣奉<sub>ニ</sub>承知<sub>ニ</sub>誠<sub>ニ</sub>摩胡搔痒候御處置奉<sub>ニ</sub>痛感<sub>ニ</sub>小生周旋杉藏申諭之  
 儀ハ奉<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>其旨<sub>ニ</sub>候本月初頭杉藏江戸發足可<sub>レ</sub>仕<sub>ニ</sub>付月末<sub>ニ</sub>ハ歸府可<sub>レ</sub>仕被<sub>レ</sub>考候陳又學政御更張之儀色々御手段可<sub>レ</sub>被  
 為<sub>レ</sub>在候處小生愚考<sub>ニ</sub>ハ持方論破<sub>ニ</sub>され<sub>ハ</sub>何事も手<sub>ノ</sub>付不<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>存候然<sub>ル</sub>此度益田豐三郎・乃美某兩人入學之志有  
 之由<sub>ニ</sub>付小田村都講甚周旋仕居候益田・乃美<sub>ノ</sub>覺悟<sub>ニ</sub>て<sub>ニ</sub>公命<sub>ニ</sub>さ<sub>ニ</sub>下<sub>リ</sub>候<sub>ニ</sub>ハ假令仲間内ノ俗論ハ如何計<sub>リ</sub>有<sub>レ</sub>之候

安政五年

共左顧右視不仕トまで相聞居申候右ニ付都講等々不日ニ兩人入學之議建白可仕候処其節ニ至り所謂仲間内ノ俗論ナル者致ニ發出候ハ、不レ可無ニ相公一喝儀と奉レ存候此一喝維ニ持名教ニ更ニ張學政ニ之大基ニ可レ有レ之奉レ存候此事兩人ニ在るも実ニ至願之筋ニ御座候此段前以申上置候臨レ書匂々不レ悉ニ所思ニ候

十三日

矩方再拜

行相益君 執事

(東京市益田兼施氏藏 校合濟藏)

五〇一 益田彈正に贈る

安政五年十月十四日

松陰在蘇松本 益田在蘇

松嶋生至御高論一々謹諾仕候上書ハ除ニ姓名ニ呈上仕候外ニ一議呈申候寄組衆入学之義御高論趣是亦松嶋承知敬服仕候萬々不悉

十四日

寅二拜白

下執事

(東京市益田兼施氏藏 校合濟藏)

五〇二 ×松浦松洞より

安政五年十月十四日

松浦在江戸 松陰在蘇松本

昨日氏家君之談ニ云長井玄蕃頭内ニ四人程僕を米利堅へ連行様子ト云々此事ガ愈実事ニ御座候得御国へ願イヲセスト行レル手段御座候ニ付折角此心配を高杉君久坂君杯被成下候間追々如何候カ様子申上候夫故先米利堅行ノ御心配ハ御国之御役人方へ被

成下候ハ、さし扣奉ニ頼上候何もい細ハ榮太口頭ニアリ御聞取可被遣候奉ニ頼上候頓首

十四日

無窮拜

松陰先生座下

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟藏)

五〇三 ×高杉晋作より

安政五年十月十五日以前

高杉在江戸 松陰在蘇松本

(吉田榮太郎) 晋ノ心亂知テ余故言ニ亂暴モ亂暴先生我カ爲ニ御推察被下候得ハ雖有奉レ存候無逸將レ歸、因書呈ニ先生几下ニ天下益衰諸侯益懼、惟爲レ頼者ハ、天朝而已也、御国衰俗當レ路賢愚俱隱、何日國是健立乎、國是不立爲ニ、天朝、雖レ欲レ盡レ力事不レ可レ成也、今日承り候へハ赤川直次郎ニ次ニ醫者等二人、一人金三十兩ワテニ、亞米利加に被差登候由甚々宜舖事ニ御座候乎是恐亞米利加に仕組ニ行クも同様と相考候実ニ人ヲ撰フ之疎ナル哉可レ思也爰元ニ、氏家鈴竹申、西洋学者御國に頼差出し候由ソレハ……相成候哉房主二人往キ候ハハ竹一人行候カマシト相考候且亦松洞事先達るカ亞米利加行ノ志有リソレ故私共モ少々ハ心ヲ尽シ候得共幕府ノ方ニモヨウシヌルノカ人ノツカヘタノカ達ニ不レ行レ候ソレ故松洞も不レ得レ已鎌倉行ヲ致候此度何卒相成候事ナレハ松洞ヲ亞米利加にヤル手段テキイタシマセメカ少シハ後レバセニハ御座候ガ何卒御心配可被下候様私ガ奉レ希候松洞ヲ參り候得ハ圖ナリヒキ候故仕組ニ參ル者ガ勝リト相考候乍爾仕組ニ參ル三人早御國出立仕候由トモ致方無ニ御座一カ何卒御手ヲ被レ尽候様奉レ頼候私儀も爰元ニ、心ヲ盡申候執レ直次郎ニ房主等來り候ハ、直様相對仕吐ニ一言、其言曰松洞ト云者有リ先達るカ爰元ニ來リ居候處亞米利加行ノ事ヲ聞キ何卒有レ策ハ參り度ト段心配仕候得共金ハ無シ其上幕府ノ方ムツカシク相成達ニ残念至極ニ今日送リ候乎貴下様方亞米利加に御出被レ成候得ハ好通者御伴ヒ被レ成候ハテハ圖ナトヲ引ク事ムツカシ座候間何卒此圖ヲ能引キ候故尊公様方御頼ニ、何卒御引ツレ被レ下候様奉レ希候ト三人に申候ト落着仕居候ソレハ外ハ何ノ策モ無ニ御座候幾重ニも松洞之儀萬々奉レ頼候先達るカ御頼ニ松洞ヲ御想調被レ成候カ、ワレハ松洞ノ全ク心間達ニハ無ニ御座候間御宥免可

レ被レ下様奉レ希候松洞中々本気ニ居候間乍ニ失禮<sup>(却カ)</sup>御休意奉レ頼候御国ニ於テ者言路大キニ開ケ候由大慶至極ニ奉レ存候乍レ爾言路開ケ候得共君子之言辨スル人ガ無クテハ言路開ケテ即テ害ヲナス様相成候間此段深御默念奉レ希候

山縣半藏事も長井ノ手子ニ少シハ奔走心ニ相成候長井之心如何々々是亦深ク御默念奉レ存候私も長井ノ事ヲ言ヘハ人々愚兒之言ト申シ候か私ノ此言公平ナリ先生深ク御默思奉レ希候 支瑞・桂・正亮一議論不レ合ト申候得<sup>(其股カ)</sup>皆眞之知己ナリ眞ノ良友ナリ」追々都下之大名も梅田ノ様ナル者ノカ有ル様子はレ亦幕府之衰ロヘル一端ナリ人々私ノ義論サシテ鎖國論云ケレモサウデモ無ニ御坐レ候カ惟交易開ケル恐ル、而已ナリ」此節ハ私モ忌中ニ居候仕候得者松洞ノ志ニ感シ奉レ呈上ニ粗翰々々再拜

呈我義卿先生足下

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

五〇四 ×久坂玄瑞より

安政五年十月十五日

久坂在江戸 松陰在萩松本

御園物故可レ憐々々何卒行狀カ傳カ御調被レ成候ハ、松洞ニ函ヲ函セ上梓可レ仕と考候烈婦奇衲之肖像上木次第早々送可レ申候無逸測量術ノ手ヲ下ス事何如御熱慮可レ被レ遣候志賀金八之事承知仕候佐世兄の書今朝落手此度ハ報書不ニ差出<sup>(其股カ)</sup>宜ク鳳聲可レ被レ遣候僕此節大分壯健御放念可レ被レ遣候木島議論誠実書簡も參リ可レ申高杉・尾寺・中谷・僕益感服桂の處ニハ俗吏同寮毎ニ訪、遇フ不レ得俗吏近ク帰国之由甚妙無窮一寸昨日浦賀より帰ル昨夜川崎屋同宿今朝無逸ヲ送り候草々走筆留守狀も到手此度ハ報書ナシ

日下誠

松陰先生

(<sup>(二)</sup>の退白原本文首録白)

徳民書も來、宜御鳳聲、彌<sup>(品川)</sup>二所レ書口羽詩、先生次韻の詩到來僕次韻の積ナリ錄ニ於都波碑文清狂行狀、早々送り玉ヘ

(寫本東京市毛利元昭氏藏 校合濟堂)

五〇五 益田彈正に贈る

安政五年十月十五日

松陰在萩松本 益田在萩

豐生被<sup>(益田豐三郎)</sup>參入學御沙汰相成候由承一段之儀奉レ存候然處先日申上候様是非從來ノ持方致ニ打破<sup>(小)</sup>身士居寮之ものと萬事同様仕度との志甚銳可レ喜奉レ存候乍レ去是ニ付必同列間ノ俗論蜂起可レ致様被<sup>(察)</sup>候付何卒名教維持之為と思召格外之儀を以 執事一臂之力御添被<sup>(為)</sup>レ成度奉レ願候相成事ニ候ハ、豐生之父被<sup>(召)</sup>呼<sup>(俗)</sup>論ニ撓區<sup>(入)</sup>學仕せ可レ然と明白ニ御申諭被<sup>(成)</sup>候ハ、同列中ニも決る異説ハ有<sup>(レ)</sup>之間布飯令有<sup>(レ)</sup>之候共彼父子ニおるても 自位持詰候事も出來可レ申奉レ存候何分館弊洗除ノ嘴矢此一舉ニ可<sup>(レ)</sup>有<sup>(レ)</sup>之候間折角之志無ニあり申さす候御處置奉<sup>(レ)</sup>祈候委細ハ直ニ可<sup>(レ)</sup>被<sup>(申)</sup>上<sup>(候)</sup>へ共小生も申上候事可<sup>(レ)</sup>然との事ニ候勿々具白仕候以上

十月十五日

寅二拜白

行相君 下執事

(東京市益田兼施氏藏 校合濟堂)

五〇六 益田彈正に贈る

安政五年十月十八日

松陰在萩松本 益田在萩

堅田・浦杯ノ少々人数差越可<sup>(レ)</sup>申哉と奉<sup>(レ)</sup>存候

從來歩兵之難<sup>(レ)</sup>興候所以色々所<sup>(レ)</sup>由も御座候へ共畢竟其人無<sup>(レ)</sup>之故之事ニ御座候此度來原良藏儀長崎被<sup>(差)</sup>越<sup>(候)</sup>付るそ良藏も専ら歩兵之事ニ心を留<sup>(メ)</sup>候積之由申聞候右ニ付る者彼地之趣十分歩兵訓練相捌ケ候勢ニ御座候ハ、官ノ御人数

三十人計も御遣被<sub>レ</sub>下候様申入仕置候由然処此段御許容被<sub>レ</sub>仰付<sub>二</sub>候ハ、論も無<sub>三</sub>御座<sub>二</sub>候得共若扨格之議共有<sub>レ</sub>之候ハ、良藏之心を留<sub>メ</sub>候儀も勞而無<sub>レ</sub>功ニ立到り可<sub>レ</sub>申痛心仕候就<sub>ル</sub>者御一門様方以下大臣之面々各各家臣五七人ツ、も被<sub>二</sub>差遣<sub>一</sub>候ハ、不日ニ数十人之募兵出來妙ニ可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之奉<sub>レ</sub>存候処夫と申も此儀可<sub>二</sub>申入<sub>一</sub>御方も不<sub>レ</sub>存候幸ニ 執事御領内にてハ先年<sub>ノ</sub>其目論見被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>在御上<sub>ニ</sub>御練兵ニも可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>先程之思召之所<sub>ニ</sub>候へも何卒此機ニ乘<sub>レ</sub>し五七人程被<sub>二</sub>差越<sub>一</sub>度奉<sub>レ</sub>存候良藏心積りにてハ百日位<sub>ニ</sub>の事を竟て返り度申居候<sub>ニ</sub>付費用<sub>也</sub>也<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>差事<sub>ハ</sub>有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>乍<sub>レ</sub>去出納之吝謂<sub>レ</sub>之有<sub>レ</sub>司<sub>一</sub>孔子之時<sub>ハ</sub>已<sub>ニ</sub>然<sub>リ</sub>何卒武備最要在<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>一舉<sub>ニ</sub>候間有<sub>レ</sub>司<sub>一</sub>之論御打破奉<sub>レ</sub>願候以上

十八日

寅次郎拜白

下執事

(東京市益田兼施氏藏 校合濟堂)

五〇七

來島又兵衛に贈る

安政五年十月十九日

松陰在萩松本 來島在江戸

久絶<sub>二</sub>消息<sub>一</sub>候得共榮太<sub>・</sub>杉藏<sub>と</sub>より毎々御様子申來且來原<sub>ノ</sub>毎々相同彌<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>國御勉勵之由奉<sub>ニ</sub>欣然<sub>一</sub>候御地柱も御同僚<sub>ハ</sub>被<sub>レ</sub>擢候由一段之儀奉<sub>レ</sub>存候玄瑞<sub>・</sub>松洞<sub>不</sub>ニ一方<sub>ニ</sub>御厄介<sub>ニ</sub>相成候段奉<sub>レ</sub>謝候陳<sub>レ</sub>此度杉藏事<sub>一</sub>一先彈正殿家來<sub>ニ</sub>致度被<sub>レ</sub>申候故<sub>ハ</sub>片山氏<sub>ヘ</sub>養子<sub>ニ</sub>遣ス策<sub>ニ</sub>御座候<sub>一</sub>先日榮太<sub>マ</sub>中村貫<sub>二</sub>作<sub>一</sub>之事申遣候所色々御周施被<sub>レ</sub>下候由然<sub>ハ</sub>彼<sub>ハ</sub>已<sub>ニ</sub>中村庄七<sub>一</sub>ニ同意<sub>ニ</sub>て早速<sub>ニ</sub>事相定<sub>リ</sub>申候<sub>一</sub>右<sub>ニ</sub>付何卒杉藏早々<sub>ニ</sub>帰國<sub>一</sub>致候様彈相頼<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>促候間此内<sub>ノ</sub>水戸事<sub>ニ</sub>る組<sub>ノ</sub>者<sub>一</sub>一統被<sub>二</sub>差留<sub>一</sub>急<sub>ニ</sub>出足<sub>一</sub>來不<sub>レ</sub>申訳<sub>ニ</sub>共御座候<sub>ハ</sub>、御周旋を以<sub>レ</sub>帰國出來候様御取計奉<sub>レ</sub>頼候儒官<sub>ニ</sub>際<sub>レ</sub>され候事<sub>ニ</sub>付杉藏定て<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>滿<sub>も</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候得

共是<sub>ニ</sub>ハ色々議論有<sub>レ</sub>之委細<sub>ハ</sub>高杉<sub>・</sub>尾寺<sub>と</sub>談置候事<sub>ニ</sub>候間<sub>ニ</sub>子被<sub>レ</sub>仰合<sub>一</sub>杉藏御諭早々御返<sub>シ</sub>奉<sub>レ</sub>頼候杉藏も儒官<sub>ニ</sub>相成候<sub>ハ</sub>、君側へも出<sub>ラ</sub>レ候事<sub>ニ</sub>付心<sub>一</sub>一杯の直諫も出來可<sub>レ</sub>申又遊学<sub>ノ</sub>事も思通り<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>參候若強<sub>ル</sub>不<sub>レ</sub>滿<sub>ヲ</sub>申候<sub>ハ</sub>、杉藏<sub>ハ</sub>諫死<sub>不</sub>得<sub>レ</sub>仕男<sub>と</sub>品目<sub>ニ</sub>致候間左様心得候<sub>ヘ</sub>と御傳可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候此地<sub>ニ</sub>て彈相も杉藏<sub>ガ</sub>屈セヌ時<sub>ハ</sub>如何<sub>セ</sub>んと被<sub>レ</sub>申候<sub>ハ</sub>、小生<sub>ヘ</sub>御任せ被<sub>レ</sub>下候様<sub>ニ</sub>と相答候も杉藏<sub>ハ</sub>天晴諫死<sub>ノ</sub>出來<sub>ル</sub>男<sub>と</sub>品目<sub>ニ</sub>仕候故<sub>ノ</sub>事<sub>ニ</sub>御座候又學問未熟<sub>ナ</sub>ト、託言仕候得共杉藏<sub>ガ</sub>學問識見<sub>ハ</sub>絶渡苦心<sub>ニ</sub>策<sub>ニ</sub>る彈相も小生<sub>も</sub>最早品目<sub>ニ</sub>致候故<sub>今</sub>更外飾も謙退も出來不<sub>レ</sub>申候何分學問<sub>ノ</sub>高下<sub>ヲ</sub>論居<sub>ル</sub>今日<sub>ニ</sub>てハ無<sub>レ</sub>之候間萬々御頼仕候<sub>一</sub>○來原も本月九日<sub>ハ</sub>長崎行仕候<sub>一</sub>○京師へ去月廿八日<sub>ハ</sub>組<sub>ノ</sub>もの六人罷登<sub>リ</sub>候へ共未<sub>タ</sub>何<sub>カ</sub>る形勢も不<sub>レ</sub>申來<sub>ニ</sub>日夜相待居申候<sub>一</sub>○御地水戸<sub>ノ</sub>義舉九月十七日尾寺<sub>ノ</sub>書同廿七日榮太<sub>・</sub>杉藏書<sub>ニ</sub>て相分<sub>リ</sub>候得共水戸人<sub>ノ</sub>婦國<sub>ノ</sub>段<sub>ハ</sub>何共得<sub>ニ</sub>其意<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>申候今<sub>ニ</sub>歸<sub>リ</sub>候<sub>ハ</sub>大事去矣<sub>ニ</sub>御座候尤も婦國<sub>ノ</sub>之上再舉<sub>ノ</sub>積歎誠<sub>ニ</sub>氣遣敷御座候<sub>一</sub>○玄瑞<sub>ノ</sub>月性傳<sub>ノ</sub>事度々申來候得共所詮延引仕候土谷<sub>ガ</sub>月性傳符中<sub>ニ</sub>入候間御一見<sub>之</sub>末玄瑞<sub>ヘ</sub>御渡可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候私<sub>ノ</sub>書事<sub>ハ</sub>他人奪去來<sub>タ</sub>返<sub>リ</sub>不<sub>レ</sub>申候又藤森<sub>ヘ</sub>清狂吟稿叙<sub>ヲ</sub>頼候儀至極同意<sub>之</sub>段旁玄瑞<sub>ヘ</sub>御傳<sub>ヘ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候<sub>一</sub>○飯田正伯<sub>ハ</sub>奇僧<sub>ニ</sub>御座候間追々御推挽奉<sub>レ</sub>頼候<sub>一</sub>○京師六人<sub>ノ</sub>者共<sub>ハ</sub>京<sub>ノ</sub>形勢申來候へも趣次第少々覺悟も御座候得共未<sub>タ</sub>何事<sub>も</sub>不<sub>レ</sub>申來<sub>ニ</sub>付此節<sub>ハ</sub>死<sub>ニ</sub>様<sub>ニ</sub>相成居申候加<sub>之</sub>來ル廿三日<sub>ハ</sub>小学生<sub>ノ</sub>試讀<sub>ト</sub>カ申此節<sub>ハ</sub>日夜童子蠅聚何事も廢<sub>シ</sub>居候付諸友<sub>ヘ</sub>ハ別書不<sub>レ</sub>仕<sub>い</sub>つま有志之人々皆々御小屋<sub>マ</sub>て出來候事<sub>ニ</sub>付乍<sub>レ</sub>憚<sub>レ</sub>此書ナ<sub>リ</sub>モ御見せ奉<sub>レ</sub>頼候

九月十七日尾寺<sub>ノ</sub>書來無<sub>レ</sub>答

同廿七日杉藏<sub>・</sub>榮太<sub>同</sub>斷同斷

安政五年

松洞近來書來不<sub>レ</sub>申候生テハ居候哉

玄瑞東下ノ後未タ書來不<sub>レ</sub>申候半井頼ニ周施ノ様子感心贈ニ書度候へ共于<sub>レ</sub>今因循仕候飯田正伯最早着ニ可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候一書ヲ贈リ度候へ共此度ハスベ<sub>レ</sub>仕候桂ハ盛ニ可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之奉<sub>レ</sub>察候右之人々ハ乍<sub>レ</sub>憚御傳言奉<sub>レ</sub>頼候

十月十九日

寅次郎拜白

又兵衛様

杉藏帰国何分急務御座候併此書達候迄ニハ出足出来可<sub>レ</sub>申哉

此度豊前ノ嫡子益田豊三郎入学萬事寄組ノ愚持方ヲ打破リ居寮生何事も平士ニ同シク仕候様決着仕候是も大事中之小愉快と奉<sub>レ</sub>存候淡水ハ盛ニ今日も 御参堂にて勤王論致<sub>ニ</sub>講尺<sub>一</sub>候由使<sub>ニ</sub>公上感泣<sub>一</sub>タリと申事

(東京市掛取三郎氏藏 校合濟卿)

五〇八 大原三位に贈る

安政五年十月廿一日

松陰在蘇松本  
大原在京郡

本月十八日入江杉藏帰國早束囚室來訪具ニ 執事御父子様之御忠憤承及相共悲涙数行ニ及申候先<sub>レ</sub>是伊藤傳之助と申もの上京之節賤著時勢論一篇、上ニ 執事ニ書一通相託候處不<sub>レ</sub>圖も少々故障之儀有<sub>レ</sub>之于<sub>レ</sub>今不<sub>レ</sub>達ニ 座下<sub>一</sub>候由苦心此事ニ奉<sub>レ</sub>存候依<sub>レ</sub>之此度改る同志友白井小助と申もの差登せ候間御一見御許容被<sub>ニ</sub>仰付<sub>一</sub>候ハ、囚奴ノ赤心遂一可<sub>ニ</sub>申上<sub>一</sub>候実ニ天下之時勢誠ニ切迫ニ相成候所幕府ハ北条等之覆轍最早踐不<sub>レ</sub>申只々穩便ニ志士仁人ノ何共取留ムヘキ廉

無<sub>レ</sub>之様ニ仕只<sub>レ</sub>の日月を延し其内ニ外夷ノ交リハ日ニ堅り候る何共手出し不<sub>ニ</sub>相成<sub>一</sub>様ニノ果ハ神州ヲ擧テ外夷ヘ渡

し候策ニ被<sub>ニ</sub>相考<sub>一</sub>候當ニ是時ニ坐あ<sub>レ</sub>ら勤王之諸侯ノミ御頼ミ 思召候る者洞轍之鮒<sub>レ</sub>江漢ノ救ヲ待候トカ申様にて誠ニ事ニ及さる事ニ御座候二百六十大名ノ有様大氏御聞及も可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遊実ニ浩嘆ノものニ御座候右ニ付囚奴等志ヲ決シ一策ヲ建居候間何卒小助御同道にて御父子様御西下之策御定メ被<sub>レ</sub>遊度奉<sub>レ</sub>存候左候ハ、同志之士申合政府ヘ號哭哀求仕大臣ノもの遂ニ拜謁ニ 主人赤心申述義唱仕らせ可<sub>レ</sub>申事萬々不<sub>レ</sub>諧候時ハ同志之士のミ相結候るも一方ノ義舉ハ屹々其効相立可<sub>レ</sub>申と囚奴ノ苦衷此ニ決居申候無<sub>レ</sub>左候る者只々御親望被<sub>レ</sub>成候る者河ノ清メル<sub>一</sub>待如クニ御座候小助只今出足書ヲ求候事甚急迫にて心事萬ケ一も不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>申上<sub>一</sub>遺憾萬々ニ御座候得共關筆仕候渾附<sub>ニ</sub>小助口陳<sub>一</sub>候也

十月廿一日

草莽囚奴  
吉田寅次郎矩方百拜

大原三位卿 下執事

杉藏云 執事未タ回天詩史御覽不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遊由囚奴持本甚粗末奉<sub>ニ</sub>恐入<sub>一</sub>候得共奉<sub>ニ</sub>獻呈<sub>一</sub>候以上

杉藏へ被<sub>ニ</sub>仰聞<sub>一</sub>候三絶句<sub>一</sub>御作感吟仕候

小助上京出来不<sub>レ</sub>申此書不用相成一見御火中可<sub>レ</sub>然候也

廿二日

松陰

杉藏兄足下

(東京市野村益三氏藏 校合濟卿)



五〇九 小野爲八に與ふ 安政五年十月廿二日

松陰在萩松本  
小野在萩

先日者御除喪被<sub>レ</sub>成候由 京師ノ形勢不<sub>ニ</sub>容易<sub>ニ</sub>趣相聞候付少々御話申度事有<sub>レ</sub>之兼る慷慨之御志氣承り及候事ニ付態  
と申上候間今日カ明日ニも御來光被<sub>レ</sub>下度候萬拜眉可<sub>ニ</sub>申述<sub>ニ</sub>候以上

十月廿二日

松陰生

尙々先日認候先大人ノ碑一兩字相改候文字御坐候間其節御持來可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候以上

(外封)  
小野爲八様

松陰

\* (第四卷戊午幽室文稿、山根文學雜誌路參照)

(寫本東京市廣瀬豐氏藏 校合濟)

五一〇 ×入江杉藏より吉田榮太郎に贈る 安政五年十月廿三日

入江在萩  
吉田在江戸

十九日薄暮歸着大坂之書狀乱雜來鳥君も御推解相成兼候半と奉<sub>レ</sub>存候武人之策忽露漏政府手を下し申候勤王之藩議も水哉<sub>(評井九右衛門)</sub>之決位  
之事にて何分歎息而已ニ御坐候崎陽へ夷虜來航交易物暗夷持渡無理ニ渡候様子京師ニ<sub>(不明)</sub>候彼是幕府ハ右手にて叔慮正議を抗し何  
之廉も立ぬ申分にて左之手を尻へ廻し毎事處置をふを策と見へ申候松陰先生之事政府甚氣遣候苦念にて御坐候來原氏崎陽行へ歸り  
候ハ、愉快と思ひ候處何も面白無<sub>レ</sub>之候内藤兵衛様産物方へ誠ニ奔走ニ不堪不能<sub>ニ</sub>委曲<sub>ニ</sub>候此書狀來鳥君へ御披露可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候中谷氏  
其外都て無<sub>レ</sub>書<sub>ニ</sub> 謹言

十月廿三日

杉藏(花押)

二陳桂君へも宜敷來原君へ之御傳詞已<sub>ニ</sub>榮太早々歸<sub>レ</sub>先生之もりニふまる人斗也

榮太知己 足下

(下關市森祐三郎氏藏 校合濟)

五一 益田彈正に贈る

安政五年十月廿九日

松陰在萩松本  
益田在萩

(益田豐三郎)  
豐生も志丈ヶ上書被<sub>レ</sub>仕度存念有<sub>レ</sub>之候得共何歎心ニ不<sub>レ</sub>任故未<sub>レ</sub>果依<sub>レ</sub>之私代書仕候事

益田氏入學一条ニ付果シテ同列中俗論致<sub>ニ</sub>沸騰<sub>ニ</sub>候由是ハ固ヨリ角祐可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之と前々相分り候事ニ付今更御頓着ハ被<sub>レ</sub>  
為<sub>レ</sub>在間布候得共益田氏甚苦心之由ニ付呈<sub>ニ</sub>愚説<sub>ニ</sub>候間御采扱奉<sub>レ</sub>願候豐生自分ニハ少シモ畏避之意ハ無<sub>レ</sub>之候得共大人  
同役が難せられ頗ル困迫之由氣之毒ニ奉<sub>レ</sub>存候已<sub>ニ</sub>昨日が豐生病ヲ稱シ致<sub>ニ</sub>歸宿<sub>ニ</sub>候由何卒志ヲ折<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>申様御鞭撻奉<sub>レ</sub>  
冀候此度之舉實ニ學校興廢士風盛衰之関る處ニ御座候間是非御貫被<sub>レ</sub>成俗論御打破り被<sub>レ</sub>成候様奉<sub>レ</sub>頼候西門豹ノ巫嫗  
三人迄河ニ投して河伯ノ害ヲ除候儀誠ニ今日之良師ニ御座候先日も申上候様御政道下次第二相成候る<sub>ニ</sub>御威光相成不<sub>レ</sub>  
申實ニ恐多事ニ奉<sub>レ</sub>存候此度之論寄組一統之事も有<sub>レ</sub>之間布假令一統ト申候共必主謀可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之ニ付稽古懸之人へ被<sub>レ</sub>  
仰付<sub>ニ</sub>其主謀屹と證儀被<sub>ニ</sub>仰付<sub>ニ</sub>投河之大處置可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候西門ノ如ク三人迄投られず共俗論必崩れ可<sub>レ</sub>申候萬一豐生退館  
共致候ハ、何ノ面目ありて復同列ヲ見可<sub>レ</sub>申哉其父も又餘り人次第二相成候段如何敷何卒上ハ国家御政道ノ為下ハ御  
同族御助成之た免<sub>ニ</sub>付萬々御手段專一ニ奉<sub>レ</sub>存候以上

十月廿九日

藤寅拜白

行相臺下 下執事

一 豊生何故稱病家居ゆし候哉御詰責之事

但是ハ父へ被仰聞度候事

一 稽古懸りへ被仰付俗論之主謀御全義御詰責之事

一 此度之次第逐一被仰上公裁御受被成度奉存候事

前書之議席堂已ニ御定論可有之且小田村生ナト追々申上も可仕ニ付固不待愚論候へ共猶又縷陳仕候間御采折奉願候以上

(東京市益田兼施氏藏 校合濟堂)

五二二 某に贈る

安政五年十月廿九日頃(カ) 松陰在萩松本

益田豊三郎病氣ニ下宿仕居候由彈相病氣ニても差抑出勤仕可然段手堅被申喻候手段有之間布哉

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

五二三 小國剛藏に與ふ

安政五年十月末 松陰在萩松本 小國在須佐

天下の形勢甚切迫に相成候故態と岡部・品川二生差出し御報知申候此の内より度々江戸飛脚來り長井も歸り候未だ屹と相決し候には無之候へども尾・水・越・薩合從襲撃奸大老之策と相聞え候近日山縣半藏歸着候へば愈の儀相聞え

可申候也果して然らば天下瓜分すべき今日に付吾輩中々非可凝滞京師にて間部下總守殊の外の邪説、大意違勅の事は水戸堀田兩人の罪と申候由内藤豊後守頼に兇威を振ひ正論有志の者召捕り候由誠に可惡事に候江戸にても土州宇和島隠居の内意あり是等も黙しては居り申間敷左候へば過疑致候へば面目を天下に失ひ候事不尠政府も殊の外奮激可喜事に御座候右に付僕存念有之同志の士と相談致度半藏歸着の上は世間甚沸騰被思遣候に付其節に至りて御報知も間に合ひ不申候間旁不長死少年三四輩弊塾まで早々御遣し可然候申上殘し候事は委細二生の口述に附し候大谷茂樹に内密談じ置き候大原三位の策は奸人遮りちとゆとりが行き候其の内に江戸の事起り候へば宜敷候江戸の事不振時は必前策を果すなり

此時に相成り候上は石見へ屹と御手を下し被成智と勇と金穀と心に任せ御出させ可然候誰か一人御遣し可然候松原鐵之助・大谷巖の兩士甚壯士と見受け候此段御話可被下候大谷茂樹に別書不出候宇野・品川(精三武男)など急々出塾尤妙と存候

多事仍々不能多言也

小國剛藏様

松下塾

\* (長井の歸萩は長井雅樂傳には十月廿七日とあり、佐世八十郎日誌には廿八日とある)

(松陰先生遺著第二編所載 校合濟堂)

五一四 生田良佐に與ふ

安政五年十一月二日

松陰在萩松本  
生田在周防國大野

御歸去後絶る不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>消息懸念之至<sub>二</sub>御座候爾來京師間部ノ奸謀益深 天朝之御勢誠ニ氣遣敷候所同社中ニても色々案付も有<sub>レ</sub>之右ニ付御様子次第御上京之儀出來申間布哉相成候ハ、眞ノ一二日逗留之積ニて急々萩表御出浮被<sub>レ</sub>下候ハ、心事縷々申述度候扱又江戸も甚騷擾之間へ有<sub>レ</sub>之飛脚引續度々参り尾・水・越・薩、彦根ヲ襲ノ謀と相見候是等ニ付るも種々多端之談有<sub>レ</sub>之候得共難<sub>レ</sub>盡萬面、何卒御出府之御手段專要ニ存候若御出府も上京も六ヶ敷候ハ、其趣早々御答被<sub>レ</sub>下度候何分此書達次第何分之趣御知せ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候多用關筆

十一月二日

松陰生

生田良佐兄足下

(廣島縣相原格氏藏 校合濟)

五一五 佐世八十郎と往復

安政五年十一月三日

佐世在萩  
松陰在萩松本

(每<sub>二</sub>同意)  
六錢玉一代壹分五リ  
(十<sub>二</sub>同意)  
小銃丸 三錢一兩六匁取合四百丈ハ明日明後日之間ニハ調可<sub>レ</sub>申左候處私金無<sub>レ</sub>之ニ付何卒金子三分丈ニるも札五六十目丈ニるも早々相運候御工夫共ハ有<sub>レ</sub>之間布哉<sub>二</sub>存候赤川<sub>一</sub>に御迫立被<sub>レ</sub>成候是丈相運候得<sub>レ</sub>誠ニ仕合申候執<sub>レ</sub>以參可<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>候得共只今菜圃ニ取懸居申候間乍ニ失敬ニ寸毫申上候頓首

十一月三日

其中私も手段仕見可<sub>レ</sub>申候(以上佐世八十郎)

承知仕候三方金附上仕候

寅白(この一行松陰)

(萩市前原彦八氏藏 校合濟)

五一六 増野徳民に與ふ

安政五年十一月四日

松陰在萩松本  
増野在周防國山代

九月廿九日ノ貴書昨夜至甚晩しト云ヘシ先日僕亦一書ヲ贈レリ達スル否、衣服先日已ニ萩へ達居候也  
此度尾・水・越・薩等於江戸ニ彦根大老打毀之議起り候土州・宇和嶋二正論ノ侯幕府ノ隱居セよとの事左候へども憤懣極るへ<sub>二</sub>付右四侯ノ論ニ加る事必然此御方へも四侯ノ相談有<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>由夫ニ付長井雅樂婦國早速御直目附ニ成急ニ江戸へ行様山縣半藏御早遣ニて歸ル筈今日も着スベシ着之上大老打毀之事委シク相知<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>天下之大論是<sub>レ</sub>起ルナリ依<sub>レ</sub>之吾等同志中大ニ議論アリ早々御出萩可<sub>レ</sub>然存候運クテハ間ニ合<sub>レ</sub>申候萬面之上可<sub>レ</sub>委<sub>レ</sub>之也杉藏先日歸着榮太四五日之内歸ルベシ

十一月四日

松陰生

増野徳民生 足下

大原三位卿世子ノ詩

江南霸氣已凌夷、正是中原逐鹿時、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>英雄若<sub>二</sub>高德、與<sub>レ</sub>誰共起<sub>二</sub>勤王師、

安政五年

呼<sub>レ</sub>天慷慨涕如<sub>レ</sub>流、正是忠臣致<sub>レ</sub>命秋、生若不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>清<sub>二</sub>國恥<sub>一</sub>、死爲<sub>二</sub>靈鬼<sub>一</sub>報<sub>二</sub>君讐<sub>一</sub>、  
丈夫身死不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>仁、便是獸心人面人、博浪鉄椎今若得、擊<sub>二</sub>頑兇首<sub>一</sub>作<sub>二</sub>徵塵<sub>一</sub>、

(神戸市福本義亮氏藏 校合濟園)

五一七 周布政之助に贈る

安政五年十一月六日

松陰在萩 松本 周布在萩

此度江戸之様子傳聞仕候処薩藩起<sub>二</sub>る越前藩申合大老彦根侯打果且上國にも義舉相企候由左候得<sub>レ</sub>尾張・水戸等ハ勿  
論同意ニ可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之又土佐・宇和島等羨<sub>レ</sub>正論主張候段觸<sub>二</sub>忌諱<sub>一</sub>御隠居被<sub>レ</sub>成候様被<sub>レ</sub>蒙<sub>二</sub>幕命<sub>一</sub>候由ニ候ハ是亦同意と被<sub>レ</sub>  
察候其他平日正論之大小藩孰も此舉ニ後<sub>レ</sub>申間敷候右ニ付於<sub>二</sub>御當家<sub>一</sub>と他藩之誘迄も無<sub>レ</sub>之勤 王之御志確然<sub>レ</sub>  
る御事ニ候得<sub>レ</sub>此度之一舉ニ付下<sub>レ</sub>御願申出<sub>二</sub>るニハ不<sub>レ</sub>及謹<sub>レ</sub>御指揮相待可<sub>レ</sub>然事ニ御座候得共私共時事憤慨難<sub>二</sub>黙止<sub>一</sub>  
候間連名之人数早々上京仕間部下總守・内藤豊後守打果 御當家勤王之魁仕天下之諸藩ニ後<sub>レ</sub>を江家之義名末代ニ輝  
候様仕度奉<sub>レ</sub>存候此段被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>御許容<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>下候様奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候以上

近日之内同志中申合有<sub>レ</sub>之願候積りニ御座候前以申<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>及事ニ候へ共兼<sub>レ</sub>辱<sub>二</sub>下交<sub>一</sub>候事ニ付不<sub>レ</sub>敢外<sub>レ</sub>之申上候俗吏  
へ御沙汰ハ必御無用ニ御座候得共御同志之人へハ兼<sub>レ</sub>御申合被<sub>レ</sub>下候様奉<sub>レ</sub>頼候

六日

寅次郎

政之助様

(東京市益田兼施氏藏 校合濟園)

五一八 前田孫右衛門に贈る

安政五年十一月六日

松陰在萩 松本 前田在萩

別紙願事近日発候様同志中追々盟約仕置候右ニ付左之件々御周旋奉<sub>レ</sub>願候

一クールホール三門百目玉筒五門三貫目鉄空彈廿ウ百目鉄玉百合藥五貫目貸下<sub>レ</sub>之手段之事

一京師へ傳<sub>レ</sub>之輔・悅之助兩人早々御遣被<sub>レ</sub>下度奉<sub>レ</sub>頼候事

但梅田一件之手都合之為甚差急申候事

一長崎へ組ノ者一人肥後へ組ノ者一人御遣相成候様奉<sub>レ</sub>頼候事

肥後人愛敬左司馬先日來り候ニ付一通り之事申約置候是へ一書注進遣度候

殿様御隠居之風説専ら行<sub>レ</sub>候此時ニ當り政府上平穩論有<sub>レ</sub>之候者義士之心実ニ不穩ニ付別紙願事御許容相成候様御  
申合奉<sub>レ</sub>頼候此書ハ前廣差出候筋ニハ無<sub>レ</sub>之候得共兼<sub>レ</sub>之儀故懸<sub>二</sub>御目<sub>一</sub>前条之件々ヲモ御頼仕候訳ニ御座候俗吏原へむ  
ぎと御見せハ御断仕候尤周翁へも一通示置候也

六日

(外封)  
前田様

松陰

※佐世八十郎日記に、十一月二日愛敬松下村塾に来るこゝろ

(東京市益田兼施氏藏 校合濟園)

五一九 佐世八十郎に與ふ 安政五年十一月六日 松陰在萩 佐世在萩

山縣半藏も愈昨夜帰着之由左候得共彌決定と被<sub>レ</sub>察候右ニ付千萬奉<sub>ニ</sub>恐入<sub>一</sub>候得共尊大人懸<sub>ニ</sub>御目<sub>一</sub>御相談申上度儀御座候間相成事ニ御座候ハ、今日之内御來光被<sub>レ</sub>成遣<sub>ニ</sub>候様被<sub>レ</sub>仰上<sub>ニ</sub>度奉<sub>レ</sub>頼候以上

六日

(外封)  
佐世八十郎様  
要急

松陰生  
(萩市前原彦八氏藏 校合濟)

五二〇 土屋蕭海に與ふ 安政五年十一月七日 松陰在萩 土屋在萩

近來ハ大絶消耗候御文候御佳適賀々、陳縣子歸着天下國家之事不<sub>ニ</sub>容易<sub>一</sub>趣致<sub>ニ</sub>痛心<sub>一</sub>候依<sub>レ</sub>之吾輩一舉之企有<sub>レ</sub>之委細赤<sub>(赤)</sub>淡水ハ話候最早御承知も被<sub>レ</sub>成候哉右ニ付老兄平日之御交情ニ候間蕭何之任御願申度都合百金計之事ニ候間市井義俠之人ニ御諭說被<sub>レ</sub>下候様ニハ參り申間布哉此段吾等朴訥武人之能をる所ニ無<sub>レ</sub>之候間偏ニ老兄ヲノミ御願申候也 七日

大氏御兩國六十萬人之士民ニ等ニ分チ致<sub>ニ</sub>盡力<sub>一</sub>度候漢ノト式ガ智者ハ出<sub>レ</sub>智勇者ハ出<sub>レ</sub>勇有<sub>レ</sub>財者出<sub>レ</sub>財ト申<sub>レ</sub>るま倣む候て  
一 持重論家

- 一 擲<sub>ニ</sub>一命<sub>一</sub>人
- 一 募<sub>ニ</sub>金穀器械<sub>一</sub>人
- 右之通ニ御座候以上

土屋老文伯  
要急

松陰生  
(東京市西村啓一氏藏 校合濟)

五二一 中村道太郎に與ふ 安政五年十一月八日 松陰在萩 中村在萩

今朝瑞益<sub>(松島・赤川)</sub>・淡水被<sub>レ</sub>枉其後反復思惟仕候得共誠ニ憂念之至ニ御座候間何卒拜顔仕度候夜間事々敷御座候得共白晝御來光ハ甚嫌疑ニ候間今夕カ無<sub>レ</sub>據ハ明夕ニても囚室御來訪奉<sub>レ</sub>待候私も今朝ハ病氣ニて舊囚室ニ歸り保養仕候也

八日

中村道太老兄  
足下

松陰生  
(長府町藤村茂氏藏 校合濟)

五二二 某に與ふ 安政五年十一月十日 松陰在萩 松本

彦根へ御直言之儀ハ実ニ肝要ニ可有<sub>レ</sub>之候得共江戸御下向被<sub>レ</sub>遊候上ニてハ実ニ危殆事ニ候京師御居付ニる書信反復

被遊又ハ御直目附等毎々御使者とノ被差遣ニ候事妙ニ可有之候  
 吾輩之疑惧仕候所ハ表向ハ公儀御首尾御繕と稱し御早登リニ相成京師へハ御立寄無之直ニ御下向ニ相成大老へ兩三  
 遍計ノ直言書被贈大老答振も墓々シカラサレハ致方ハナシトテ夫ありニ相成正義ヲ天下ニ立事不能ハ 天朝へ  
 對し 先公へ對し不ニ相濟ニ況ンヤ承久ノ如ク賊軍ニ共御加リ被成候ハ、臣子之面目何如スヘキ  
 彦根へ是迄度々之御直言相成候事ニも無之只一度のみにて夫も慥之御答無之由左候得彦根ノ味酸カ辛カサツバリ  
 知き不申覺束(ヤ)たき事ニ被考候

甲寅ノ歲阿部へ之御正論之覆帳も御勘合可被成候渠誠實温言ニテ吾ヲ欺き候時ハイカンセン激烈赫怒セハイカンセ  
 ン空吹ク風ノ如クセハイカンセン此三條いつきニ出候との御定算有之候哉

江戸にて正論ヲ發シ候共尾・水ノ應甚無覺束ニ候

彦根正論ニ歸し候共誤レ君之臣ハ誅戮ハ勿論彦候も輕典ナレハ自ラ蟄居相願候も濟可申哉併夫にてハ人心ニ厭申  
 間布候

間部ノ罪何如、(水野土佐守)水土州ノ隱惡ハイカン餘ノ閣老堀田・大田ノ如キも其分にてハ難閣是等も國替以上之罪ナルヘシ其下  
 幕吏ノ事ハ姑置何如ニ輕典ト申ても彦根蟄居願にてハ濟不申候

其外閣老ニも推舉スヘキ賢侯心當付不申候イカン

外藩出、右等ノ取作舞ハ如何ニ考候も出來難ク被考候加之墨夷其外ノ應接事甚多端ニ候得共此御方へ御任被成

候樣出來可申哉

幾度考候も江戸御下向彦根御直言ハ危計ニ御座候

先達承り候處にてハ薩・越ナトノ如クニハ中々難及又其後ニ從フモ如何ニ候此御方ハ獨り立にて易爲モノヲナス  
 其手段ハ江戸へ下り彦根ヲ諫むるの前緒ヲ繼クナリ今日夜瑞益承り候處にてハ勿論京師にて諸侯合同論旨請受一  
 同東下スルトノ事左候得甚妙にて僕カ素論と不ニ相違去あゝ最初道太承りたる所ハ江戸ト号し京へ御滯ト云ヒ

中比瑞(中比瑞)淡承り候處ハ是ニ異あり前後反復不常誠ニ疑念之至ニ

(松島瑞益・赤川淡水)

寅 再拜

(須佐町松野喬氏藏 校合濟)

五二三 某に與ふ

安政五年十一月上旬 松蔭在松本

(十月廿七日)此内長井雅樂歸着引續山縣半藏歸着江戸の様子甚致懸念ニ候内赤川(又太郎直次郎カ)又次郎より承り候得は尾・水・越・薩の四

家被仰合ニ彦根大老御打果に相成候御企有之由又阿兄梅太郎前田孫右衛門より承り候説にては薩藩は大老を撃ち越  
 前は上國へ致ニ應援ニ候由右に付吾藩義舉に御後れば決て被爲在間布候得共江家社天下の先鞭に仕度且 君公様如  
 レ右危地へ一先に御出被遊候事如何にも奉恐入ニ候に付同志中申合上京仕義旗の道開可仕段一決の上各誓紙血判相  
 調不日に出足可仕覺悟に候處周布政之助儀は兼て熱懇に付願書案壹通相認差出置候文言左の通

此度江戸之様子傳聞仕候處薩摩藩發起にて越前藩申合大老彦根侯打果且上國へも義舉相企候由左候へは尾張・水戸等は勿論同意に可有之又土佐・宇和島等も正論被<sub>レ</sub>張候段觸<sub>レ</sub>忌諱<sub>二</sub>御隠居被<sub>レ</sub>成候様被<sub>レ</sub>蒙<sub>三</sub>幕命<sub>一</sub>候由に候へは是亦同意と被<sub>レ</sub>察候其他平日正論之大小藩孰も此舉に後れ申間敷候右に付於<sub>二</sub>御當家<sub>一</sub>は勿論他藩之誘ふまでも無<sub>レ</sub>之勤王之御志確然たる御事に候へは此度之一舉に付下より御願申出るには不<sub>レ</sub>及謹て御指揮相待可<sub>レ</sub>然事に御座候へとも私共時事憤慨難<sub>二</sub>黙止<sub>一</sub>候間連名之人數早早上京仕間部下總守内藤豊後守打果 御當家勤王之魁仕天下之諸藩に後れす江家之義名を末代に輝し候様仕度奉<sub>レ</sub>存候此段被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>御許容<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>下候様奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候以上十一月六日附

尤右の通相願候とも御許容は必しも受不<sub>レ</sub>申願捨に致置於<sub>二</sub>京師<sub>一</sub>事を仕損候節は他人は兎もあれ私儀は進み出幕吏に被<sub>レ</sub>召捕<sub>二</sub>候上此度の舉主命を蒙り候様の儀毛頭無<sub>レ</sub>之偏に吾々同志の士憤激に堪兼如<sub>レ</sub>此相企候段有體申立御當家に決て御厄害申間布と覺悟仕候儀に御座候然處政之助願書一見の上殊に愕然の様子にて中村道太郎致<sub>二</sub>相對<sub>一</sub>何分此様の妄舉有<sub>レ</sub>之候ては不<sub>二</sub>容易<sub>一</sub>大害引出候事に付思留り候様申論可<sub>レ</sub>然段申候に付道太郎申候は是程に思込候儀何歎格論無<sub>レ</sub>之候ては中々容易には止申間布且此舉相果候共左迄大害と申事有<sub>レ</sub>之間布段詰込候處政之助申候はかゝる上は何かは秘し可<sub>レ</sub>申實は諸藩被<sub>レ</sub>仰合<sub>一</sub>も有<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>遠大策行はれ候目途屹と有<sub>レ</sub>之候に付夫より内に此事發し候ては大策暴露の憂有<sub>レ</sub>之事に候其大策と申候は某藩は斯様某藩は斯様某々藩は斯様<sub>レ</sub>と此處政府秘中の秘 最早御手都合相調候儀の由に付略<sub>レ</sub>之に候御當家の儀は諸藩の模様振遣に見届候上江戸に御早登りと號し實は京都に御乗込諸藩一回二條の御城に暫時被<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>候筈にて此事最早年内にも發し可<sub>レ</sub>申由某承<sub>レ</sub>之申候右様大愉快の舉有<sub>レ</sub>之候上は吾輩の小策不<sub>レ</sub>入事に候併

折角思立候儀半途にして廢候譯には難<sub>レ</sub>參且身柄一人の事に無<sub>レ</sub>之故決て相止候様には難<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>候道太郎然らば延引に可<sub>レ</sub>致候由申候左候て追々辯論の上當年中は嚙止可<sub>レ</sub>申に付來正月元日よりは必相發候間左様御心得可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下又日期を延し候上は少々手都合を合せ度に付同志中一人長崎肥後へ被<sub>レ</sub>差越<sub>二</sub>義徒相語らひ可<sub>レ</sub>然又一人上國へ被<sub>レ</sub>差向<sub>一</sub>梅田一味の徒の義舉は先以當年中は相待候へと申遣度且又大砲玉藥等上より夫れと無く借用仕度段入々談合候處道太郎も

(以下略文)

(戊午兩室文箱、十一月六日上家大人玉叔父家大兄一書並嚴因紀事參照)

(松陰先生遺著所載 校合濟)

五二四 ×久坂玄瑞より 安政五年十一月十四日

久坂在江戸 松陰在松本

寒氣彌烈數先以御清康被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御凌<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>之至不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之奉<sub>レ</sub>存候二二小生碌々眠食罷在候間乍<sub>レ</sub>憚御休意可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣候一昨日大火槍邸無難併少々飛火御座候得共一舉打消申候陳天下之事勢も甚薄候得共世上之迂濶ニハ込入る者にて御座候併諸藩ハ少し眼之開シ處も有<sub>レ</sub>之候得共本藩殊<sub>レ</sub>迂遠銃陣等にも一向手及不<sub>レ</sub>申勤王トカ攘夷トカ云ハ口斗りにて両手ハよも動不<sub>レ</sub>申舌頭にて攘夷カ成者カ空手にて勤王カ成者カ今迄之勢にて迎も諸藩之右ニ出ル事決る六ヶ敷可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之甚以残念至極狭腔如<sub>レ</sub>裂御坐候富永ハ半井<sub>レ</sub>來候書にてハ三十人斗りも崎陽<sub>レ</sub>遺シ銃陣積古サスル議論有<sub>レ</sub>之由是も甚面事之様<sub>レ</sub>御座候得共長崎ハ蘭人直傳トカ申甚高大ニハ候得共諸藩人も多不<sub>レ</sub>集中々馬臺龍<sub>レ</sub>ハ打置一白鹿屯も出來兼可<sub>レ</sub>申但<sub>レ</sub>手次積古位にてハ大隊之合散進退も能々分り不<sub>レ</sub>申其上三十人も直傳ト申てハ少々之雜費にてハ不<sub>二</sub>相濟<sub>一</sub>候得ハ多人數銃陣積古として長崎ニ遊ハ甚無益ナリ不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>遣<sub>一</sub>之江戸<sub>一</sub>練<sub>二</sub>銃陣<sub>一</sub>且爲<sub>二</sub>新御殿様守護<sub>一</sub>也、然處江邸ニハ無用之輕卒輩七百餘人も罷在候得ハ大小銃陣ヲ開ント欲スレハ此等<sub>レ</sub>先稽古サスル<sub>レ</sub>シカスレハ上之金も費へ

ス且爰元西洋陣大ニ發明ふれハ決シ大益可レ有レ之被レ考候三十人今ヨ西游命下リ不レ申候ハ、輕卒細練事幾重モ御議論可レ被レ下候此  
 内水戸人鈴木安太郎來ル赤川ガ來ル處の水戸空騒ふト申送ル書簡見セ可レ被レ下候間部京師之潛言(傳カ)ふト申處大ニ泣激之躰ニ相見申候  
 水府モ此節先達ル出府之士ヲ罪スルト罪サセヌホト色々議論沸騰之由此間水戸人住谷某・大胡隼藏又一人ハ失ニ姓名ニ三人此内亡命之  
 由申包胥之積ムテ越前カ我藩ニ參ルヘシト鈴木申居タリ此事決シ不ニ相成ト雖トモ憤懣不レ得レ已策ニテ誠以氣篤ナ人物ニ相考候尾  
 寺屢來、僕益感服同志中尤可レ特男ナリ暢夫昇平業ニ入ル屢談不レ得甚以殘念、半井・飯田太盛、志道文之允此人モ此節大ニ奮發新錢座  
 ニ往來ス甚妙、其他同志中何モ健壯罷在申候何モ桂之便細可ニ申上候早々頓首

十一月十四日夜八ツ時認

二陳時氣御厭專一と奉レ存候以上 紙無餘白一閣筆

松陰先生

(原文首白にある)  
今夜も今迄木嶋翁處にて談ス甚快翁ニハ益感服

(東京市久保清一氏藏 校合濟堂)

誠拜

五二五 來原良藏に與ふ

安政五年十一月十五日

松陰・來原  
在茲松本

長井(雅樂)之返答御傳言位にて不レ得ニ要領ニ前夕決議之處不ニ一方ニ事体ニ候處假令長井非レ奸候共確報不レ承内ハ甚以致ニ懸  
 念ニ候付昨夜又々書翰相認榮太(吉田榮太郎)長井へ遣初テ得ニ要領ニ候然処長井之言ニ云四藩合從之事未々取留候事ニ無レ之候御國  
 ニ是江戸へ行彦根ヲ論せると申事不承尤も是ハ吾ガ預る所ニ無レ之ニ付周布・清水ヲ可レ致ニ弁語ニ吾ガ御用ハ 若殿様御  
 直御口上ニ假令如何ある事有レ之候共妄リ御參府等ハ必被レ遊間布との御事 殿様へ申上候処被レ遊ニ 御承知ニ候左候

得ハ御早登りと申事ハ必有レ之間布彦根へ諫争之儀ハ 若殿様ニも御疎ハ無レ之吾等も是處ニカヲ尽シ候而擲ニ一命ニ候  
 事位中々頓着不レ致ニ付餘リ輕んし吳間布と慥ニ榮太へ申聞差返候是にて長井之処ハ先致ニ落着ニ候へ共周布先日之言  
 又々不合ニ相成難ニ心得ニ直様周布へ一書遣可レ申と存候得共打返し相考候へハ人ヲ責むるハ易し自ら為ス難し周布何  
 程虛偽にて吾ヲ被レ欺候共頓着ハ無レ之只々氣遣敷ハ正月元日之吾一舉墓々敷ある間布ワレ夫のミ苦心仕候故人ヲ責  
 るハ止メニ仕候併此趣周布へ御出被レ成候ハ、一通リハ御噂被レ下此書御見せ奉レ願候以上

十一月十五日

(内吉田榮太郎筆)  
長井君之直之御言私承り候處本文之通無レ紛奉レ存候以上

榮太郎

同日

吉田寅次郎

(東京市益田兼施氏藏 校合濟堂)

五二六

×來原良藏より

安政五年十一月十五日

松陰・來原  
在茲松本

長井氏一件承知仕リ今晚御書面周布に見セ可レ申候傳言にてハ不レ得ニ要領ニとの儀御尤ヨ御座候只私より申候主意ハ殺す不レ及と申  
 事ニ御座候駿州遊學是又周布へ談論可レ仕候併し彼是と申ガ多キ故何卒速ニ運をらしと思ひ申候中谷事間ニ合不レ申殘念自力願ハ如  
 何哉兎ノ角一度足を拔て居れば其後の事が運びよく候今皇神武の詩感服名村其外同志中に見セ可レ申候愛敬の事分り不レ申面上可レ承  
 候間御忘れざるほしく候



名村一件具ニ承知分周旋可仕心得御座候

河内の手翰実ニ感心の事御座候是又周布に見セ可申今晩早くハ參上運クハ明朝參リ可申先御請迄ニ草々拜首

十一月十五日

良藏

寅次郎様

(寫本東京市吉田茂子氏藏 校合濟園)

五二七 生田良佐に與ふ

安政五年十一月十五日

松陰在萩松本  
生田在周防國大野

山根武次郎歸郷ノ便ニ託ニ此書ニ候

先達テ問屋へ一書出候間相届候や御答相待申候其後直(時山)八差出候様謀リ懸候得共是以故障有レ之候近日議論頗ニ變動有レ之候所委も毎ニ勤 王義舉之事競ヒ立申候只今之所ニテハ政府ニも大舉有レ之勢ニ候所若暴行不レ申候ハ、於レ下

同志相募十二月十五日ヲ發册と定め上國へ馳向候事ニ致ニ決ニ候戸田ノ河内紀令甚盛、須佐も可也、長崎へハ來原良藏參り壯士四五十名も參り候付此一手一方ニ當るるし肥後・柳川も追々手ヲ下し置候上國も大分面白事有レ之候右ニ付老兄出萩一寸あり共相成候ハ、萬緒御談申度存候又上京出來候ハ、御申越被レ下次第上國之都合可ニ申上候也

十一月十五日

二十一回生

生田良佐様

(周防國佐田村に在る)  
正讚寺ノ觀海ハ如何敢死ノ士智勇義俠ノ士御募出し急務ニ御座候也

(廣島縣相原格氏藏 校合濟園)

五二八 大谷茂樹に與ふ

安政五年十一月十七日

松陰在萩松本  
大谷在長門國須佐

是則有吉延之助と申例の花岡ノ奇巧大工ニ御座候栗山翁助へ致ニ相對ニ度とる罷出候間御曳合せ可レ被レ下候爲レ其如此  
十一月十七日

(候助)  
茂樹様御居合無レ之候は、石津傳右衛門様御聞き可レ被レ下候

松下塾

大谷茂樹様

(須佐町大谷實繼氏藏 校合濟園)

五二九 山田亦介に贈る

安政五年十一月十七日

松陰在萩松本

(有吉)  
延之助水車機雛形大氏致ニ成就ニ候由此上ハ何卒長崎行出來候様ニと頻ニ嘆願仕居候隨分巧思之ものニ相見候付彼地罷越候ハ、訖(蛇)と進歩可レ仕候へは素々申上までも無レ之御評議有レ之事トハ奉レ察候へ共私々申上吳候様頼候事ニ付如此申上候尤も水車機眞ニ御取立相成候事ニ御座候は、他ノ工人へ任せ切りニも難レ仕候ニ付急ニ被レ仰出ニ被レ下候ハ、人數相懸ケ早速御調可レ申ニ付其上ニ崎陽行何卒相運ヒ候様吳々御頼申上候右申上度勿々不一

十七日

寅二

含章齋先生座下

安政五年

此内ハ竹下生一書御託し被<sub>レ</sub>下奉<sub>二</sub>拜見<sub>一</sub>候御答も不<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>御無禮仕候銃陣一件ニ付拜顔仕候ハ、御談仕度儀も御座候郡司生々も心事談置候處同人出足何も<sub>レ</sub>半途のミニ御座候 以上 (下關市神代正一氏藏 校合濟)

五三〇 高杉晋作に與ふ

安政五年十一月十八日 松陰在萩松本 高杉在江戸

他見無用不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>言候

再度の教翰反復披閱御近狀杉藏・榮太抔より承り安悅仕候小生よりは一書も不<sub>レ</sub>呈御怪殺可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候乍<sub>レ</sub>去今日天下の事、實に空言にては行はれ不<sub>レ</sub>申幸に十年後まで僕も老兄も無事に存在致候ハ、其節は對暗の上屹と大計可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>商議<sub>一</sub>候へども夫れ迄は各地にて所見の儘取り行ひ可<sub>レ</sub>申自然事に成り候ハ、自から相通じて呉れる人あるべし此の事奉<sub>レ</sub>別の節一言することを忘れ残念に奉<sub>レ</sub>存候故態と申上候也松洞亞墨行の事高説の如く致候ハ、此の地にて仕組の徒發足の節容易に被<sub>レ</sub>行候事と奉<sub>レ</sub>存候乍<sub>レ</sub>去今の時勢最早墨行と申す時には無<sub>レ</sub>之様覺え候且幕吏に従行の事上より御頼みは勿論不<sub>レ</sub>宜無<sub>二</sub>左様<sub>一</sub>とも、ちと心に落着致兼候尤深念ありての事なれば格別、左もなく候へば不<sub>二</sub>面白<sub>一</sub>候小生所見如<sub>レ</sub>此尤同志士へ未だ密に致置き候故其説を不<sub>レ</sub>存老兄今一應御案じ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候松洞へも跡より詳に可<sub>レ</sub>申遣<sub>二</sub>と存候政府奸人の事御洞察一言も無<sub>レ</sub>之九月初めより數十度の往復不<sub>二</sub>容易<sub>一</sub>之書中に難<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>候へども誣妄虚偽一々落着に不<sub>レ</sub>參事のみ敢て他人へは難<sub>レ</sub>申候へども奸人上京の次第恐くも 天朝吾藩を謬<sub>レ</sub>り候様覺え候併僕が臆度なればむざと御信じは被<sub>レ</sub>下間敷候

(長井兼榮を指す)  
世子番頭爲<sub>二</sub>侍御史<sub>一</sub>上首尾是れも前の人物と同腹と被<sub>レ</sub>察候發程の節志士憤懣の事有<sub>レ</sub>之候へども夫れは先づ事解け候姿に御座候今日吾輩手を下し候處書中には實に難<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>只平昔を以て心事御推察被<sub>レ</sub>下度候世上の謗議は如<sub>レ</sub>山夫等は却て御耳に觸れ可<sub>レ</sub>申就<sub>レ</sub>謗察<sub>レ</sub>實洞識如<sub>二</sub>老兄<sub>一</sub>必能<sub>レ</sub>之耳

十一月十八日

寅白

暢夫兄足下

亞墨へ仕組に行くの罪は合せて百兩に不<sub>レ</sub>足候奸人の手先をして正論貌にて大事の妨する奴すら有<sub>レ</sub>之可<sub>レ</sub>惡の至りなり乍<sub>レ</sub>去人別三十兩づゝも貰ひ候は<sub>レ</sub>夫れで安心するなるべし

僕に山林の囚奴になれと申す人あり山林可<sub>レ</sub>娛、唯有爲之氣難<sub>レ</sub>消、人稱<sub>レ</sub>僕爲<sub>二</sub>功名家<sub>一</sub>、的切の名なり以後格別の事なくば書は不<sub>レ</sub>呈也 (松陰先生遺著第二編所載 校合濟)

五三一 某に贈る

安政五年十一月中旬頃 松陰在萩松本

此事不<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>速、唯精詳無<sub>レ</sub>遺是要

(益田)  
彈正殿ヲモ論破スベシ

周布之論愈不正<sub>二</sub>候ハ、長井・清水をも致<sub>二</sub>詰責<sub>一</sub>是も同腹にて正義必不<sub>二</sub>相立<sub>一</sub>と見定候ハ、(孫右衛門九郎兵衛)此事不<sub>レ</sub>容<sub>二</sub>少委曲<sub>一</sub>役被<sub>二</sub>差替<sub>一</sub>候ハ、松陰ノ囚奴罷出候る周布・長井ヲ縛<sub>レ</sub>し直様同志驅催彈正殿へ詰懸<sub>レ</sub>此議是非共及<sub>二</sub>御間<sub>一</sub>御裁決を受可<sub>レ</sub>申候事

尤も此節中村道太ヲ中ニ立、周布(致之助)と懸合候最中ニ御座候所此事周布大ニ秘し候故態と不ニ申上ニ候道太も秘候儀奉レ察候左候る周布彌大策無レ疑候得テ國家之幸此上も無レ之候然共恐不レ能然也此事四五日之間御待奉レ頼候周布・長井彌奸計ニ候ハ、私周布と懸合候次第ヲ書附ニ致し可ニ差出ニ付穴戸被ニ仰合ニ彈相直様御逼詰可レ被レ成候

(東京市益田兼施氏藏 校合濟堂)

五三二 小田村伊之助と往復

安政五年十一月廿日

松蔭、小田村在茲松本

快晴欣然今日ニ御出勤被レ成候哉昨夜之議如何致ニ掃着ニ候哉御案仕候扱又念ニ詩經會之事榮太可ニ申上ニ候

村塾

(吉田)

廿日

寅拜

小田村老臺 要用

未契寅

(以下同紙裏)

高許

御問訊被レ成下ニ拜謝仕候折角前夜遜齋宅ニテ議候處最早手後ニ成り申候其二者僻議論相募り拘泥之見挽回難レ仕縷々今夜可レ及ニ深話

ニ候頓首

同日

希拜

松蔭社兄

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

五三三 某に與ふ

安政五年十一月廿四日

松蔭在茲松本

富太生(岡部富太郎)ヘ之書再三拜見御懇情奉レ謝候僕怒り可レ申トハ思も寄らぬ事光秀杯の狭量ニテハ迎も大事ハ出来不レ申夫ニ付僕責書ヲ見誠ニ喜ヒ申候去あら僕案付一通り富太ヘ申合候御聞取可レ被レ下候周布對決之事ハ實ニ御同意已ニ今夕家兄周布ヘ行候故其節ノ物振次第ニテ貴兄ヲ勞し對決し御周旋御頼可レ申哉も難レ計候也

廿四日

寅白

此間レニユキヤ習行レあり隨分御存知御論可レ被レ成候

(萩市安藤紀一氏藏 校合濟堂)

五三四

×玉木文之進より藩吏某に贈る

安政五年十一月下旬

玉木在茲

……(前文圖)……容易趣ニ相考一死を決し 皇國之威武高く萬邦之上ニ卓立し大江之流澤永く千載を経て潤さる様ニ其の趣意建議之當否ハ不レ知候ヘ共赤心報國之誠ヲ種々廟堂上之御手纏を生し候趣ニ其素ガ狂姪ニおゐて其罪戾甘如レ飴存し居候事ニ付幽囚之身柄ニ有間敷事ト被レ仰付ニ候ヘハ斬首切腹レの様之御咎ニ其も安心仕少しも恨も殘念も無レ之跡ニ御座候就る於ニ私共も御沙汰次第ニ安んじ居候外致方も有レ之間敷哉と存候ヘ共御大事の折節狂姪一人之御咎メ與候も是以上之風波之端ニ其 國家之御爲不レ可レ然儀と苦心此事ニ御座候其上御心入之御教諭水之泡ニ仕候も不ニ相濟ニ相考段々示談之上彌私方に引受可レ仕ニ相決し願通被ニ差免ニ候迄之処も屏居仕他人相對等用捨之段納得仕候付御役内斷之演說前(不明)に繰り込申候尙狂姪私方に當分預ケ方之願書をも早速差出せ可レ申ニ付尖ニ御……(以下圖)

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

五三五 某に與ふ 安政五年十一月下旬 松陰在萩松本

扱々本藩の事も終に不穩事に相決申候小生事玉木叔父方へ蟄居に内輪論相定候此上は政府の處分次第に御座候至誠而不動者未之有也、小生至誠あらば愚叔も動起可申若至誠無之候は、動起申間敷假令動起不申共小生も不慮の譽天下に瀟々し恐多も拙策 九重の乙夜に入候程の儀中々千萬世々の志士仁人に面目なき事は不仕候間萬々御安心可被下候政府周布の奸猾を不除國事遂不可濟小生一命固不足言候道太先日の言に周布の此言間違なれば拙者差違可申由人を持むには無之候得共先々頼母敷存候來原も其分にては濟せ申間敷此度岡部富太郎・福原又四郎の長崎行御詮議の趣有之被差留候由是は小生より來良に通するを恐る、なるへし政府の淺智實に憤懣に堪不申候一時を抑へ候とても終には此事行詰不申して置程の腰脫良藏には無御座候何分國家の起仆此一舉に決候間周布早く機を知り退き候は、誠に平穩の處置と云ふへし

○來島・飯田の來書御一見御返奉頼候

○小田村京都遊學の志は頓によりの事に御座候處只今の勢逆も御許容は出來申間敷候へ共申上置候小生より又候書を呈候事六ヶ敷と存候へはなり

○高杉の書是は秘中の秘に候間御一見可被下候卓識人の所見不<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>候

○文稿三通御一讀可被下候

○筑前侯御參府御病氣にて御延引の由左候へは肥前は御父子御國、薩御國、而して俗論家の細川は在江戶中々卒爾に吾藩なと參府出來申間敷候時と勢と正に相會すと云ふへし  
(松陰先生遺著所載 校合濟慶)

五三六 村塾諸君に與ふ 安政五年十一月廿九日 松陰在萩松本

十一月念九日

此分小田村先生へ御見被下度候尙又昨日集會人數連名なる江戶中谷・久坂・高杉・尾寺・半井・飯田へ御遣、以來小生へ當り候手番不參様御申遣被下度候來嶋・桂ハ掃着之上にて宜候此内飯田正伯ハ彈相へ上書一通兼重へ書一通是ハ家臣ハ封シテ兼重へ贈置候彈正殿へ達候哉之内御聞合委細ハ正伯へ御申答奉頼候  
此書江戸邸吏人物論有之候也是ハ小生嚴囚已前之事をれハ加へ申之  
村塾諸君 松陰生

(此の行原本は本文後半の上欄にある) 彈相之口振を以正伯へ答書をへし

(萩市前原彦八氏藏 校合濟慶)

五三七 ×生田良佐より 安政五年十一月末(カ) 松陰在萩松本 生田在周防國大野

答吉田義卿一書草稿

良佐白、有し人自北歸、過大野邑、得先生十一月二日、同十五日兩度之手書、長路難計日、問客不食程、得展讀之運、誠以

安政五年

一三五